

1. 趣旨

市町村の災害対応力の向上や住民の防災意識の向上を図るため、東日本大震災の被災地で活動した経験を有し、自らの体験を住民に広く伝承していただける方（以下「語り部」という。）を消防庁が指定する市町村（特別区を含む。以下同じ。）に派遣し、市町村職員や自主防災組織等の地域住民に対して講演を実施する。

2. 実施結果

(1) 埼玉県 草加市（仲條 富夫）	5
(2) 愛知県 豊橋市（鈴木 秀光）	7
(3) 奈良県 生駒市（吉田 亮一）	9
(4) 滋賀県 彦根市（糸日谷 美奈子）	11
(5) 愛媛県 今治市（平山 和哉）	13
(6) 滋賀県 彦根市（糸日谷 美奈子）	15
(7) 静岡県 下田市（鈴木 秀光）	17
(8) 岡山県 倉敷市（武蔵野 美和）	19
(9) 石川県 能美市（糸日谷 美奈子）	21
(10) 静岡県 袋井市（澤島 博）	23
(11) 沖縄県 読谷村（草 貴子）	25
(12) 埼玉県 鶴ヶ島市（菊池 満夫）	27
(13) 東京都 大島町（宮本 英一）	29
(14) 愛媛県 今治市（仲條 富夫）	31
(15) 愛知県 日進市（澤島 博）	32
(16) 兵庫県 西脇市（芳賀 タエ子）	35
(17) 三重県 鳥羽市（菊池 健一）	37
(18) 埼玉県 川口市（糸日谷 美奈子）	39

(19) 兵庫県 加東市 (鈴木 秀光)	41
(20) 滋賀県 大津市 (山崎 義勝)	43
(21) 埼玉県 三郷市 (平山 和哉)	45
(22) 北海道 羽幌町 (茨島 隆)	47
(23) 石川県 能美市 (菅野 祥一郎)	49
(24) 岐阜県 輪之内町 (武蔵野 美和)	51
(25) 広島県 竹原市 (吉田 亮一)	53
(26) 京都府 京丹後市 (大内 幸子)	55
(27) 愛媛県 今治市 (糸日谷 美奈子)	57
(28) 香川県 宇多津町 (平澤 つぎ子)	59
(29) 東京都 町田市 (上野 未生)	61
(30) 広島県 熊野町 (甚野 敬司)	63
(31) 大分県 白杵市 (草 貴子)	65
(32) 東京都 東村山市 (糸日谷 美奈子)	67
(33) 富山県 砺波市 (平澤 つぎ子)	69
(34) 東京都 昭島市 (糸日谷 美奈子)	71
(35) 群馬県 みどり市 (菅野 澄枝)	73
(36) 石川県 能美市 (大内 幸子)	75
(37) 岡山県 倉敷市 (鈴木 秀光)	77
(38) 愛媛県 伊予市 (澤島 博)	79
(39) 奈良県 桜井市 (鈴木 秀光)	81
(40) 京都府 京丹後市 (仲條 富夫)	83
(41) 兵庫県 明石市 (鈴木 秀光)	85
(42) 兵庫県 加古川市 (甚野 敬司)	87
(43) 京都府 京田辺市 (宮本 英一)	89
(44) 東京都 中野区 (菅野 澄枝)	91
(45) 滋賀県 大津市 (太田 千尋)	93



(46) 香川県 小豆島町 (澤畠 博)	95
(47) 岐阜県 川辺町 (上野 未生)	97
(48) 愛知県 知多市 (茨島 隆)	99
(49) 埼玉県 深谷市 (上野 未生)	101
(50) 富山県 高岡市 (齊藤 賢治)	103
(51) 秋田県 男鹿市 (山田 修生)	105
(52) 神奈川県 逗子市 (菊池 健一)	107
(53) 東京都 稲城市 (大内 幸子)	109
(54) 東京都 八王子市 (草 貴子)	111
(55) 長崎県 小値賀町 (上野 未生)	113
(56) 埼玉県 さいたま市 (仲條 富夫)	115

報告書



開催地名：埼玉県草加市	
開催日時	令和3年8月6日(金) 13:30~14:30 令和3年8月13日(金) 13:30~14:30
開催場所	高砂小学校マルチルーム
語り部	仲條 富夫 (千葉県旭市)
参加者	市職員(避難所担当職員) 約200人
開催経緯	草加市では、避難所担当職員を指名しているものの、日頃は防災部局でない若手職員が多数を占めていること、また、令和元年台風第19号で初めて避難情報を発令したなど日頃災害の少ない地域であることなどから、災害への意識や知識、想像力の低下が課題となっている。
内容	<p>(1) 震災被害の背景</p> <p>私は、千葉県旭市で暮らしている。この地域でも、平成23年3月11日に発生した東日本大震災で震度5強を観測した。旭市では、15時03分頃の茨城県沖の揺れの被害が一番大きかった。建物の倒壊や一部の地域で液状化現象、飯岡海岸等で大きな津波の被害が発生した。旭川市では、震災前も普段から定期的に避難訓練を行っていた。しかし、大きな津波を想定しての避難所の設営などの避難訓練は行っていなかった。そのため、実際に想定を超える大津波が来たことで結果として甚大な被害が出てしまった。</p> <p>(2) 東日本大震災を経験して</p> <p>地震に限らず、災害が起きた際は、まずは自分の身の安全、家族の安全を確保することが何よりも大事である。自分の身の安全が確保出来たら、近隣の手助けやボランティアの方と協力し、自力で動けない方や子どもや女性、ご高齢の方等への対応を行う必要がある。そうしながら国や県、自衛隊といった公的機関の支援を待つほかない。</p> <p>大災害の際には、避難所が一番大切であると感じた。各避難所には被害状況の異なる地域の子どもや女性、お年寄りなど様々な方が集まってくる。しかし、避難所に集まった人の中には、周囲を気にせず勝手な行動をとる人たちがいた。また、はじめのうちは届いた物資をお互いに協力しながら配給を行っていたが、時間が経つに連れて先行きが不安になり、他人を思いやれなくなってくるという事が現場では起こりえる。</p> <p>ボランティアの受け入れは、多い時は1日に最大1,800名近くの方が来てくれた。非常にありがたいことであった。しかし、状況を把握している人</p>

	<p>が極めて少なく、お願いしたい作業や活動に対してうまく人員を振り分けることができず、ボランティアの方の協力を十分に活かすことができなかった。各地域によって被害状況や対応の方法が異なるので、各地域の責任者が状況を把握してしっかりとルールを設ける必要があった。ボランティアの受け入れ態勢を整えて指示を出すことで、よりうまく連携を図ることができたと思う。</p> <p>(3) まとめ</p> <p>想定を超える災害が起こると、誰しものが普段通りの行動をとれなくなる。自分の暮らす地域の特性を理解した上で、まずは自分自身でできる準備をしておくことが重要である。</p> <p>避難所の安全をしっかりと確保することも必要である。避難所付近に、車を駐車して万が一災害が再発生して車などが炎上した場合、二次災害に繋がりがねない。最悪のケースを想定して避難所から車を遠ざけて二次災害を防ぎ、避難所、そして被災者の身の安全を確保することがもっとも大切である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>最近の各地の水害のほとんどが、自分の地域は大丈夫という過信や、事前の備えや早めの避難をしていないがために被害が甚大となっている印象がある。自分の住んでいる地域は過去に大きな災害はないが、最悪なケースに備えて、家族で避難場所の確認や防災グッズの準備を行っていききたい。</p>

開催地名：愛知県豊橋市	
開催日時	令和3年8月7日（土） 15:00～16:30
開催場所	少年自然の家
語り部	鈴木秀光（宮城県気仙沼市）
参加者	防災危機管理課職員 市内高校に通う高校生 計30人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・本市では近年大きな災害が発生していないため、過去の災害が風化されつつある。 ・自主防災組織の高齢化や若年層の防災意識が低下している。 ・小学校や各地域に実施している防災訓練がその場だけのものとなり、定着するまでに至っていない。
内容	<p>(1) 震災の被害状況</p> <p>平成23年3月11日、14時46分頃に三陸沖で発生した地震はマグニチュード9.0という大規模なもので、東北の太平洋側に甚大な被害をもたらした。気仙沼市では震災直後、70センチメートルも地盤が沈下した。また、津波により40隻をこえる大型船が陸上に打ち上げられ、約3,000隻の漁船が流されたり、損壊したりした。そして、向洋高校では4階部分まで浸水の跡があり、およそ16～17メートルの津波が来ていたと推測される。気仙沼市での死者数は1,034人を数え、行方不明者も212人、震災関連死と認定された方も109人にのぼった。この数字は、気仙沼市全体の人口の約1.8%にあたる。被災家屋も15,815棟にのぼり市内全体の約40.9%にのぼった。震災によって、被災した事業所、従業員は全体の8割を超え、震災直前には約74,000人いた人口は、61,376人まで減少している。</p> <p>気仙沼市では、想定されていた浸水区域外である市役所前の道路まで浸水し、瓦礫で埋まり孤立した。庁舎も浸水により停電した。そのため調査や救助にも大きな影響が出た。市内で給油ができるガソリンスタンドは3か所しかなく十分な燃料を配給するにも手間と時間を取られた。ライフラインの復旧は3日ほどで回復すると予想していた。しかし、想定を超える津波被害により電柱が倒壊したり、地面がまるごとはがされて流されたりしてしまった。そのため、停電が市内全体で解消されたのは震災から2か月後、また水道の復旧に関しては3か月後であった。</p> <p>市内の避難所は最大105箇所にとぼり、1日2食の食料を提供した避難者数は20,000人以上に及んだ。大規模な震災被害だったため、コミュニティーセンターや寺院、一般住宅も避難所として機能した。救助物資について</p>

	<p>ては、震災直後からすぐに市役所から各避難所に配送した。はじめのうちは食料や水などの不安があったが、避難が長期化するにつれてプライバシーを守るためのパーテーションや床に敷くためのマット、着替える場所やシャワー、トイレなどの生活に必要な物品やスペースの確保などの必要性が高くなっていった。また、病気の方のための薬など生命に関わる物資も必要であった。提携先の製薬会社と連携しても、実際に薬が手元に届けられるのはすぐとはいかず、かなりの時間を要してしまった。各避難所では、市役所職員や大人だけでなく生徒、学生が強力な支援者となり、率先して配食の手伝いなどをしてもらい非常に助けられた。</p> <p>(2) 想定される被害と今後の心構え</p> <p>大規模な地震と津波は想定をはるかに超えており、多くの試練をもたらした。豊橋市も今後、南海トラフ地震や東海地震などの大規模な災害に見舞われることが想定される。大事なことは、過去の地震規模のみならず理論上最大限のケースを想定しておくことである。また、その震災が単独で起こるパターンだけでなく、連鎖的に、または時間差的に起こる可能性もあるといえる。豊橋市では、最大 68,215 棟もの建物被害、そして 4,733 人の死者数が想定される。これは豊橋市全人口の約 1.3%にあたる数字であり、気仙沼市での東日本大震災における死者数は、全体の約 1.8%であったためありえない数字ではない。</p> <p>今後も地震や津波など、様々な大災害が起こるということは確実である。そのような地域に住む者として、我々一人ひとりが何をしていくか、どのような準備をしておくべきか、ということは非常に重要なことであると考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>家が被災して避難所に来た人が、食料を取りにきた避難所外避難（家が無事で自宅に避難生活）する人に石を投げつける話は非常に衝撃を受けた。車中泊を含めた避難所外避難への対応について想定、検討する必要があると感じている。</p>



開催地名：奈良県生駒市	
開催日時	令和3年8月30日（月） 9:00～10:30
開催場所	生駒市立生駒小学校
語り部	吉田亮一（宮城県仙台市）
参加者	5年児童 教職員 約80名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・生駒市は、今のところ、大きな災害にあっていない。しかし、今後の南海トラフ巨大地震に対しての備えが必要である。 ・地域も含め、児童も避難を要する災害を経験していないため、地震や津波による災害はよくわかっていない。また、災害に備える意識が低い恐れがある。 ・避難場所や避難場所に至る経路について確認できていない恐れがある。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>地球上では、様々な自然災害が起こるがその原因は何か。いろいろな理由があると思うが、一つは皆さんと同じように地球も生きているということ。地球も生きているからこそ、災害も起こるということを忘れないでほしい。その上で、皆さんに災害の際には考えて行動するということの大切さをお伝えしたい。</p> <p>（2）災害に対する備え</p> <p>奈良県には、非常に多くの活断層が密集している。その中に生駒断層という断層があり、そのそばに皆さんは住んでいる。いつ、どこで、どのように地震が発生するかは分からない。地震に限らず、災害が起きた際は、考えて行動することが極めて重要である。</p> <p>皆さんの部屋は、しっかりと整理整頓はできているか。机の下に、何か物を入れていないか。地震が起こった際は、机の下には物を置かず、身を隠せることができるようにしておこう。大きな揺れが起こると、椅子や台座にキャスターがついていると動いてぶつかる可能性がある。キャスター付きの椅子などは、使わないときは必ずブレーキをかけておくようにしよう。また、窓ガラスが割れて飛び散るのを防ぐために、飛散防止フィルムというのを張りカーテンを閉めておくこと。そして、タンスや本棚が倒れてきて下敷きになることがある。突っ張り棒を使い、固定して揺れでタンスや本棚が倒れないようにしよう。</p> <p>教室などの部屋の点検方法がある。部屋に入ったらまず部屋の真ん中に行くこと。そして、各面ごとに向いてどのような物が置いてあり、どのよう</p>

	<p>な危険があるか、予測するようにしよう。</p> <p>地震が起きた際には、学校にも危険がたくさんある。廊下は避難通路であり、避難する際に邪魔になるようなものは、廊下に置いてはいけない。登下校にも危険がたくさんある。狭い道や歩道が多く、揺れでブロック塀が倒れてくることがある。また、道路が割れて穴ができることもある。昼間であれば確認できるが、夜間で電気がない状態では確認することは難しい。トランス電柱、自動販売機、看板など上から物が落ちてくる可能性があり、注意しなければならない。落下物から体や頭を守るには、ランドセルの蓋の金具を開けて蓋で頭、首筋を覆い、体を丸めて守るようにしよう。</p> <p>備蓄品は、少なくとも1週間分の備えが必要であり、できれば10日分が望ましい。季節ごとに準備するものも異なってくる。揺れが収まったらすぐに使う防災用品6点セットというのがある。厚手の靴下、靴、携帯ラジオ、ヘッドライト、防犯ブザー、雨具をナップザックに入れて、常に枕元に置いておこう。</p> <p>(3) 東日本大震災を経験して</p> <p>避難をする場所はどこか地域によって異なると思うが、まずは一人一人が事前に避難所のルートや現場を確認しておくことが大切である。留守番をしていて、誰もいないときに地震が起こった際は、一人で避難所へ避難しなければならない。災害が起こった際には、地域の方々が協力して避難所を設営してくれる。避難所に行かずに亡くなった人もたくさんいる。どこが安全かということをよく考えて行動してほしい。</p> <p>「いつも皆が助け合い、協力をして命の大切さと人を思いやる気持ちで仲良く暮らし災害に勝ちましょう」。是非、この言葉を約束してほしい。そして、皆さんは地域の一員であることを決して忘れてはならない。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>今後、本校では地域の方と共に避難所までの避難マップを作成する予定である。今回の講演が児童にとってそれらのいいきっかけづくりになったのではないかと感じた。</p>

開催地名：滋賀県彦根市	
開催日時	令和3年9月15日（木） 10:50～12:40
開催場所	彦根市立西中学校
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	中学一年生 約118名
開催経緯	<p>当市では、南海トラフ巨大地震による最大震度6強の被害が想定されている。</p> <p>当学区は、歴史的背景から彦根城築城の際につけかえられた河川や琵琶湖によってつくられた低地が多く、河川氾濫や地盤の脆弱性等の心配がある。また、旧城下町の名残として木造密集住宅、狭あい道路が多く延焼危険度が高い上、住宅地の道幅が狭い場所も多く、災害時には救急車両が通れない事態が想定され災害への対策が必要と考えられる。</p> <p>本校では、地震に対する避難訓練や水害に対する避難訓練や、防災学習計画を立案し、訓練や学習を行っているが、災害に対応できる街づくりを防災の観点から生徒にもう一度じっくりと考えさせたい。</p>
内容	<p>(1) 釜石市という土地と、釜石東中学校での取り組み</p> <p>東北地方の太平洋側に位置する岩手県のなかで沿岸南部にある釜石市では、明治三陸地震津波(1896年)、昭和三陸地震津波(1933年)という2度の津波被害を受けた歴史がある。また、政府から30年以内に震度6弱以上の地震が起こる確率が75%以上であると発表されていた。そのため2009年から防災教育を強化。釜石東中学校では、防災マップ作成、救急搬送や応急処置、水上救助、炊き出し等の学習、安否札1000枚の配布を実施した。</p> <p>(2) 東日本大震災の発災時について</p> <p>平成23年3月11日14時45分ごろ、震度6弱の地震が発生した。地鳴りが聞こえ、職員玄関から駐車場に出たが、その間にも揺れが大きくなり、渡り廊下が大きくたわんでいた。高台に避難所とする介護施設があり、走って逃げた。この時、釜石東中学校に在籍していた生徒は全員が無事に避難していた。これまでの歴史と、災害の危険性を日頃から教育していたこと、避難所の想定をしていたことが実を結んだのだろう。</p> <p>しかし、最終目的地となる施設に到着し海を見ると、大きな音と共に砂煙が迫ってくる光景が見えた。災害時、この施設まで逃げることは想定していたが、その先は未知でパニックに陥った。「逃げろ！死ぬぞ！」と叫ぶ声が聞こえて我に返り、今度は山へと走り出した。</p>

	<p>(3) 東日本大震災、その後の避難所生活から学んだこと</p> <p>このような経験を通して、私は“過去の出来事から災害について学ぶこと”が重要だと感じた。きちんと頭に残っていれば、楽しく学んでもかまわない。また、知識を共有することで、地域を動かすことにも繋がる。災害時、怖いから逃げようと声を上げることも周囲を巻き込む手段になる。実際、震災当日「小学生たちが逃げている姿を見て自分も逃げようと思った」と話す地域住民もいた。</p> <p>被災者の心理状況には段階がある。避難所についてすぐの感情や感覚が鈍る時期は、疲れているはずだが、お腹が減ることはなかった。被災者同士の連帯感が高まる時期には、生徒たちが率先して避難所運営を行う姿が目に入った。交代でトイレ掃除を行いつつ、ラジオや掲示板で避難情報や炊き出しの場所などを伝え、別の避難所同士でも連携を取るようになった。まわりとの格差が見える時期には冷たい言葉を投げる人もいたが、前を向ける時期になると復興支援に来てくれた方を励ます看板を作るといった行動が増えた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>これまで災害や津波について他人事のように感じていたが、お話を聞く中で大勢の方が亡くなられたこと、災害が恐ろしいものであることを実感した。また災害は発生直後だけではなく、避難所に避難した後や家に戻ってからも、電機やガス、水道などのライフラインに問題が起こることで生活を困難にすること、そしてその大変さを感じることができたと思う。</p> <p>今回の講演で学んだことを忘れずに、今後は自分自身の問題として災害や避難した後のことについて考えていきたい。</p>

開催地名：愛媛県今治市	
開催日時	令和3年9月17日（金） 13:30～15:00
開催場所	今治市立朝倉中学校 体育館
語り部	平山 和哉 （福島県いわき市）
参加者	朝倉中学校生徒及び教職員 約100人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・近年大きな災害が起こっていないため、生徒の災害に対する危機意識が低い。 ・避難行動について経験が少なく、知識が不足している。 ・学校として地域の防災・減災にどう関わっていくべきか学ぶ機会が不足している。
内容	<p>(1) 地震や津波に対する基礎知識</p> <p>いわき市内は最大で8メートルの津波があった。学校の体育館よりも高い津波がきた。富岡町双葉郡富岡町というところは21メートル超の津波が来襲した。気象条件や満潮干潮の状況にもよるが、津波は第1波目よりも第2波目、第3波目と数を重ねるごとに高くなっていく。いわき市内最大観測8mを観測した津波は、満潮時刻と重なった午後8時だった。地震発生からは約5時間が経過しているが、これが最も高い津波だった。</p> <p>地震が起きて時間がたったとしても、津波警報が出ている海岸や川の河口付近には絶対に近づいてはいけない。</p> <p>(2) 東日本大震災時の火災被害</p> <p>いわき市では3月11日に7件の火事が発生した。その後1週間で9件、合計16件の火災があった。なかでも3月11日15時40分に発生した火災は、さまざまな要因から火災の発生から鎮火までは約16時間を要した。焼失面積は1万5000平方メートル。焼失家屋が約50件と、過去に類を見ない規模の被害になった。</p> <p>私がこの119番通報を受けた。経験則から通報内容で火事の規模はある程度予測可能だが、この通報ではこれほどの被害になるとは予測できなかった。</p> <p>私たちは被害が拡大した理由を分析し、4つの要因を挙げた。1つ目は道路状況である。四倉消防署から現場に通じている道路が、津波で流されてきた廃材や船で塞がれ、消防自動車が迅速に向かえなかった。迂回には約30分を要した。2つ目は断水である。大きな火災により水道管がほぼ使えなくなっていたため、道路にある消火栓から水が出ず、防火水槽から水を</p>

	<p>くみ上げて使用した。そのため、水の量が足りなかった。3つ目は瓦礫である。通常、家と家の間は建築基準法によってある程度距離が確保されている。しかし地震や津波によって家が倒壊したため、家と家の隙間がなくなり、火が伝わりやすくなっていた。4つ目は余震である。消火活動中も、断続的に大きな余震があったため、津波警報は継続して出されていた。人命救助を最優先にするため、消火活動中であっても、消防団の方と一時的に避難をして作業を中断せざるを得ない状況にあった。</p> <p>(3) 災害に備えてできること</p> <p>災害に備えて様々な物資を確保しておく必要がある。自宅で食料や毛布を用意しておくだけでなく、その他に、燃料物資やスコップなどの道具、また自動車を持ち上げるジャッキなども備えておくのと役立つ場面がある。また、普段から家族や身の回りの人と、災害時の行動について話しておくことも重要である。</p> <p>その他にも、避難場所の確認と、家族の合流ポイントを予め決めておくことで、混乱を防ぐことができる。瓦礫等で道がふさがれていることを想定し、何通りかの避難経路を確認しておくことも有効だろう。普段から一人ひとりが災害に対して向き合うことが、被害の軽減につながるため、常に災害の可能性を考慮して備えていくべきだ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>今回の講演では、地震だけでなく津波や火災による被害について知り、深刻さを改めて目の当たりにした。震災が発生してから個人にできることは少なく、日頃の取組や備えが重要だと感じた。正しい知識を覚えることが命を守ることに繋がることを意識して、今後も防災に取り組んでいきたい。</p>

開催地名：滋賀県彦根市	
開催日時	令和3年9月21日（火） 13:30～14:30
開催場所	彦根市立南中学校
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	彦根市立南中学校 約750名
開催経緯	本市では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されている他、巨大地震が引き起こされると想定される活断層が県内に多く通っていることから、地震への備えは重要かつ喫緊の課題である。また、阪神淡路大震災から四半世紀、東日本大震災から10年が経過し、具体的な被害をリアルタイムに知らない子どもたちにとって、震災を経験された方からの生の声を聴き、被害状況やそこからの教訓を体験的に知ることが大変意義あることである。そのような機会が持っていないことが課題である。
内容	<p>(1) 震災以前の防災教育について</p> <p>東日本大震災が発生した平成23年3月11日当時、私は岩手県釜石市の釜石東中学校で理科教諭として勤務していた。釜石市は岩手県沿岸南部にある町で、釜石東中学校は釜石市の北部に住む中学生が通学している。釜石東中学校では避難訓練を実施していたが、各クラスが並んで非難する形式で行っていた。しかし東日本大震災の発生時は、放課後だったため、ホームルームを行っているクラスもあれば、教室で卒業式に向けて寄せ書きをしている生徒も、部活の準備をしている生徒もいた。そのため訓練時とは異なり、各々が個々で避難を行った。</p> <p>校舎から約800メートル離れたデイサービスセンターの駐車場が避難場所として指定されていたため、平時から合同で避難訓練を実施している近隣の小学校と釜石東中学校で避難を行った。また、釜石市は1896年の三陸地震で大きな被害を受けていたため、防災教育に力を入れており、避難訓練以外にも、総合学習の時間を使い防災学習を行っていた。三十年以内に震度6弱以上の自身が起こる可能性が75パーセント高く予測されていたこともあり、地震や津波への意識は高かったとも感じている。これらの取組があったため、大地震と津波から身を守ることができた。</p> <p>(2) 東日本大震災当日の情景</p> <p>揺れが起きたとき、私はホームルームを終えて職員室にいた。職員室にいる教師の携帯電話から緊急地震速報のアラームが一斉に鳴り、その後地鳴りが聞こえた。駐車場に出ると、ワゴン車が飛び跳ね、渡り廊下が揺れているのが見えた。立っていられる状況ではなかったため、近くにいた生徒</p>

	<p>と腕を組みながらうずくまってやりすごした。避難所に指定されているデイサービスセンターへ到着してからも余震も続いていたため、危険を感じ、さらに高いところにある避難所へと移動した。最終避難場所に到着して海の方角を見ると、砂煙があがって近づいてくるのが見えた。逃げろという大きな声に従い、振り返らず走り出した。舗装されていない山道を進み、上まで登ると、眼下では自分たちが住んでいる町が波にのまれていくのが見えた。その後、雪が降っているなか、市役所近くの避難場所まで歩いた。廃校になった中学校の体育館に集まり寒さに耐えながら夜を越した。電気もなく、周囲は闇に包まれていた。体育館には約 2000 人が避難していた。寝る場所もなく、仮設トイレも一台しかなかった。飲み水すら危うい状況が続いたが、自衛隊の到着後は、電気が通ったり炊き出しが始まったり、環境が改善した。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>釜石市では死亡者 888 名、行方不明者 154 名という非常に大きな被害がでた。しかし、学校管理下にあった児童、生徒は全員無事だったから「釜石の奇跡」と称されることとなった。全国の小中学校と比べて、釜石東中学校では様々な防災教育があった。このことが被害の軽減に大きく貢献したと考えられる。</p> <p>内陸に住んでいる方も、海へ遊びに行く機会や、将来沿岸部への移住をする可能性がある。私自身が内陸で生まれ育ち、釜石市に移住してから防災に関する教育に触れた。そのため、沿岸部にある学校だけでなく、内陸の学校でも津波を含む防災教育を行う必要を強く感じている。</p> <div data-bbox="512 1429 911 1682" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="938 1429 1377 1682" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>今回の講演を通して、防災教育の重要性を強く感じた。避難訓練を行うだけでなく、常にそれだけでは十分ではないという視点を持って防災について考え続けたい。</p> <p>貴重な経験を伝えるだけでなく、自身も防災士の資格を取得し、活動を続けている語り部に改めて敬意と感謝を示したい。</p>

開催地名：静岡県下田市	
開催日時	令和3年9月28日（火） 19:00～20:30
開催場所	下田市民文化会館
語り部	鈴木秀光 （宮城県気仙沼市）
参加者	市職員 約100名
開催経緯	<p>下田市は静岡県第4次地震被害想定において、津波による大規模な被害が想定されており、災害対応については職員の中でも徐々に浸透しつつあるが、復興計画の整備や発災直後から復興に向かうまでの業務に関するノウハウや蓄積が無く、大きな課題となっている。</p> <p>特に市内にある銀行の支店の多くが津波浸水域内に位置しており、支払業務への遅れなどが予想されている。国からの補助の受入や事業者への支払い等直後の事務手続きに関する講話を依頼したい。</p>
内容	<p>(1) 自治体からみた震災</p> <p>2011年3月11日、マグニチュード9.0の地震が起き、気仙沼市内で震度6弱を観測した。災害復旧において自治体が果たす役割は非常に大きいものであることは間違いない。しかしながら、市役所をはじめとした公的機関も大きな被害に遭っている状況だった。被災していない部署でさえ、業務に戻れるようになったのは、電気が復旧した3月17日以降だった。市民からは様々な要望が寄せられ、なかには葉がほしいという緊急性の高いものもあった。通院されている方や、糖尿病など定期的な投薬が不可欠な方々にとっては、命に係わる問題であるにも関わらず対応しきれないことに、非常に悩んだ。特に透析患者への対応は非常に困難だった。被害の少なかった病院の待合室に簡易ベッドを並べるなど、臨時の対応を余儀なくされた。</p> <p>また、地震や津波は、人的なものだけでなく、データや資料へも被害をもたらした。当時からすでに紙媒体ではなくデータで資料を保存するという方針はあったものの、CDやDVDといった物理媒体に保存し、金庫にしまうという運用がなされていた。これはクラウド上への保存は、役所の資料を外部に持ち出すことになるのではないかという懸念があったためである。そのため多くのデータを失ってしまった。</p> <p>(2) 物資の入手について</p> <p>瓦礫で道路が埋まり、移動ができなくなった。市役所も孤立してしまい、救助に向かえない状況に陥ってしまった。また、交通が麻痺している状態</p>

	<p>だったため、物資の確保も困難を極めた。もちろん避難所で配るための備蓄もあったが、多くの物資を安定的に供給するためには、企業との連携が欠かせない。実際に大手企業とも協定は結んでいたものの、企業の倉庫も被災し、予定していた物資が手に入らない事態に陥った。分散備蓄の重要性を痛感した。平時から職場や家庭での備蓄を呼びかけておく必要性もある。食料が無事だった場合でも、停電でレジが使えないため、ひとつひとつを手で計算して会計するなどの例もあった。こうした事態に備えて、ある程度の現金の用意は必要である。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>気仙沼市は全国そして全世界から非常に多くの支援を受けた。他の自治体の方々に同じ思いをさせないためにも、我々が得た教訓を伝えていくのは被災自治体の責務だと考えている。支援としては、現地の状況がニュースで報道された後は、非常に多くの物資を送っていただいた。ただ、受け入れ側の体制が整っていないと、せっかくの物資も、ただ開いているスペースに積んでいくだけしかできない。集積配送がシステム化できていないと、個々の職員が車で避難所まで運ぶような不安定な運用を続けざるを得ない。今回の震災時では県が各運送業者に連絡し、分配するシステムができていた。このような事例については今後の災害発生に向けて是非参考としていただきたいと考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>現地で対応にあたった方の言葉には重みを感じられた。災害対応に関しては、食料の備蓄や緊急連絡先の把握など、様々な取組があるが、この対策を充実させるだけでなく、俯瞰してシステムが機能するように考える必要性を感じた。</p>


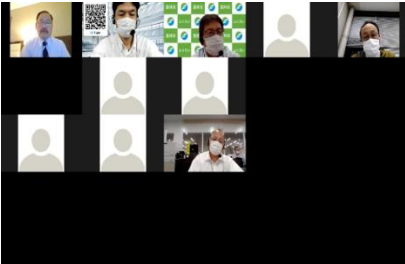
開催地名：岡山県倉敷市	
開催日時	令和3年10月12日（火） 13:40～15:10
開催場所	倉敷市立黒崎中学校 体育館
語り部	武蔵野美和 （岩手県陸前高田市）
参加者	生徒・教職員 約100名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺が土砂災害警戒区域であり、また海岸沿いのために津波の危険性もある。そのため、各自がより防災意識を高くもつ必要がある。 ・地域住民は高齢者が多く、低年齢層が少ない。低年齢層が果たすべき役割が大きいことの意識付けが必要である。
内容	<p>(1) 震災発生時の陸前高田市について</p> <p>私が住んでいるのは、岩手県陸前高田市という、人口でいえば2万4000人ほどの小さな市である。海岸沿いに面した部分が少なく、市の中心に大きな川が通っている。かつて川から中州が生まれ、そうして出来た平野に人が住み始めたことで栄えた歴史があり、震災時は川の近くに市役所・学校といった主要な建物や住宅が集中していた。</p> <p>市内には災害について学べる防災センターがあった。また過去の津波記録なども残されていたが、災害防止に繋がる対策は講じられていなかった。</p> <p>(2) 東日本大震災時の状況</p> <p>地震発生から40分ほど経った頃、気仙川を火事のような煙と砂埃を上げながら津波が遡り、市全体を襲った。津波の高さは高田第一中学校で15.5m、市民体育館で15.8m、県立高田高校では17.6mを記録。市役所や消防署などの公共施設は全壊。線路の橋げたが飴のように捻じ曲げられ、2km先まで流されたほどの威力だった。</p> <p>川の近くに建物が集中していたことから、多くの市民が建物を片づけている最中に津波に遭遇。津波を予測し真っ先に高台や建物の屋上へ逃げた者は難を逃れた。しかし津波が来ることに気づけなかった者や、地震に耐えられた建物を見て油断した者、市民体育館や防災センターを避難所と勘違いし逃げ込んでしまった者も多く、正しい情報が浸透していなかったことで被害が拡大した。</p> <p>当時私は陸前高田市立中学校で生徒の送迎に来た保護者の対応をしていたが、川沿いの施設に勤めていた保護者は送迎が困難な状況であった。その後中学校は市内で一番大きな避難所として市民を迎え入れた。赤十字や自衛隊が支援本部を構え、校庭には仮設住宅が作られ、多い時で1500名の</p>

	<p>市民が避難生活を送った。しかし、学校の再開が困難な状況となってしまった。</p> <p>(3) 生徒たちの姿と、災害状況から得た教訓</p> <p>不自由な避難生活を助けたのは、学びの場を失った中学校の生徒たちだった。彼らは「学校生活を送れない代わりに自分たちがここで出来ること」を考え、壁新聞や掲示板を作り日々の情報を発信した。さらに清掃・子供たちの遊び相手・動けない者の御用聞きなども率先して行い、避難所で過ごす多くの人を励ました。</p> <p>この経験を通して、私は1人ひとりが「災害が起きたらどう動くか」ということを常に考える意識が必要だと強く感じた。住んでいる場所や置かれている状況を見て、どう避難するのが安全か考える。また自宅が安全である場合には、備蓄を十分に準備する。ハンデのある人や意思の疎通が難しい人にどう避難経路や危険を伝えるか想定する。人によって最適な避難方法・できることは違うのだから、【「自分はこうやる」という心意気が（災害発生時の安全な非難に備える）0次避難につながる】ということを感じていただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>陸前高田市立中学校では今回の災害を振り返り、防災計画作りや避難所運営をシミュレートできるゲームの立案など、土地の知識と経験を活かした様々な取り組みを行った。今後は中学校だけでなく市全体でも防災意識を深めることは必須。教える人・教わる人の絆を作り、防災の知識を地域で身に付けられる取り組みを進めていきたい。</p>

開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和3年10月24日（日） 10:30～12:00
開催場所	能美市防災センター
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	約100名
開催経緯	<p>あらゆる生活シーンに防災があるという考えで、世代、ジャンル幅広く様々な分野の切り口から各種防災啓発を試みているところですが、過去、災害発生する頻度が少ない又は県民性からの起因か、行政に安全を委ねることによる安心感の確保により、「正常化偏見」といった心理的バイアスが生じてしまい、防災意識の醸成に繋がっていない場面が見受けられる状況となっています。災害伝承をいただくことにより、災害時のリアリティな想像を巡らし、現在の地域の姿(リスク)や生活行動と比較しながら、地域や家庭での防災のあり方を考える好機となり、災害を自分事としてとらえ、自他への知恵袋として発展していき、大きな効果が期待できるものと考えます。</p>
内容	<p>(1) 釜石東中学校での取組</p> <p>私は岩手県の中学校で理科教諭として10年間勤務していた中で、東日本大震災を経験した。今までも釜石市は津波の被害を何度も経験してきた地域であるため、小・中学校では、総合学習の時間を利用して防災に関する様々な取り組みを行っていた。私が勤めていた釜石東中学校では、小・中学校合同の避難訓練の他、救助訓練や炊き出し体験などを、地域の方々を講師として定期的実施していた。この取り組みのおかげで、児童・生徒たちは、大地震と津波から守られたといえる。</p> <p>(2) 東日本大震災の当日</p> <p>平成23年3月11日の14時45分、三陸沖を震源として発生した地震が釜石東中学校を襲った。学校では、ホームルームを終えて部活動の準備をしている時間帯だったので、皆バラバラの場所にいた。このため点呼も取れないまま、各自の判断で第一避難所に向かって走った。学校から約800m離れた第一避難所には、隣の小学校と合わせて1000人ほど避難してきていたが、さらに400m高台の第二避難所に避難した。第二避難所が最終避難場所に設定されていたので安心して時計を見ると15時15分、地震から約30分経っていたが余震は続いていた。その場から町の様子は見えず、海側から低い地鳴のような音と砂煙のようなものが近づいてくるのが見えた</p>

	<p>が、すぐに何なのか分からなかった。近くの先生が「逃げろ。死ぬぞ。」と叫んでようやく、砂煙のようなものが津波の水しぶきであることに気づいた。私たちはさらに高台に避難するために第二避難所の敷地外に出ると、道路の下のほうから黒い津波が迫っているのが見えた。国道の下は水に飲まれ、雪も降っていたので、この場に留まるわけにはいかなかったが、訓練の想定を超えた状況に話し合いは時間を要し、辺りは薄暗くなっていった。国道を通ることはできなくなっていたので、一週間前に開通したばかりの高速道路を歩いて釜石市内に向かうことにした。釜石市役所についた頃には真っ暗になっていた。脇の廃校となっていた中学校の体育館で約2,000人が、3月11日の夜を過ごした。</p> <p>(3) 避難生活まとめ</p> <p>震災2日目、内陸の中学校へ避難場所を移し、地域から布団や食料の支援をいただくとともに、自衛隊の発電機による電力の供給や炊き出し、道路の復旧、ラジオによる情報発信等で徐々に避難生活が改善されていった。班を作り係分担したこともいい結果につながったと思う。</p> <p>釜石市では、近い将来、7割以上の確率で大規模な地震が発生することを誰もが認識していたにも拘わらず、当時の人口3万人のうち、888人の方が亡くなり、154人の方が行方不明となった。しかし、発災時学校にいた小学生中学生については全員が無事だった。これは「釜石の奇跡」としてメディアで報道されたが、子どもたちは、地震があったら津波が来ること、津波は学校の3階まで30分で到達すること、走って逃げても追いつかれることを誰もが認識しており、だからこそ、指示を待つことなく、みんな走って逃げたのだ。</p> <div data-bbox="512 1473 927 1783" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="954 1473 1358 1783" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>災害が起きた時間に地域にいるのは誰か。時間に応じてその場にいる人々が動けることが重要であることを痛感した。また自分が地域にいるときに災害が起きたら何ができるのか、ということを考えさせられた。</p>



開催地名：静岡県袋井市	
開催日時	令和3年10月28日（木） 18:00～19:30
開催場所	袋井市役所(教育会館等)
語り部	澤島 博 （千葉県四街道市）
参加者	袋井市役所職員 約 100 人
開催経緯	<p>行政職員は誰もが災害対策本部であり、「危機管理部局の職員でないからわからない」という答えを住民は望んでいない。</p> <p>災害時には訓練以上に次から次へと、処理事案が飛び込んでくることを災害体験者から生の声を聴きたい。</p>
内容	<p>(1) 地盤の緩さが問題視されていた浦安市</p> <p>千葉県浦安市は東京湾の一角を人工的に埋め立てて造られた街である。このため地盤が軟弱で地下水位が高く、長周期地震動では液状化現象が発生しやすいという特徴があった。さらに浦安市は東京湾に飛び出した形になっていることから、災害時に孤立しやすい土地でもあった。しかし、当時の住民たちはおしゃれで若い街を自慢に思う一方、地盤の脆弱性に注目できていない人は多くなかった。</p> <p>(2) 東日本大震災発生時の被害状況</p> <p>東日本大震災の発生時、浦安市にある住宅地の液状化現象は日本最大規模だった。全国の液状化家屋被害の3分の1が浦安市に集中した。地下の土砂が吹き出し、地盤が沈下し、住宅が傾いた。上下水道、ガス、電気、道路といったライフラインへの被害も深刻だった。</p> <p>また、避難者のトラブルも多数発生した。避難所運営訓練が実施されていなかったため避難者の市役所依存、対応職員の不慣れ、自治会との連携不足が浮き彫りになった。その影響で、市民対応窓口の設置や、ホームページ、SNS での情報開示の遅れが発生。その結果市役所には苦情の電話が殺到し、1 時間以上も受話器を持って謝り続けるという状況が生まれてしまった。</p> <p>いち早く対応したのは自衛隊だった。翌朝早くから給水活動を開始。ライフラインの応急復旧を随時行いつつ、いつまでに復旧するのかを市長自ら発信することで、市民の不満も少しずつ解消されていったのである。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p>

	<p>これらの経験から市役所では、災害発生直後の情報発信が最も大切だと学んだ。そのためには情報を見える化できるシステムと、日頃からの連携が欠かせないと考えている。また、災害時に開設したボランティアセンターについて、土壇場で設置をしても統率することが難しいため、現在浦安市ではボランティアセンター事務局を常設し備えている。</p> <p>当時災害対策本部の活動は、自治会やマスコミにも公開していた。これが市民からの信頼回復につながり、復興の方向性を発表した際に一斉にそちらに向かって動くことができたと感じる。最大の被害である液状化現象に対しては、浦安市液状化対策技術調査対策委員会を設置。土木建築地盤工学の日本を代表する研究者が参加し正しい再生復興に向けて取り組んだ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>いつどんな災害が起こるかわからないなかで、常に市民を守る行動をする覚悟が必要だと感じた。いざという時に後悔しないよう、職員や自治会と連携を取り、きちんと備えていこうと思う。</p>

開催地名：沖縄県読谷村	
開催日時	令和3年11月4日（木） 19:30～21:00
開催場所	読谷村文化センター中ホール
語り部	草貴子 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織、自治会、赤十字奉仕団、民生委員児童委員、 消防団、福祉施設等 100人
開催経緯	<p>本村は内陸部地域において自主防災組織の結成が課題となっている。結成に向けて、内陸部の後方支援の役割について学び、自主防災会の必要性について認識していく必要がある。</p> <p>近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識を高める必要があり、既存組織の育成強化が求められている。</p>
内容	<p>(1) 震災時の宮城県仙台市泉区について</p> <p>私が住んでいるのは、仙台市泉区。泉区東部に位置する市名坂東町では、平成20年に女性が中心となって町内会を設立した。特に防災に力を入れており、平成22年に完成した集会所は、災害時に避難場所として機能する施設を意識して設計された。復旧の早さを考えたオール電化、障がい者用含め2か所のトイレを設置、必需品一式の備蓄など、災害時でも普段通りの生活を送れる準備を行っていた。</p> <p>(2) 当日の状況と避難生活について</p> <p>震災当日、私は小学校の卒業式に出席していた。その後、家電量販店での買い物中に被災。立ってられないほどの強い揺れが襲い、店内はガラスの割れる音や悲鳴が響いていた。外では周囲の電柱が倒れそうになり、車が上下に大きく動いている恐ろしい光景が広がっていた。泉区は内陸のため、幸いなことに津波被害はなかった。</p> <p>集会所には女性や子供など100名が避難。町民でない方も受け入れた。その後、避難者の中からリーダー・サブリーダーを決め、町内会は補佐に回る体制を整えた。避難生活中は毎日温かいコーヒーを淹れ、全員と会話で交流を図った。電気は2～3日、水道は3～4日、ガスは1か月程度で復旧した。子供たちは私が区役所で得た給水車などの情報を瓦版にし、町内へ広報。高校生は子供たちの勉強サポートや、子守を担当。各自が率先して協力しながら避難所解散までの日々を過ごしたが、避難生活は誰もが初めての経験だったため思わぬトラブルも多く、想定不足を強く感じた。</p>

	<p>(3) 東日本大震災から得た教訓と新たな取り組み</p> <p>防災のためには規則・訓練・備蓄が大事だし、想定外を考えるのも重要だ。だが、決まりや子供・男女などの属性にとらわれず、個々人が「私の役目」という想いを持って行動することが大事であると強く感じた。「1000年に1度」と呼ばれる大震災の中、それぞれが自分の役割を懸命に果たしていたことで、厳しい現実を乗り越えることができたからだ。</p> <p>避難所の解散後、私は「町内会に所属していない方」を災害から守る対策を始めた。加入は任意とはいえ、町内会に入っていない人が被災時に支援を受けられない事態があってはならない。主に行ったのは、マンション住まいで未就学児がいる若い家族を中心とした育児支援と、おもちゃ図書館(ずんだっこ)の開設。これらの活動が功を奏し、町内会への入会者は増加した。</p> <p>(4) 今後、私が取組を強化したいこと</p> <p>いつ災害が来るかはわからない。だからこそ、いかなる時も仲間と自分を信じ、地域と歩んでいけるよう備えることは重要だ。私は自身の役目を考え、平成25年に地域の組織団体と「避難所運営委員会」を作った。現在、初代事務局長として邁進している。防災活動の充実と地域への理解を広めるため、今後もこの取組を強化していきたいと思っている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自主防災会の設立支援、既存の自主防災会の強化 ・ 参加者からは、東日本大震災の被災地での現実が伝わった。良いところも悪いところも含めて本音で伝えてくれたところがよかった。という声が寄せられた。

開催地名：埼玉県鶴ヶ島市	
開催日時	令和3年11月6日（土） 9:00～11:00
開催場所	鶴ヶ島市役所 庁議室
語り部	菊池満夫 （岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織、施設管理者、避難所担当職員
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・近年大きな災害を経験していないため、災害対策本部の設置実績が少ない。 ・人事異動に伴い災害対策本部員も半数近くが変更となり、経験値が低いことから大規模災害時における行政運営に課題がある。
内容	<p>(1) 震災前の陸前高田</p> <p>東日本大震災発生時、私は岩手県陸前高田市の企画部長として災害対応に従事していた。小さな市であるため、世帯数は約 8000、人口数は 2 万 4000 人程度であった。市の正規職員は 295 人いた。太平洋に面した地形であり内陸部は平地と山地に大別される。当時は 90%の確率で宮城県沖地震が起こると言われていたため、東日本大震災発生時、これが噂の宮城県沖地震かと思った。海岸部の防潮堤の高さは 5.5 メートルあり、昭和 35 年のチリ地震による津波高を考慮して設計したものである。地震発生 3 分後の気象庁による大津波警報では津波高 3 メートルと予測されていたので、まさか津波が堤防を越えてくるとは思っていなかった。</p> <p>(2) 震災時の被害状況</p> <p>平成 23 年 3 月 11 日、マグニチュード 9.0 の大地震が発生した。最大津波高は 17.6 メートル、浸水面積は 13 平方キロメートルであった。午後 3 時 14 分、気象庁は 6 メートルの大津波警報を出したが、その時点で市役所庁舎は停電し、その情報を耳にすることはなかった。午後 3 時 26 分の時点で津波が堤防を越えて市街地に押し寄せ、2 分後には水没した。午後 3 時 30 分、気象庁は 3 度目の大津波警報を津波高 10 メートルと発表したが、既に津波の襲った後であった。市役所庁舎では屋根・屋上部分に避難をして、ここで 227 名が助かった。近くにある 3 階建ての市民会館は水没。避難ビル・教育委員会の事務所・確定申告の受付として指定されていたため、ここでは市民 130～170 人が犠牲になってしまった。陸前高田市全体の死亡・行方不明者数は 1760 人、総世帯 99.5 パーセントが被災した。市の正規職員は 68 人が犠牲になり、庁舎は全壊、行政機能が崩壊した。このため、学校給食センターに災害対策本部を設置した。その後、仮設住宅・仮設トイ</p>

	<p>レの設置や支援物資の受け入れ・配布、マスコミ・来訪者対応、土地区画整理など市の復興・再建に取り組んでいったが、そのたびに多くの問題に直面し解決していくことに多くの時間を要した。</p> <p>(3) 震災から得た教訓</p> <p>震災の検証を行い、その中で得た教訓を3点お伝えしたい。まずは、何よりも避難が重要だということ。津波の前に避難した人の8割は助かったため、自分の命を自分で守ることが一番大切である。そして、避難所に逃げたら終わりではないということ。一時避難所に避難したにもかかわらず亡くなった人が300~400人いた。一度逃げても、「次に逃げるとしたら」という想定をして、避難をしていただきたい。最後に、公的な役割を持つ者の安全の確保について。避難誘導を行った多くの市職員が犠牲になった。市役所の脇に老人福祉施設があり、複数の職員は当日そこで集まっていたお年寄りを助けに行き、亡くなってしまった。その経験から津波到達予測時間の10分前には高台に避難するというルールを決めて、周知している。災害はいつ起こるか分からないため、起こってしまった時には柔軟性を持って対応し、被害を最小限に抑えることも大切であるが、自分の命を守るということは忘れないでいただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>いざ災害が発生したときの対応として、大変参考になった。また、自分の命を守りながら、しっかりと災害対応にあたるよう、市民の安心安全に努めていきたい。</p>

開催地名：東京都大島町	
開催日時	令和3年11月7日（日） 19:00～20:30
開催場所	大島町開発総合センター
語り部	宮本英一（千葉県旭市）
参加者	各地区自主防災組織、関係機関等 100人
開催経緯	<p>多数の犠牲者を出した平成25年の伊豆大島土砂災害より7年が経ち、避難情報を発令しても、避難者は年々減少し、避難に対する意識は低下していると考えられる。</p> <p>また、地域コミュニティが希薄化するなか、自主防活動は一向に活発にならない状況である。しかも、避難所では新型コロナウイルス感染症対応も必須で、マンパワーが不足することは明らかである。このため、早急に住民の自助、共助、避難に対する意識向上を目指す必要がある。</p>
内容	<p>(1) 災害に対する警戒が薄かった千葉県旭市</p> <p>私の住んでいる千葉県旭市は比較的災害の少ない土地だ。江戸時代に津波の被害を受けた経験はあるが、古文書に残されているだけで町民に伝えられることはなかった。津波に対してなんの警戒もなく日常を過ごしていた市民が突然被災したのである。旭市は九十九里浜の東の端に位置し、比較的平坦な土地。東日本大震災の当時、私は旭市内の地区の区長をしていた。</p> <p>(2) 東日本大震災当時の様子</p> <p>震災発生時、旭市の広い範囲が震度5強の地震に襲われ、津波が繰り返り起こった。千葉県の防災管理協会によると津波の高さは7.6mにも及んだ形跡があったという。家屋が流されてしまった人もおり、多くの人が一時避難所に避難した。津波による建物の倒壊や道路の封鎖、文化財への被害なども甚大だった。多くの方は一度目の津波で避難をしたが「もう大丈夫だろう」と家に戻り、二度目の津波に流されてしまった。私自身、地震の瞬間は車に乗っており、揺れが落ち着いたころには自宅にいた。家から海が見えるが、特に避難はせず「家の前の堤防を越えることはないだろう」と思っていた。津波警報は鳴っていたが、道路を片づけたりして過ごしていた。1度目の津波から約1時間後、大きな津波が発生した。避難しようとしたが、当時86歳だった母親の姿が見えずに探していると、私たちの所まで津波がやってきて、激しい水の流れに飲まれてしまった。かろうじて流されている屋根の残骸につかまり、近くの家を乾いた服や敷布団を確保、暖を</p>

	<p>取った。津波が落ち着いたのちに家族で合流し、避難所へ向かった。</p> <p>(3) 東日本大震災、津波の被害から得た教訓</p> <p>私が今回の経験を通して一番反省したことは、大津波警報を受けても「自分だけは大丈夫」と避難をしなかったことだ。災害は、場所や人を選ばずやってくる。自分や家族が絶対に被災しないとは限らない。自分の命は自分で守らなければならないのだ。万が一のとき、自分の家族を守りながら地域のためにどういった行動ができるのか、日頃から考えておくことが大切である。また、市の動きとしても、被害範囲が狭かったことから津波が起きたことを知らない職員が多く、市民への対応が遅れるなどの苦情も多く寄せられた。事前の備えと、共有が大切だと学んだ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>講演を聞いて、災害は他人事ではないと感じた。災害が発生したらどうなるかを職員全員で想像して、どういった動きをすればいいか、足りない備蓄はないかなどの確認をしようと思う。</p>



開催地名：愛媛県今治市	
開催日時	令和3年11月10日（水） 13:25～15:15
開催場所	今治市立国分小学校 体育館
語り部	仲條富夫 （千葉県旭市）
参加者	国分小学校6年生 33人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・6年生の防災学習で、写真や動画で震災の被害を学んだが、東日本大震災の体験談、教訓や被災した方の気持ち、復興への願いを感じる事が難しいため、実体験を聞かせてほしい。 ・実際に被災した方や復興にかかわった方の生の話を聞くことで、震災からの復興を自分のこととしてとらえさせたい。
内容	<p>(1) 東日本大震災発生前について</p> <p>震災前、私は社会福祉協議会の会長を経験し、お年寄りの面倒を見ていた。震災時は千葉県旭市飯岡におり、防災訓練も行っていたにも関わらず、私は200メートルほど津波に流されてしまった。なんとか助かることはできたが、その時の反省を込めて、災害伝承10年プロジェクトの語り部を行っている。地元では江戸時代にあった大津波を記録した石碑が立っている。富士山の爆発により火山灰で農作物に被害も出た。そういった災害経験を教訓にして、神社などを高い場所に設置するなど、防災に対する知恵を持っていた地域である。</p> <p>(2) 震災発生時の状況</p> <p>金曜日の午後2時46分、東北で地震が発生した。千葉県旭市飯岡に最初の津波が到達したのはその1時間遅れである。さらに3時間後、高さ7.6メートルの大津波がやってきた。私の家は海岸近くにあり、目の前は堤防だ。だから、津波が来ることもすぐに分かるし、早めの避難を心がけていた。しかし、津波によって流されてしまったのである。災害の怖さは誰よりも理解していたつもりだった。しかし、周りのお年寄りは大丈夫か、などと様子を伺いながら避難したために一歩出遅れてしまった。津波の威力は並外れており、13tある消防車をいとも簡単にひっくり返す。水は簡単に物を流してしまうということを改めて実感した。</p> <p>その後、私は避難所で過ごすことになるのだが、1日に1700人ものボランティアがやってきた。しかし、指揮できる市職員の間人がおらず、ボランティアを勝手に動かすことはできなかったため、多くのボランティアには帰ってもらうしかなかった。</p>

	<p>(3) 震災を経験して得られた教訓</p> <p>みなさんにお伝えしたいのは、命の大切さ。そして、早めの避難に勝るものはなしということ。生死を分けるタイムリミットは72時間である。そのためには、災害による被害をできるだけ少なくする自助・共助・公助の考え方が不可欠だ。その中で私が最も大切だと考えているのは「自助」である。まずは自分の身を自分で守っていただきたい。自分の身を守らなければ、近くで助けを求めている人も助けられない。先生の指示を待たずに、各自がバラバラになって高台へまず逃げるとのこと。公助は必ず来るけれど、行き届くまでには数日かかるもの。だから、生き延びるためには事前に水や食料などの備えをしておくことも重要である。また、普段から地域のコミュニティづくりを行い、地域を良く知る人がいざという時に指揮できる体制を整えておくとうい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>自分の命を守ること。これはとても大切な考え方であると感じる。家族の安否確認や誰かを助けに行き行って亡くなってしまうケースはとても多い。だからこそ、まずは一人ひとりが「自助」という意識を持って行動できるよう、子ども達にも指導していきたい。</p>

開催地名：愛知県日進市	
開催日時	令和3年11月11日（木） 13:30～15:30
開催場所	日進市役所 本庁舎 第2会議室・第3会議室
語り部	澤島 博 （千葉県四街道市）
参加者	日進市役所職員 約70名
開催経緯	日進市では東海豪雨以降大きな災害に見舞われておらず、職員の防災意識が低下しており、災害時における避難所開設の経験が少ないことや災害時の災害対策本部体制下での災害対応の経験が少ないことが課題である。このため、自治体における災害対応についての職員向けの講話をしていただきたい。
内容	<p>(1) 震災被害の背景</p> <p>愛知県日進市は南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、最大震度6強が想定されており、地域全体での対策が必要である。特に軟弱な地盤地域では液状化が発生する可能性がある。私が震災当時にいた千葉県浦安市では液状化を始めとする問題が多数発生した。浦安市は昭和40年以降に東京湾の海面一角を人口的に埋め立てた地域である。豊かで元気な土地である一方、地域的に孤立しやすいことに加え、液状化現象もしやすい土地であるという脆弱性がある。実際に東日本大震災時には、二度の長周期振動で住宅地の液状化が発生し、地盤沈下、建物の傾斜、地盤の側方流動、地下構造物の浮き上がり、地下の空洞化、また生活インフラの被害が深刻となった。</p> <p>(2) 震災の教訓</p> <p>震災発生後、約1カ月続く避難所を開設することとなり、約1万人の避難民が押し寄せる事となった。避難所では運営体制の未整備、避難者の依存心、対応の不慣れ、自治会の協力を得られなかったこと、そして避難所の集約や閉鎖に理解が得られないなど、職員への不満や苦情が相次いだ。この経験から自治会や避難民による避難所運営の促進や、避難所ごとの開設運営マニュアルの作成、住民の啓発などが必要であると教訓を得た。</p> <p>また災害対策本部の設置に関しても、指示待ちになっている職員が散見され、職員による職務理解の不足や被災情報収集と共有の手続きへの不慣れがあり上手く機能しなかった。災害対応事務局と各部のタイムテーブルの作成や、情報把握・共有の見える化、被災者目線を忘れないようにすることなどが大事である。</p>

	<p>その他ボランティアの受け入れに関しては、準備が整わないまま受け入れたことによる混乱が発生した。情報共有や指揮命令系統を整えることが重要となってくる。</p> <p>(3) 総括</p> <p>総括として2つ伝えたい。まず、「防災は愛」である。阪神淡路大震災から26年の月日が流れたが、この災害は都市や人口密集地でのことであり、当時はライフライン遮断や通信情報断絶等を市民の力で復旧復興へ繋げた。このような経験があったにもかかわらず、東日本大震災では多くの被害を受けた。防災をすることは、大切な人を失わないようにする愛である。</p> <p>また、「備える事で救える命」がある。地球温暖化が進み、洪水が発生しやすくなっているうえ、地震活動も活発化していつ起きてもおかしくない状況である。それをまず市役所がちゃんと認識する必要がある。市民・自治会ともに、何かあったとしても悔いの残らないよう、国や県の支援、市民自治会の協力も得ることで備えや家族の理解を得ておくことが大事である。</p> 
開催地より	<p>お話を伺う中で、災害時の初動イメージを掴むことができたと感じている。今後、災害が起こる可能性が非常に高いことを理解し、災害対策本部設置訓練に取り組んでいきたい。</p>



開催地名：兵庫県西脇市	
開催日時	令和3年11月12日（金） 14:00～15:30 令和3年11月13日（土） 10:00～12:00
開催場所	1日目：西脇市役所 大会議室 2日目：西脇市市民交流施設 つながるスタジオ
語り部	芳賀タエ子 （宮城県南三陸町）
参加者	1日目：市職員 50名 2日目：自主防災組織 35名
開催経緯	自主防災会の組織率は100%となっている一方、自主防災会長はすべて男性である。また近年大きな災害が起こっていないため、若年層を中心に危機意識が低下している。女性の視点に立った災害対応や多様な視点の重要性を知り、防災意識の高揚や自主防災組織の活性化を図りたい。
内容	<p>(1) 震災発生時の様子</p> <p>震災当時、私のいた南三陸町は2011年に合併統合したばかりで、さあこれから観光業で街を売り出していこうというとき、あの大地震が起こった。当時は組合でデスク事務をしていたが、高台まで命からがら逃げだした。多くの人々が流されるのを間近で見ている。チリ地震による津波被害を経て建てられた防波堤は見事に超えられてしまった。もう戻れないということが分かり、皆が不安やストレスで大変だった。海岸線の堤防を3倍も4倍も超える津波という想定外のことが起きたが、犠牲者は主に内陸部の方が多かった。これは、普段の避難訓練で、沿岸部側の人は真っ先に避難、内陸部の方は炊き出しなどをおこなうという指導がなされていたからだ。津波が防波堤を越えたことを確認できなかった内陸部の方は、避難はしたものの家財などが気になり、また戻ってしまったのだ。私の家族は事前に話し合いで集合場所を決めてはいたが、高台に上り、ある程度波が引いた後、我に返った時には家族はいなかった。10年たった現在でも行方不明者は多数に上り、毎月1回は捜索活動が行われている。</p> <p>(2) 避難所にて</p> <p>避難所ではボランティアや多くの方から支援を受け、更に別の避難所への2次避難や3次避難の支援もしてもらった。自分たちは、一人では生きられないということを強く感じた。着の身着のまま歯も磨けず、風呂にも入れず、じっと耐えながら日々を過ごした。自衛隊の方が来てくれて簡易的に水をつなぐことで風呂に入れたとき、生きられるということを実感した。避難所ではプライバシーが保証されない。排泄もままならないよう</p>

	<p>な衛生環境で、多くの人がストレスを抱え続けることを、市役所や自主防災組織の担い手は認識してはならない。</p> <p>(3) 大震災から得た教訓</p> <p>多くのボランティアや若い人の協力によって復興が進んだ。石碑が立ち、震災伝承館も建てられた。自然災害は好むと好まざるとやってくる。自分の命を守る方法という視点で伝承活動を行っている。例えば水の重要性を伝えたい。水は衛生管理にも使えるし、食べるものがなくても水さえあれば何とか2、3日は生きられる。持病がある方であれば、薬の処方箋を常に鞆に入れておけば、病院ですぐ自分の薬を処方してもらえる。女性であれば生理用品など、必要なものは常に持ち歩くことで「防災力を高める」姿勢が大事である。実際、私も常にペットボトルを持ち歩いている。また、ライフラインがストップしたら全て人の手で行わなければならない。振り分け作業、支援物資の輸送、炊き出し、自分にできることは何でもいいからやる姿勢を持ってほしい。子供や高齢者のおむつなど、必要だが声を上げにくいものはあるだろう。しかし非常時にこそ、これが欲しい、こうあってほしいという声を上げていくことが大事である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>女性の視点を計画策定段階で組み込むためにも、防災安全課に女性職員が配属されていないことは問題だと感じた。一般職だけでなく、管理監督職向けにも同様の研修を実施し、庁内全体として、防災安全課に女性が重要だという風潮が出てきてほしい。</p> <p>来年度には、ぜひ防災安全課に女性職員（できれば管理監督職）を配置してもらいたい。</p>

開催地名：三重県鳥羽市	
開催日時	令和3年11月13日（土） 13:30～15:00
開催場所	鳥羽市民体育館サブアリーナ
語り部	菊池健一（宮城県仙台市）
参加者	市職員、町内会・自治会役員等 50人
開催経緯	<p>当市は、南海トラフ地震で震度7の地震動及び甚大な津波被害が危惧されており、津波被害等による集落の孤立も想定されています。そのため、公的な援助に時間を要することが想定されることから、地域による自助・共助は必要不可欠であると考えます。</p> <p>また、当市は大規模災害への対応経験がほとんどないことから、職員や市民への災害の体験談や教訓が蓄積されていない現状があります。そのため、防災訓練や広報紙による防災コラムの掲載、出前講座による啓発活動は行っているものの、いかにして職員や市民の防災意識を維持し続けていくのかということも課題となっています。</p>
内容	<p>(1) 震災被害の背景</p> <p>東北地方は非常に地震が多い地域であり、とりわけ宮城県など太平洋沿岸地域(特に三陸一帯)については過去に幾度となく地震や津波の被害を受けてきた。1896年(明治29年)に三陸地震津波、1933年(昭和8年)に昭和三陸地震、1978年(昭和53年)6月に宮城県沖地震、2003年(平成15年)に宮城北部連続地震、2005年(平成17年)に宮城地震を記録している。その間に建築基準法が変わり、ブロック塀には必ず鉄骨を入れるなど少しずつ対策が講じられるようになっていった。避難訓練も行っていた。だが、これだけ多くの地震を経験し、対策していたにもかかわらず、東日本大震災時の避難生活はスムーズなものにならなかった。</p> <p>(2) 東日本大震災時の状況について</p> <p>地震発生時、私の自宅がある七郷地域は震度7の烈震。県警への避難指示を聞き、3つの町内会を走り周辺住民に津波から声をかけてまわった。しかし1人暮らしの老人の中には避難を嫌がり、自宅のカギや通帳・印鑑を探させる人がいた。この時は、人命が大事だと言って半ば強引に避難させた。ライフラインが止まってしまうと、高齢者が1人で暮らすのは難しくなるからだ。この処置が正しかったかどうかはわからないが、災害時こそ二次災害を防ぐための迅速な判断というのが必要だ。</p> <p>被災者の中には油断して避難しなかった人や、津波がまだ来ないから玄</p>

	<p>関のカギをかけてくると言って戻ってしまった人なども多かった。</p> <p>(3) 避難所の様子と、避難生活から得た教訓</p> <p>一般的な体育館を避難場所にする場合、通路や物資を置く場所などを考慮すると 350～380 名の収容が限度である。だが震災時はそれをはるかに超える住民が集まった。長い避難生活を考え、町内会の主要な役員を核とした組織編成を行ったが、組織に対する不満、顔見知り同士の派閥、プライバシー、ペット問題、ボランティア団体の過度な訪問など、避難所生活では対処すべき課題が絶えなかった。原因の 1 つとして、津波避難と防災訓練は行ってきたが「避難所運営訓練」を全く行っていなかったことがあげられる。今後の防災対策では避難所へ移動して終わる避難訓練だけでなくその後を想定した避難所運営訓練を多く行うこと、顔の見える隣組とのさらなる関係づくりが生き延びるために重要であると感じた。</p> 
開催地より	<p>今回の講演を通して、避難訓練の重要性や地域との連携の意味を再確認した。震災時にはお互いの協力や情報交換が欠かせないが、当時はバラバラに行動をしてしまっていたことが様々な影響を及ぼしたからだ。公的機関を頼りに出来ない非常時に備え、行政・地域とのつながりを強化していきたい。</p>

開催地名：埼玉県川口市	
開催日時	令和3年11月14日（日） 10:30～12:00
開催場所	川口市役所 本庁舎 601 大会議室
語り部	糸日谷美奈子 （千葉県千葉市）
参加者	各町会自主防災組織 30～40 名程度
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大規模災害時の自主防災組織の知見の欠如 ・ 被災時の実働と運用に関する経験の欠如 ・ 女性の視点からの防災活動及び運営知識の欠如
内容	<p>(1) 釜石市の防災意識について</p> <p>私は岩手県で中学校理科の教諭として11年間勤務しており、釜石東中学校で勤務中に東日本大震災を経験した。釜石市は岩手県の沿岸南部に位置する町である。2019年にはラグビーのワールドカップが開催され、この時に使用されたグラウンドは、釜石東中学校の跡地に建設された。釜石東中学校は釜石市の北部に位置する学校で、年に2、3回は避難訓練を行っていた。他にも、隣の小学校と合同避難訓練や総合学習の時間を使って防災学習を進めていた。これらにより子どもたちは災害の怖さや自分の身は自分で守りながら、地域の手助けをしなければならないということを知った。</p> <p>また、釜石市では明治・昭和の津波などたくさんの被害が出ている。文献により地震発生から約30分で津波が来ること、津波高は13～14メートルに達することを確認しており、すぐに高台へ行かなければならないと理解していた。</p> <p>(2) 東日本大震災時の状況</p> <p>3月11日14時45分、地震発生。中学校では帰りの会が終わった時間で、部活の準備や教室に残って友達と会話を楽しむなど、それぞれの時間を過ごしていた。私が職員室で生徒と話をしている時に、職員の携帯電話のアラームが一斉に鳴り出したのである。大きな地震になると察し、外へ出た。地面が波打って揺れていたのが見えた。揺れが収まり始め、生徒は一斉に道路に向かって走り始める。みんなばらばらに走って800メートル離れた駐車場へ避難した。しかし、高さは学校と変わらないことから、さらに最終避難場所である400メートル程離れた高台へ向かった。そこに着いたのは地震発生から約30分後の3時15分だった。ちょうど海のほうから轟く大きな音が聞こえてきた。一人の先生が「津波だ、死ぬぞ、逃げろ」と大きな声で叫んだので、みんな一斉に逃げ出した。山沿いの道をさらに上が</p>

	<p>り、国道も突っ切り、舗装されていない山を登った。家にも学校にも戻ることはできず、雪も降っていたためその場で一晩過ごすこともできない。そこで、山を越え釜石市役所の近くにある廃校になった中学校の体育館まで避難することにした。この避難所に着いた頃には地域住民も集まり、バスケットコート1面程の体育館に約2000人が一緒に夜を過ごした。</p> <p>東日本大震災により釜石市で亡くなった方は888名、行方不明者154人と、大きな被害があった。幸いにも学校にいた子ども達は助かった。後に「釜石の奇跡」と報道されたのだが、私自身はこの奇跡という言葉に違和感を覚えた。</p> <p>(3) 東日本大震災を通して伝えたいこと</p> <p>この震災を経験して学びの重要性を感じた。釜石の子どもたちが逃げて命を守れたのは、短時間のうちに大きな津波が来るということを事前に学んでいたからである。これは奇跡ではなく、当たり前行動だった。</p> <p>釜石市は「津波てんでんこ」という言い伝えがある。これは地震が起きたら、てんでばらばらに逃げましょうというもの。親は子どもを待たずに、子どもは親のところへ行かずに逃げる。自分の命は自分で守るということを、まずは覚えておいていただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>これまで被災された方の話を直接聞く機会がなかったため、語り部の方のお話の中で、地震発生時に感じたこと、避難していた時に感じたこと、今振り返って思うことなど、その時々のお話を聞くことができ、このような災害の実体験を伝承していくことの重要性を改めて感じた。</p>



開催地名：兵庫県加東市	
開催日時	令和3年11月15日（日） 13:30～15:00
開催場所	市庁舎5階第1委員会室
語り部	鈴木秀光 （宮城県気仙沼市）
参加者	市議会議員、議会事務局職員 約20名
開催経緯	当市は、市内西部を縦断する加古川の増水による水害が例年発生しているが、近年、地震による大規模な被害がないことから、特に地域による災害対応意識の差が大きい。市や議会においてもマニュアルを整備しているが、今後大規模災害が発生した場合においては、大きな混乱が予想される。
内容	<p>(1) 震災被害の背景と津波の状況</p> <p>気仙沼市は遠洋漁業が盛んな、風光明媚な観光地である。リアス式海岸沿いの街であるため昔から津波による被害もあった。震災前の気仙沼市は、人口74,247人、26,600世帯だった。市内最大震度は6弱、その他の震度計のあるところで5強を観測した。</p> <p>宮城県沖地震は30年以内に発生する確率が99パーセントと言われておりたが、実際の津波到達範囲はそれを大幅に超え、それに対応したハザードマップを作成しているもので、想定外のことばかりだった。浸水面積は市全体の5.6パーセント。リアス海岸の地形、かつ沿岸部に町を形成していたため、事業所数で見ると約8割。働いている人にとっては、83.5パーセントが被災した。また市の地盤も約70センチ沈下し、市全体が大きなダメージを負った。</p> <p>大型船が陸上に打ち上げられ、約3千隻の漁船が流出もしくは損壊。海沿いにあった工業高校では、4階まで津波が達した。3階には津波に押し流された軽自動車がかひっくり返って残されていた。高台に向かう車、高台から一旦自宅や会社に戻ろうとする車が交錯し、車ごと流された事例も多く発生した。</p> <p>(2) 東日本大震災を踏まえた教訓</p> <p>津波で各地の道路が断絶されたことにより、一次対応の遅れが目立った。市役所への唯一のアクセス路も浸水し、市役所自体が孤立。調査救助にも迎えなかった。複数の移動路を整備しておくべきだった。</p> <p>電気の復旧は2か月後だった。さらに水道の復旧は3ヶ月後。懐中電灯や、ろうそくの灯で過ごし、ずっと給水車からの水汲み作業を続けていた。物資の備蓄、協定、受援についても防災計画通りにはいかなかった。自衛隊</p>

	<p>には救助以外にも兵站という形で物資の受援、支給にも力を貸していただき、システム化できた。体育館や公民館は物資ターミナルとしては代用できないので、予め倉庫業組合やトラック組合との協力、協定締結をすべきであると考えている。気仙沼市では、搬入搬出の分けや効率的な運搬、作業スペースの確保など網羅した物資集積配送基地が、2021年7月に完成した。</p> <p>(3) 議会として一市民としてできること</p> <p>議会では当時、廊下などの空きスペースにみんなで集まって議案を承認し、予算を成立してくださった。また、復興計画を可決し、災対要領を作成し、それが機能するかの訓練を重ねられていた。何よりありがたかったのは被災者への説明だった。どんなに説明書を配っても伝わりづらい。住民の方から行政への不満、非難があった際にも住民の取りまとめや間に入っていただけで心強かった。</p> <p>平成23年の3月10日に戻れたらどうしますか。というような質問を受けたこともあるが、今日が歴史的な大災害の前日かもしれない。ご自身、ご家族、大切な方を守るため、あなたが議員として一市民としてできることがある。心に思ったことを何か取り組んでいただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>「今日が歴史的な大災害の前日かもしれない」という言葉が胸に残った。まずは個人の備えを万全にしなければ、有事の際に議会としての役目は果たせないことを認識した。復旧に向けて立ち回れるよう、今からできることを行動に落とし込んでいきたい。</p>



開催地名：滋賀県大津市	
開催日時	令和3年11月16日（火） 9:00～10:00
開催場所	大津市市民文化会館
語り部	山崎義勝 （岩手県釜石市）
参加者	約100名
開催経緯	<p>当市では、琵琶湖西岸断層帯や東南海・南海地震による強い揺れは広範囲に及ぶとされ、琵琶湖西岸断層帯による地震の予測震度は最大で震度7、建物の全壊は38,504棟、死者数は2,182人に及ぶなど、甚大な被害が想定されている。一方で、幸いにも、長期間にわたって大規模地震による被害が発生していないことから、自主防災組織等の住民の防災意識には地域差があるのが現状である。</p>
内容	<p>(1) 震災発生時の状況</p> <p>震災の2年前、平成21年に市役所での勤務を開始した。当初異動の予定があったが、震災が発生したため、6月10日まで消防に関する業務を担当した。震災発生時、私は消防庁舎の3階にいた。震度5弱の揺れは経験があったが、震度6弱は初めての経験で、歩ける状況ではなかった。建物が倒壊するのではないかと恐怖を覚えた。地震直後は被害状況の情報は入ってこず、静まり返っていたことを覚えている。通信は使えなくなっていたので、携帯無線機を使用した。そこから聞こえてくる言葉は「全滅」もしくは「何もなくなってしまった」というような信じられないものが続いた。</p> <p>(2) 消防施設の被災状況</p> <p>被害を受けたのは家屋だけでなく、消防施設も同様だった。4つあるうちの消防庁舎のうち、釜石消防署を含む3つが全壊、内陸にあったひとつだけが被災を免れたという状況だった。全部で26台あった消防車両も、18台が焼失し、残ったのは8台だけだった。こうした状況では、震災活動もままならない。消防機能が麻痺状態に陥っていた。本来であれば救助活動や消火活動を行う側も被害を受けるというのが大規模災害だと強く感じた。</p> <p>(3) 東日本大震災を経た変化</p> <p>災害に備えるにあたっては、市街のみならず、自分が勤務している消防庁舎がどのような環境にあるのか、どのような構造なのかを意識して覚えておく必要がある。被害を受けた消防署の壁をみたとき、津波の高さを実感した。以前は通信指令室も消防車両の近くにあった。基本的には一階部</p>

	<p>分に設置していた。しかし、復興による改築、復旧を行う際には、建物の高い位置に設置するように変化した。震災時には実際に、通信指令室にいた2名の方が殉職している。</p> <p>消防団の安全確保に関しては、活動時間を制限する『15分ルール』というものを設定した。地震発生から津波が到達するまでの時間から計算し、15分は消防活動を行い、それ以降は自分の命を守るために避難をするというものである。しかし、緊急時に時間を確認しながら実際に15分で切り上げられるのかという疑問は残る。市民の命だけでなく自分の命も同じように守るべきものだと考えてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>震災被害や、大規模災害発生時の対応については、これまでも学んできたが、今回、実体験をともなった細かな部分まで聞いたことで、認識が深まった部分があった。消防の観点のみならず、現在は民間で活躍されている語り部の視点から得たものを活かしながら、今後の活動に結び付けていきたい。</p>

開催地名：埼玉県三郷市	
開催日時	令和3年11月19日（金） 10:25～11:55
開催場所	三郷市立前間小学校
語り部	平山和哉 （福島県いわき市）
参加者	4年28名、5年41名、6年21名、教職員6名 計96名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災を直接経験していない児童が半数を占めている。 ・震災を経験した学年も、震災の記憶（教訓）の風化や防災・減災への意識が低下している。
内容	<p>(1) 語り部が目にした震災被害</p> <p>私が勤務していた消防署は海から10キロ以上離れているため、津波を直接目にしていない。地震による揺れが発生している最中はずっと地鳴りが聞こえていた。消防本部は耐震工事が施されている建物のため、棚が倒れるなどの被害は受けなかった。私自身の住居も、被害の大きかったいわき市にあるが、幸いなことに目立った被害はなく、玄関のブロック塀の破損程度で済んだ。しかし、一歩外に出ると景色は一変していた。家屋が流され、防波堤がなくなり、多数の死者が出ていた。当時私がいたのは消防本部の指令室で、そこへ無線で情報が入ってきた。最初の連絡は、被害を受けた地区に関するもので「壊滅状態」という普段聞かない表現が使われていた。</p> <p>(2) 東日本大震災時の被害状況</p> <p>いわき市では468名の方が亡くなった。建物の被害は9万1千戸にのぼる。災害が起きてから72時間を超えると生存率は大きく下がる。地震が発生した3月11日はまだ気温が低く、行方不明になっていた方で、生存が確認された方は非常に少ない。</p> <p>インフラが被害を受けたことも救助活動に大きな影響を与えた。水道管が破裂し、消火活動が遅れたり、道路が崩れたために緊急車両が現場へ向かうのに数倍の時間がかかったり、様々な影響があった。インフラへの被害は震災当日だけでなく、避難所での生活にも大きく影響し、電話は約2週間、水道は約42日、ガスは約1ヶ月以上、それぞれ復旧までに要している。そのため避難所では自衛隊がお風呂をつくるなどして対応していた。</p> <p>(3) 地震が発生した際の通報の状況</p> <p>東日本大震災による揺れは、約190秒。3分以上の揺れがあった。非常に長い時間ではあるが、揺れている最中は何もできなかった。揺れている</p>

	<p>最中は、119 番通報も 1 件もなかった。通報があったのは揺れが収まった直後からで、深夜までシステムの許容範囲を超える通報が続いた。記録では 1177 件の通報があったとされているが、いわき市には集中的に電話がかかってきていたため、実際にはこの 10 倍以上の通報があったと予想される。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>教師も含めて、実際に東北地方で東日本大震災を経験された方のお話を直接聞いたり、質問したりするのは初めての経験だったので、大変勉強になった。震災直後から 119 番通報への対応が始まったという、まさに救助活動の最前線にいた平山様のお話は、地震の怖さだけでなく、被災地のより詳しい状況や、どのような救助活動が行われていたのかという、テレビ等ではなかなか知りえない貴重なお話だったと思う。</p> <p>今後、地震に対する避難訓練は勿論、数年前に埼玉県の越谷市で起きた竜巻等、異常気象に対する避難訓練も行う必要があると感じている。2020 年の 7 月に、三郷市内で局地的に竜巻による被害があり、前間小学校も校門が倒れる、自転車置き場が柱ごとずれる等の被害があった。そういった点から、避難訓練だけでなく、学校として防災マニュアルの見直しをする必要も感じている。</p>

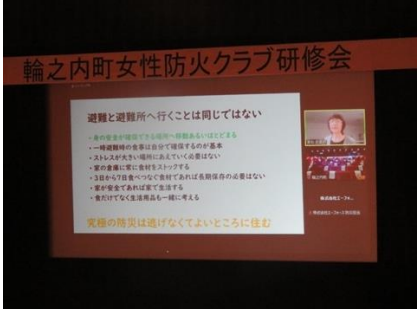

開催地名：北海道羽幌町	
開催日時	令和3年11月21日（木） 10:00～11:30
開催場所	羽幌町中央公民館
語り部	茨島隆 （青森県八戸市）
参加者	羽幌町職員、消防署職員、自主防災組織等関係機関、町内会 約70名
開催経緯	羽幌町では大規模災害は発生していないが、住民の災害に対する危機意識が低く、防災訓練の参加率が低迷している。自主防災組織の設置も思うように進まず、災害対応を経験していない職員（特に若年層）が増えていることから、東日本大震災の体験談、教訓や自助、共助、公助の役割、地域における共助、自主防災の大切さを語っていただくこととなった。
内容	<p>(1) 東日本大震災の被害状況</p> <p>東日本大震災では国内の最大震度は宮城県で震度7、私が被災した八戸市では最大震度5強を観測し、津波は最大6.2mの津波が観測された。震災の死者、行方不明者の数は10年経った今も増減しており、被害調査が終わっていないことが分かる。死者の大半は津波によるものであり、死者約2万人、負傷者約6000人の被害が出たが、一方で阪神淡路大震災では死者が約6000人に対して負傷者が4万人以上に上り、災害ごとに被害の特徴が違うことがわかる。</p> <p>八戸市では浸水をし、沿岸部を中心に多くの建物に被害が出た。津波は何度も押し寄せ、工場備品やコンテナの流出、タンカーが衝突し漁船が打ち上げられるなど水産業にも大きな被害を受けた。7名の死者行方不明者が出て、家屋や施設への被害も甚大なものとなった。避難所では防寒対策の毛布が足りなくなるなどの状況が発生したほか、食事の配給が足りないような場所もあり、非常時は自治体はその機能を失ってしまうことがわかる。</p> <p>(2) 命を守るための行動</p> <p>阪神淡路大震災では生き埋めから脱出した人の多くは自力での脱出や、家族・友人の救出によるものだったという。このことから、自助、共助、公助の三助による対策が災害の被害を軽減することがわかると思う。共助と同じくらい大切な概念として「近助」というものがあり、普段から声をかけあい地域の助け合いを進める関係性が重要である。地域防災力向上のためには自主防災組織の設立促進や活動に対する一層の支援が必要になる。八戸では震災以降、自主防災組織の設立が増え組織率は83.2%にまで増え</p>

	<p>ている。防災資機材の整備に対する助成も行われている。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>「津波てんでんこ」という古くからの教えがある。家族バラバラでもいいのでまずは逃げて自身の命を守ること。災害に対する正しい恐れを持ち、どう行動につなげるかを考えるのが大事である。震災時は自治体職員が多く被災し、行政機能がマヒしていた。防災マニュアルを作成したとしても想定外のことは起きるため、自身で事前に対策をするのが重要である。例えば災害時に携帯通信は使えなくなる可能性があるが、災害用の防災無線171を事前に体験しておけば非常時にすぐ使うことができる。避難所に行ったとしても毛布や食料がないかもしれないため、事前の準備は非常に大切である。また自治体の避難指示に従って避難をしてほしいが、自治体からの連絡が遅れることも想定し自ら危険を察知する能力を高めてほしい。津波浸水想定などのハザードマップを自宅や勤務先におき、災害時にはそれを見て判断してほしい。就寝中の地震発生に備えてスリッパを枕元におきガラスや食器の破片によるケガをしないような対策も有効であるほか、車の運転中に被災した場合は慌てずゆっくり道路の脇に車を止め、徒歩での移動が適切である。</p> <p>津波は何度も繰り返し襲ってくる。第二波や第三波の方が大きい場合もあり、河川をつたい50キロも遡ってきた津波もあるので注意してほしい。避難時の注意点である基本行動、非常時の持ち出し品の準備を普段から意識していただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>災害発生時には落ち着いて行動をすると共に、自分の命を自分で守る努力をしなければならないと強く感じた。そのような災害時の行動指針として、防災マニュアルが欲しいと感じた。</p>

開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和3年11月21日（日） 10:30～12:00
開催場所	能美市立防災センター 5階研修室
語り部	菅野祥一郎 （岩手県陸前高田市）
参加者	市危機管理課、市民、関係機関 37名
開催経緯	市役所・関係機関の災害対応力の強化や地域住民の防災意識の向上を目的に、東日本大震災を経験した語り部を招いた災害伝承講演会を実施することにした。
内容	<p>(1) 岩手県陸前高田市という場所について</p> <p>陸前高田市は岩手県の最南に位置しており、隣には気仙沼市が位置している。三陸と言われる陸前・陸中・陸奥に分けられるが、三陸を代表するリアス海岸という地形で波の高さが増し、東日本大震災の被害を大きくした。</p> <p>(2) 津波災害の特徴</p> <p>津波災害には3つの特徴がある。地震と津波を併せて震災と言うようだが、1つ目は沢山の死者が出ること、2つ目は遺体が上がらないことである。今回の東日本大震災で亡くなった方は全て津波だった。1,557人が死亡し、202人が現在でも行方不明であり、ここ数年変わっていない。3つ目は忘れられるということである。地球の裏側からやってきたチリ地震津波は50年以上前の出来事であり、津波は台風のようにめったに来ない。頻繁に来ないことはいいことだが、時間が立ちすぎていることで忘れてしまう。震災から2年も経過すると津波注意報が出て平気で海岸線そばを走っている車がある。コンビニに行くとエンジンやエアコンをつけたままにしている車があるなど、人は鈍感になってしまう。津波は忘れたことにやってくる。このことを忘れてはならない。</p> <p>(3) 津波が発生した時の学校の状況について</p> <p>勤務していた小学校は気仙小学校で、隣の気仙沼市の気仙沼小学校と間違えられる。奇跡だったとか偶然だったと言われる方がいるが決してそうではなく、分かって欲しいことが3つある。1つ目は海と川のそばにあった。2つ目は市の中心部に向かうには川を渡らなければならなかった。3つ目は、学校が避難場所だった。地震が発生した時は用事があって川向うに出ており、地震と同時に学校に戻ろうとしたが、川を渡る為の橋がマニュアルどおりに通行止めとなった。通行止めになっていなければ助かった命も</p>

	<p>多くあったと思っている。通常は橋を渡って5分のところにある小学校が、Uターンや裏道を通して30分以上の時間を要した。学校に到着した時、生徒は地域の住民と一緒に校庭に並んでいた。マニュアル通りに避難をしていたが、周囲の異常な雰囲気から生徒たちを山に上げようと思った。マニュアルには無かったが山に登ることに迷いは無かった。6年生から順番に登るように、低学年から登れば渋滞を起こすだろうと咄嗟に指示をした。生徒の生死を分けたものは何なのか、責任者の指示に付け加えて、「誰よりも早く逃げることを決断したこと」である。</p> <p>(4) 避難所の状況について</p> <p>94人の生徒全員が帰る家を失ってしまった。何日か経つにつれて避難所に迎えに来る家族も増えてきた。正確には迎えに来て帰る家も無いのだから、無事を確かめに来たという方が正しいのかもしれない。一人の女子生徒には最後まで誰の迎えも来ることはなかった。辛い思いをしながら、今でも元気で生きている。</p> <p>(5) 参加者に伝えたいこと</p> <p>震災ではたくさんの若い命が一瞬にして奪われてしまった。巣立っていく子供たちには輝かしい未来があると思っていなかった。でも人生には思いもよらないことが起きる。だから今この時を大事にして、誰の命も大切に作る人になってほしい。</p> <p>時間と共に記憶は薄れていく。ただあの日あの時に東日本で何が起って、どんな教訓を残したのか、防災の心構えだけは忘れないでもらいたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>今回のような話は学校関係者だけでなく一人でも多くの人に聞いてもらいたいと思った。本当に身に染みる思いで聞かせていただき、改めて災害の強さ怖さ、備えることの大切さ感じた。全国各地でお話されることもあると思いますが、また機会が増えれば良いと思った。</p>

開催地名：岐阜県輪之内町	
開催日時	令和3年11月21日（木） 9:00～10:30
開催場所	輪之内町文化会館アーリオンホール
語り部	武蔵野美和（岩手県陸前高田市）
参加者	輪之内町女性防火クラブ員 約50人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・本町は長良川・揖斐川の2つの河川に挟まれた場所に位置し、洪水のリスクが高い。また、地盤についても沖積層の堆積が厚く、非常に軟弱であることから、大地震が発生した際は甚大な被害が発生することが予見されている。 ・災害に対する危機意識が希薄化しつつあり、女性防火クラブについても「クラブ員としてどのような心構えを持ち、どういった活動を行うべきであるか」を明確にする必要がある。 ・ハザードマップの周知（年齢問わず）や、平時より身につけておくという習慣やいざという時の家族のルール設定等が課題と考える。
内容	<p>(1) 震災被害の背景</p> <p>私が住んでいるのは、岩手県陸前高田市という場所である。岩手県でありながら、伊達藩（宮城県）の文化を併せ持った文化を持つ特徴がある。この陸前高田市は、皆様のご存知のように東日本大震災で起こった津波の影響で、大きな被害を受けた。本日は、その災害経験から避難や備えについて等のお話をさせていただきたい。</p> <p>(2) 東日本大震災時の対応</p> <p>東日本大震災が発災して、津波が来たのは午後3時28分ごろである。数十秒後には、陸前市役所は津波に襲われ、市の職員は111人が犠牲になった。陸前高田市では、過去の津波被害の経験から防潮堤を作り対策をしてきた。しかし、その想定を超える15～17mの津波が押し寄せてきた。津波は川をさかのぼって内陸付近まで到達して、内陸部で安心していた多くの人が犠牲者となった。また、安全な場所で避難所として指定されていたところにも被害が及び多くの方々が亡くなった。人口24,246人のうち、死者・行方不明者は1,757人にのぼった。</p> <p>(3) 避難とは</p> <p>そもそも防災とは何か。それは災害を防ぐことである。人の生活や生命を脅かす事象全てが災害である。普通の暮らしが続けられる工夫、安全に</p>

	<p>過ごせる工夫、被害の発生を抑えられない物は被害を最小限に抑えられるような工夫、さまざまな災害によって防災のための備えが異なってくる。例えば、ハザードマップは安全を担保するものではない。そしてハザードマップ内でしか生活しないという人はいないであろう。学生が安全に通行できるようなところ、行きの準備がどのタイミングで必要か、どのくらいの雨でここが冠水するか、など、生活に根付いている事をしっかりと皆さんで共有していくことが大事になってくる。</p> <p>女性の視点だけでなく、生活者の視点で物事を考えていくことが大切である。多様な人たちの存在を認識して、それに合わせて対応しなければならない。毎日の生活をよくするための工夫が、いざという時の避難所の生活や安全に非難する事に繋がるだろう。そして避難とは、決して災害があった際に避難所に避難するという事ではない。状況に合わせて自分自身の身の安全を確保できることが避難であって、そのために移動したりその場にとどまったりするなど考えながら行動することが必要になってくる。</p> <p>(4) 最後に</p> <p>輪之内町の「住んでいてよかった これからもずっと 住み続けたいと実感できるまち」というフレーズはとても素晴らしい。まさにこれが災害の被害に対する予防につながるだろう。</p> <p>キーワードは自助・共助・近助が大切である。備え以上の事はできない。守りたい人がいるならまずはわが身の安全を確保する事が大切である。そして、日頃からの地域の人とつながりを大切にして生活して、いざという時に協力し合える準備をしていってほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>自分の住んでいる地域のハザードマップについて調べたことがなかったが、改めて災害がハザードマップのとおり起こったことを伺い、確認する必要があると感じた。ハザードマップをもとに災害時の危機管理を、事前に考えていきたい。</p>



開催地名：広島県竹原市	
開催日時	令和3年11月21日（日） 9:00～11:00
開催場所	ホテル大広苑 1F コンペンションルーム
語り部	吉田亮一 （宮城県仙台市）
参加者	自治会、防災リーダー、市避難所運営担当者等 約100人
開催経緯	過去には土砂災害や洪水災害、高潮災害は経験しているものの、市域では大きな地震や津波の経験がないことから、要配慮者等の避難対策を含めて、対応に不安な要素がある。特に地震等の大災害時の場合は多数の避難者が想定されるため、避難所運営体制の在り方は喫緊の課題である。
内容	<p>(1) 東日本大震災の体験談について</p> <p>地震発生時は、宮城県仙台市太白区に滞在していた。大きな揺れが3分程度続き、揺れが収まった後は吹雪が吹いた。まずは一時避難場所である公園に避難した。備蓄倉庫から物資を取り出し、ペール缶に薪を積んで暖をとった。そしてテントを張ってブルーシートを敷いて風よけをした。避難者の中には、たった1人で避難してきた小学生低学年の女子児童もいた。一方、指定避難場所である中学校では、中学生が避難スペースの設営準備をした（太白区では35の小中学校を指定避難場所として開設し、そこに人口約23万人のうち19,600人程度が避難した）。設営準備完了後、指定避難場所へ移動した。自身が避難した場所の滞在期間は17日間であったが、22日間を要した避難所もあった。ライフラインの状況は、電気は5日間、ガスは4週間、水道は2週間程度停止していたが、発電機と灯光器を用意して明るさを確保した。その後、炊き出しの準備を行い、避難者へ配布した。避難場所では、中高生などの若い世代が率先して活動してくれた。避難場所に移動することが出来ず自宅にいる住民に対して、小学生がプールから水を汲んでポリタンクに移し、そのポリタンクを高校・大学生がリアカーに積んで配達した。自衛隊からの支援物資が届いた際には、台帳の作成や物資の仕分けを担った。他には、集積場の準備や掲示板の作成などを行った。</p> <p>(2) 地域全体で取り組む訓練の重要性について</p> <p>災害を想定した避難訓練や活動などは、町内会・自治会・学校などの各施設で避難経路や備蓄品・役割をしっかりと協議をするなどして、「地域全体」で取り組むことが必要である。特に、災害時の行動を学ぶ「子ども会」の実施や、学生と地域住民との合同訓練の実施などは非常に重要である。実際</p>

	<p>に、東日本大震災発生時の太白区で、一時避難場所に女子児童が一人で避難できたのも、指定避難場所になった小中学校の学生達が率先して行動してくれたのも、「地域全体」を意識した訓練・活動を行ってきた成果である。</p> <p>また、避難訓練においては地域住民全てが参加するのは現実的ではないため、平日や日中に自宅にいる人・働いていない人に主体となって参加していただくことが重要である。働いている人は、災害発生時には帰宅困難者となってしまったり、勤務先の復旧作業などに追われたりするため、災害発生時に主体となって行動できない可能性が高いためである。他には、実施時間は昼と夜を交互に実施する、各々の自宅から開始するなどして、本番を想定して行うことも重要である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>平成30年7月豪雨の被災以降、大雨、土砂災害に対する対応に取り組んできたが、今回お話しをいただいた東日本大震災を教訓として、南海トラフの巨大地震や直下型の大地震に対する備えについて、町、町民、事業者と協働で取り組んでいきたい。</p>

開催地名：京都府京丹後市	
開催日時	令和3年11月25日（木） 19:00～20:00
開催場所	京丹後市峰山総合福祉センター
語り部	大内幸子 （宮城県仙台市）
参加者	自治会・自主防災組織役員、市職員 約100名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・本市は、昭和2年3月7日に起こったマグニチュード7.3の北丹後地震で、約3,000人の犠牲者を出した経験がある。しかしながら、地震発生から90年が過ぎ、当時の惨劇を知る者はほとんどいない。 ・防災訓練において、避難所の開設訓練は行っているものの、大規模災害の発生を想定した長期間における避難所運営等の訓練は行っておらず、避難所での生活の備えや運営のためのノウハウに乏しい。
内容	<p>(1) 福住町における自主防災組織発足の経緯</p> <p>福住町は二つの川に挟まれた町であり、水害に見舞われることが多い土地である。特に、昭和61年の台風10号による被害は甚大で、その当時の苦い思い出が2003年の自主防災組織発足につながった。それが今日の「福住町方式」となっている。</p> <p>私たちが数々の災害を経験して、何よりも必要だと感じたのは「住民の安全確認のための名簿」である。そのため、2003年にはまず、要支援者および住民全員の名簿作成を行った。この名簿は現在でも、年一回の防災訓練のたびに更新を続けている。名簿とともに、わかりやすい防災マップ作成、さらには近隣市町村を中心に「災害時相互協力協定」を結んだ。この協定は、大災害が発生した場合にお互いに助け合うことを目的としたものだ。これは、災害時に起きたボランティアとのトラブルから教訓を得た活動である。災害の被害が大きければ大きいほど、外部から救援の手が入るのは遅くなってしまふ。だからこそ、いざというときは自分たちの手で対処しなければならない。</p> <p>(2) 東日本大震災時の記憶</p> <p>福住町は津波による直接の被害こそなかったが、堤防は所々崩れ、家の中はどこもめちゃくちゃになった。安否確認を実施後、避難所開設を始めた際に、まず作ったのはトイレとゴミ置き場である。併せて、炊き出しの準備も行った。日頃の訓練の成果が出て、暗くなる前にこれらの準備を終えることができた。</p> <p>福住町は1500名程度の小さな町であり、災害時の収容施設も、備蓄品も</p>

	<p>そこまで多くはない。しかし、東日本大震災当時は、周辺市の帰宅困難者、および津波から逃げてきた人々が福住町へ殺到した。500人収容予定の施設に2000人が詰まっていた。支援が必要な人、赤ちゃんや妊婦さんなど、手厚いケアが必要な人は小学校等の避難所から集会所へと誘導した。実際、避難してくる人の約8割は支援が必要な災害弱者と呼ばれる方々である。当時の避難所運営時に、女性による細やかな対応の重要性を感じた。だが、避難所運営マニュアルに女性の参画はなかった。この経験から、私は研修を受けて、女性防災リーダーを目指すようになった。</p> <p>(3) その後の地域防災活動</p> <p>福住町の防災訓練は、「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに行われる。普通なら消防の人に来ていただいて教えてもらうかたちだと思うが、私たちは15年前に役員へ教えてもらって以降、自分たちだけで訓練を行っている。災害の規模が大きければ大きいほど、警察や消防は対応に駆り出されていなくなるからだ。自分たちでやるのが重要である。もしもの際にトップがいなくても問題がないようにする。それが福住町方式である。</p> <p>災害時に行政に頼りたい気持ちはわかる。だが、行政も被災するので、普段から訓練して備えておくこと。そして、防災は日常生活そのもの。様々なイベントや活動があって、防災の取り組みが活性化する。備えて、知識を得て、訓練をする。そして、忘れないこと。これが命を助けることにつながっていく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>女性の参画が少ないとお嘆きであったが、参加をお願いしても断られてしまう。どうすれば女性の方に参画していただけるか、是非ご教示いただきたいと感じた。また講演の内容としては、我々の地域でも取り組んでいる内容が多くあった。</p>

開催地名：愛媛県今治市	
開催日時	令和3年11月26日（金） 13:25～15:15
開催場所	今治市立立花小学校 屋内運動場
語り部	糸日谷美奈子 （千葉県千葉市）
参加者	第5学年児童 担当教員 約90人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文献やインターネットなどで学習を重ねているが、災害をどこか遠くのことと考えてしまい、自分事として捉えにくい実態がある。 ・ 防災に対する関心度に差があり、家庭における防災グッズや備蓄品、約束事など具体的な実態が大きく異なる中で、どのような啓発ができるか。
内容	<p>(1) 「釜石の奇跡」は奇跡ではない。</p> <p>釜石市は岩手県の中では南方に位置する沿岸部の町。10年前の時点で大きな地震が起こる確率は70パーセントと言われていた。東日本大震災では釜石市内で888人の方が亡くなり、158人が行方不明になった。しかし、学校にいた小中学生は全員助かった。これは「釜石の奇跡」として報道された。奇跡的にみんな助かったというテレビの放送を聞いて、本人たちは「奇跡じゃない」と語っていた。私たちは、「昭和の津波はここまで来た。明治の津波はここまで来た。」という石碑が残されており、みんなで見学に出かけて明治と昭和それぞれの津波に関する話を聞き、防災について学んでいた。過去の経験から、釜石市は大きな地震の約30分後に13～14メートルの津波が来るとわかっていた。学校の3階の天井まで達する高さなので、「学校に避難したら、助からない。学校に逃げちゃダメ。高いところに逃げよう。」という認識ができており、避難訓練では先生が先頭に立って、みんな並んで走って逃げるという訓練をしていた。</p> <p>(2) 東日本大震災時の対応</p> <p>2011年3月11日14時45分。教師をしていた釜石東中学校では、帰りの会がちょうど終わる時間で、みんなバラバラの場所にいた。そんな中で地震が発生。携帯のアラームが一斉に鳴りだし、私は近くにいた生徒と一緒に駐車場まで避難をした。到着すると、今までに感じたことのないような大きな揺れが到達。釜石市は震度6弱の揺れだったが、それでも駐車場に置いてあったワゴン車が跳ね、地面が波打つように揺れた。揺れが少し収まってから、地域の人と声を掛け合いながらさらに高台を目指して避難した。ここまで来れば安心だと思って時計を見たのが発生から30分後の3時15分頃。ほっとした途端、海の方から大きい音が聞こえた。木や建物で</p>

	<p>波が見えないが、砂煙のようなものがだんだん近づいてくるのが見えた。恐怖で体が動かなかった。「逃げろ！津波が！死ぬぞ！」という大きな叫び声でバラバラになって避難した。黒い波が自分たちに近づいてくるのを後方で確認しながら、「とにかく走れ」と声を掛け合った。自分の命を守ることしかできなかった。私が逃げた山の上からは、自分たちの街がどんどん波にのまれていくのを、ただ見ることしかできなかった。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>2009年から防災の学習をし、学んだことは地域のみなさんにも展開していた。例えば「てんでんこレンジャー」というヒーローが「高いところを目指して逃げなさい」という劇にして、校内や地域で発表した。また「避難しました。」という安否札を作成し、近所に1000枚配布した。当時は「泥棒被害を助長する」という批判もあったが、東日本大震災の震災で実際に活用され、人の命を救ったことは確か。楽しく学んで、みんなで助けられたい。助けられる人から助ける人へ、そして学んだことを地域に伝える。この3つが合言葉。みんなが学ぶことで後悔しない未来は絶対につくれる。ぜひたくさんの方の学びを共有して、後悔しない未来を一緒につくっていきましょう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>「釜石の奇跡」は事前の学習と訓練の賜物だったことが理解できた。いま一度ハザードマップや訓練内容を見直すきっかけにしたい。また、学習するだけでなく、地域に共有し連携する姿勢が大変参考になった。助ける人になれるよう、本日の学びを実践につなげていきたい。</p>


開催地名：香川県宇多津町	
開催日時	令和3年11月27日（土） 9:30～11:00
開催場所	宇多津町保健センター4階大会議室
語り部	平澤つぎ子（千葉県旭市）
参加者	自主防災会、防災士会、一般町民 50人以内
開催経緯	<p>南海トラフ地震の発生確率が70～80%になりました。しかしながら今までと同様な考えと対策でしかないのが現状です。行政といたしましても、あらゆる対策を構築していますが自助・共助の中心である一般住民の意識改革が出来ていないのが残念でなりません。</p> <p>実動訓練にプラスして防災講話の実施も必要であると思われます。町民の防災力の向上が喫緊の課題であります。</p>
内容	<p>(1) 震災被害の状況</p> <p>千葉県旭市は銚子市のすぐ隣に位置している。東日本大震災では14:46に震度6弱を記録した。約30分後にも同じくらいの揺れを観測。そして最初の揺れから約1時間後の15:50に津波の第一波が到達した。そこから約30分後の16:20に第二波が到達し、第一波が引いたことで安心して家に戻った方が第二波でさらわれ、亡くなった事例もあった。たった6、7メートルの津波と思われるかもしれないが、14名の方が亡くなられた。津波はコンクリートの橋を壊し、川を遡上する。津波は会場では時速約800kmにもなる。上陸すると速度は落ちるが、それでもマラソン選手でも逃げ切れない。とにかく津波が来たら、速く・遠く・高いところへ避難するべきだと考えている。</p> <p>また旭市で被害が顕著だったのが、津波と液状化だった。もし車を運転しているときに地震が起きたら、キーを挿したまま、車検証だけ持って逃げるのが重要である。</p> <p>(2) 避難所の状況</p> <p>市内では11か所の避難所が開設された。ボランティアとして避難所の炊き出しに参加したが、緊張だけじゃない、切迫した雰囲気だった。農家の方からいただいた7号のお米を2日間炊き、提供し続けた。市役所の方の「まだ足りない、まだ足りない」という声が響き、夢中で作り続けた。市内は半分津波の被害にあったが、残り半分の無事だった人々や市外から食料や飲料の提供があり、間に合ったので幸せだった。寝食を同じ場所で行うので、ほこり、匂い、ごみ、害虫、衛生的に大変だった。また避難者は普段の生活</p>

	<p>とがらりと変わり、衣類、入浴、トイレも満足にできていなかった。女性の着替え場所、子供の泣き声、他人のいびき、食べ物の好み、周りに筒抜けで話ができない、持病、感染症といった問題にも直面した。いろんな状況の中で、必要以上の声はかけず、ただし話し相手や相談相手になりながらボランティア活動していた。全国各地からボランティアに来ていただいたが、地元の高齢者も活躍していた。古い名簿を解読したり、地理的なことを教えてくれたり、貴重な存在だったと感じている。</p> <p>(3) 東日本大震災後の活動</p> <p>東日本大震災で困ったことは、二度と誰にも同じような経験をしてほしくないという思いで今も活動を続けている。防災冊子の配布、心の復興を願った文芸賞の開催、災害関係の紙芝居も作成した。日本全国どこでも地震が起きる。予想されていなかった熊本地震も起きている。自分の命は自分で守らなければいけない。地震発生直後は、とにかく自分の身を守る。命があれば、何とかなる。ただ、準備と知識があるのとないのとではその後が変わってくる。だから、平時の対策が一番大事。災害は忘れたところにやってくるから、どんどん準備をしておくことが重要だ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>同じ市内でも、被害状況によって避難する側と支援する側の住民がいらっしやった現実を改めて知った。まさに講演に出てきた「自助・公助」を実感した。「消火や避難路を確保するよりも、まずは自分の身を守る」という言葉が印象的だった。自分の身を守った後により良い行動がとれるよう、正しい知識を身につけようと改めて心に誓った。</p>

開催地名：東京都町田市	
開催日時	令和3年11月25日（木） 9:00～9:55
開催場所	町田市役所 3階 会議室
語り部	上野未生 （岩手県大槌町）
参加者	自主防災組織 50名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 防災訓練の参加率が低下している。 ・ 感染症対策と避難施設の収容人数 ・ 若年層の危機意識が低下している。
内容	<p>(1) 震災を知り、避難所運営を手掛けるまで</p> <p>私の出身は愛知県名古屋市だ。若いうちから海外の医療チームに所属し、発展途上国での看護師業務に従事していた。そのさなか東日本大震災をニュースで知り、日本に戻ることを決意。岩手県大槌町に派遣され、避難所運営のサポートに従事した。大槌町では災害対策として避難所運営時の組織図などを作成していたが、被災時は被害が大きく、配置通りに立ち回れない状態となっていた。</p> <p>(2) 大槌町の被害状況について</p> <p>大槌町では地震・津波よりも火災被害が大きかった。当時多くの世帯がプロパンガスを使用していたため、地震後の小さな火災がきっかけで約2000世帯分・4000本のボンベに次々と引火し三日三晩燃え続けたためだ。この災害で、人口の8%にあたる1286名（うち3分の1が行方不明者）の方が犠牲となった。</p> <p>特に被害が酷かったのは旧町役場。対策本部を立てていた役場は全焼し、町長・幹部レベルの職員7割・その他の職員3分の1が火災の犠牲となった。町民を誘導できる人材を失った町は混乱の中で避難所運営を開始。常時500～800人がストレスを抱えながら過ごす空間では小さなもめごとが絶えなかったが、日常的に近隣の間人関係や助け合いが出来ている大槌の地域性に助けられ、もめごとが大事になることは少なかった。</p> <p>(3) これからの災害に備えておくべきこと</p> <p>災害時の職員配置・もしもの場合のサブ配置までは考えられていたが、ここまで人が不足する事態になることは当然想定されていなかった。避難</p>

	<p>生活では用意する食料の数・配り方など決めることが際限なく出てくるが「この人はこれをやる」と決めてしまっていたことにより「この人がいない時どうすれば」と自ら決断できない役員が多いことを感じた。充て職をするよりも避難所運営の仕方・各動きに適した人の共有を全員に行い、災害発生時に居る人材でそれぞれの役割を当て込んでいく、という形のマニュアルが今後の災害対策には必要となるだろう。また、しっかりとした意思決定を行えるよう「やることリスト」で物事を考えるのではなく、「最低限幸せに過ごせるようにするには」という視点で考えることを意識していただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>非常時に相手の見えない部分を知り、優しくすることは難しい。だからこそ、普段の暮らしの中で人と関わる大きな災害対策になる。誰もが決断を下せる仕組みを作ること、地域のコミュニティをより強めることに取り組んでいきたいと思った。</p>

開催地名：広島県熊野町	
開催日時	令和3年12月2日（土） 10:00～11:00
開催場所	熊野町役場3階会議室
語り部	甚野敬司（宮城県大和市）
参加者	約30名
開催経緯	本町は、平成30年7月豪雨により大きな被害が発生したが、災害から3年が経過し、職員の入れ替わりにより、町職員の立場として災害を経験していない者も増えてきた。また、豪雨災害からの復興途中ということもあり、地震に対する備えが十分とはいえない状況である。
内容	<p>(1) 震災時の救助活動</p> <p>震災当時、私は福島市に在住する自衛官だった。発災直後から福島で災害救助にあたり、その2日後に仙台市石巻市へ派遣。人命救助・避難誘導・避難所支援・瓦礫除去・入浴支援などを行った。また、原発事故で危険な区域となった浪江町にも赴き、除染活動・立ち入り禁止地区の搜索・一時帰宅の補助・役場の復旧などを手掛けた。</p> <p>(2) 避難所支援と除染活動について</p> <p>石巻市は津波と火災によりまるで戦場のような光景となっていた。自衛官として受けた命は、重機を使用した人命救助・安置所へのご遺体の移送など多岐にわたる。避難所支援ではつらい避難生活を支えるため、近隣の温泉から源泉を運んで野外風呂を開設。さらにコミュニケーションを深められるよう検温・血圧測定などが出来る場所作りも行った。</p> <p>浪江町の立ち入り禁止区域で除染活動を行う際は防護服が欠かせなかった。汚染された落ち葉や廃土を徹底的に掻き出し地中に埋め、ブラッシングと高圧洗浄を繰り返すことで少しずつ汚染量を和らげていった。途中、一時帰宅者の受け入れと移送も担当。自衛隊、東電や環境庁の職員、地域の除染チームとともに毎日のように現地本部会議を行いながら復旧に全力を注いだ。</p> <p>(3) 大災害に備えておくべきこと</p> <p>震災を経て初めて家族・親戚など身近な人との繋がり大切さに気付かされた。自宅ではある程度備蓄をしていたが、親戚から食料を分けてもらうなど助け合いながら日々をしのいでいたのだ。それを聞いた時、身近な</p>

	<p>者同士で日々災害リスクを想定し、防災について考え、然るべき備えをしていくことは重要であると感じた。そうしておくことで「助けてもらう人」より「助ける人」の数が増え、地域の防災力も自然と上がっていくからだ。また少なくとも職員の立場の者がより多く備えておくことで、有事の際に住民の負担を減らすことも出来るだろう。</p> <div style="text-align: center;"> <h2>今を生きる 責任</h2> <p>災害伝承 10年プロジェクト</p> <p>2021.12.2 基野 敬司</p> </div> 
開催地より	<p>講演を聞いて、災害から地域を守るためにはまず大切な家族やパートナーを守れるようにならないといけないと感じた。自分ひとりで災害の意識を高めるのではなく、周りと一緒に考え、備えることを大切にしていきたい。</p>

開催地名：大分県臼杵市	
開催日時	令和3年12月4日（土） 13:00～14:30
開催場所	臼杵市民会館
語り部	草貴子 （宮城県仙台市）
参加者	臼杵市防災士会、地域振興協議会（市内18地域）500人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練を継続的に実施している自主防災組織は多いが、ほとんどが沿岸部の地域であり、山間部の地域との間に防災意識の乖離がある。 ・防災訓練が定型化しており、マンネリ化している。 ・新型コロナウイルス感染症の影響により、避難所のあり方が大きく変わった。開設運営訓練を行いたいのが3密となるため出来ないジレンマがある。 ・東日本大震災の記憶が薄れてきている or 知らない子どもが増えた。 ・防災訓練を継続的に実施している自主防災組織は多いが、ほとんどが沿岸部の地域であり、山間部の地域との間に防災意識の乖離がある。 ・防災訓練が定型化しており、マンネリ化している。 ・新型コロナウイルス感染症の影響により、避難所のあり方が大きく変わった。開設運営訓練を行いたいのが3密となるため出来ないジレンマがある。 ・東日本大震災の記憶が薄れてきている or 知らない子どもが増えた。
内容	<p>(1) 東日本大震災までの生活</p> <p>震災当時、私は宮城県仙台市泉区市名坂に住んでおり、町内会を運営。仙台市泉区は、人口21万5千人の政令都市仙台の副都心である。私の住む泉区は内陸部であったため、東日本大震災において津波の被害はなかった。</p> <p>市名坂東町内会は仙台市の泉区東部に平成20年設立。働き盛りの40代、50代または単身赴任の家庭が多い中で、女性が立ち上がり作り上げた。役員9名は全員女性であること、集会所設立のために銀行ローンを組んだということは仙台市初の試みだった。地区の指定避難場所は町内から2km離れた小学校であるため、平成22年に完成した集会所は最初から緊急時の避難場所として防災を強く意識し、オール電化の導入、収納の高さを女性の腰に合わせる、トイレを2箇所設置するなど工夫を凝らした。</p> <p>(2) 震災時の状況と対応</p> <p>3月11日2時46分、近所の電気店で買い物中、地震に見舞われた。立ってられないほどの強い揺れがあり、ガラスの割れる音、人の悲鳴、天井が落ちる中、夢中で外に出た。建物も電柱も倒れそうで、車は上下に動い</p>

	<p>た。自宅に帰る途中、集会所近くの公園にぞろぞろ人が集まっていた。集会所を開けると、女性・子ども約 100 人が避難していた。</p> <p>まず、4 名の役員で話をした。避難者の大半は町内会に入会していないマンション住民だったが、全員受け入れることにした。避難者の中からリーダー・副リーダーを決めて、町内会はサポートする形で運営に入った。約 10 日間の共同生活では人間の様々な一面を見た。思いがけない嬉しい言葉をかけてくれる人もいる一方、自分の権利ばかり主張する人もいる。集団生活の中で一番怖いのは、些細なことで人の心や築き上げてきた関係性が壊れてしまうこと。どんな災害よりも、非常時に垣間見る本来の人間性が一番怖いのではないかと。様々な思想や宗教を持った方々との生活も、考えさせられることが多かった。</p> <p>(3) 震災を通して感じたこと</p> <p>町内会では平成 23 年 11 月から未就学児を持つ若い母子を対象に子育て支援を開始。平成 24 年 4 月には町内会として全国おもちゃ図書館に申請し、おもちゃ図書館ずんだっ子が誕生した。災害時に備えたまちづくりに関しては、毎年 1 回あるお祭りで防災訓練を開催している。煙を炊いての濃煙体験、防災減災に関するクイズや消火訓練を実施。お祭りの収益金の一部を津波遺児に寄付している。</p> <p>行政にできることは限られているので、避難所の運営など私たちが考えなければならない。地域防災で大事なことは、自分自身の特性を考えて、オリジナリティのある身の丈に合ったことを実践することだと思う。また、逃げることも避難所のお世話も、防災・減災を考えるにしても、健康な体がないでは何もできないということ。足腰を鍛えて、元気な体で邁進していただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>様々な人の視点で考えることが、より良い防災対策に繋がっていくのではないかと感じた。自分にできることは何かを考え、当事者意識を持って日頃の防災活動に取り組んでいきたい。</p>

開催地名：東京都東村山市	
開催日時	令和3年12月6日（月） 13:00～14:30
開催場所	東村山市市民センター第1・2・3会議室
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	自主防災組織 約70名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・女性や子ども等へのきめ細やかな支援を進める体制づくり ・女性視点に立った防災意識や更なる普及が必要 ・地域防災力の向上 ・若年層の危機意識啓発 ・若年層及び女性防災リーダーの不足
内容	<p>(1) 東日本大震災前の地域について</p> <p>私は岩手県釜石東中学校で勤務中に東日本大震災を経験した。釜石市は、岩手県沿岸南部に位置する町である。世界遺産として日本最古の洋式高炉があり、2019年には釜石東中学校の跡地でラグビーのワールドカップが開催された。</p> <p>釜石市では、1896年明治三陸地震津波や1933年の昭和三陸地震津波で大きな被害を受けた。また、30年以内に震度6弱以上の地震が起こる可能性は75パーセントであり、生きている間に必ず地震が来ると言われていたため、2011年よりも前から防災に取り組んでいた。</p> <p>釜石東中学校では小中合同の避難訓練やフィールドワークなどを実施。この事前体験を通して、自分たちは助けられる人ではなくて、助ける人なのだという気持ちが芽生えた。</p> <p>(2) 震災時の状況</p> <p>3月11日2時46分、中学校では帰りの会を終えた頃、先生たちの携帯電話から一斉に緊急速報が鳴りだした。大きな地震と津波が来ることを感じ、先生・生徒は全員外に避難した。地面は波打つようにグニャグニャ揺れた。2、3分の長い揺れが収まった後、サッカー部の子ども達が避難所に向かって走り出したので、他の生徒・先生もバラバラに走った。避難場所は、学校から約800m離れたデイサービスセンターの駐車場。しかし、海拔は変わらないためさらに上の第2避難所へ向かった。雪が降る中、小学生と中学生は手をつないで避難した。第2避難所は400mほど上がった場所だった。ここが最終目的地になっていたため、ほっとした東の間、海のほうからドーンと大きな音と揺れがあった。近くにいた先生が「逃げろ！死ぬぞ！」と大きな声で叫び、それを聞いて全員一斉に走り出した。国道を突っ</p>

	<p>切り、山を登り、長い時間山の中で過ごした。ここからどこに避難をしようかという話し合いを行い、開通したばかりの有料道路を通して釜石市役所の近くまで移動することになった。そのすぐ隣にある廃校になった中学校の体育館で一晩過ごすことになったが、地域住民も含めて小さな空間に2000名以上も避難をしたのである。</p> <p>この震災で釜石市は10メートルを超える津波が到達し、死亡者数888人、行方不明者数154人となった。その中で、中学校・小学校にいた子ども達は皆無事に避難をすることができたため、「釜石の奇跡」と報道されることになった。</p> <p>(3) 震災を通して感じたこと</p> <p>釜石には「津波てんでんこ」という言い伝えがある。これはてんでばらばらに逃げなさい、子どもは親のところに戻らず、親は子が帰るのを待つのではなく、その場から安全な場所に避難しなさいというものである。お互いを信頼してまずは逃げよう、自分の命を自分で守ることで、他人の命を守ることに繋がるといふ言い伝えだ。私たちが逃げたのは、当たり前行動であり奇跡ではない。そして、学校だけではなく地域全体に学びを共有することができていたら、被害を抑えられたのではないかと感じている。だからこそ、奇跡と称賛されることに違和感がある。後悔しない未来をつくるために、「自分の命は自分で守る。助けられる人から助ける人へ。学んだことを地域に伝える。」この3つを合言葉にしていきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>今回の講演を通して、改めて防災を地域に共有することの大切さを感じた。地域の皆様と共に災害に強い東村山市をつくっていきたい。</p>

開催地名	： 富山県砺波市
開催日時	令和3年12月10日（金曜） 19：00 ～ 20：30
開催場所	砺波市庄川生涯学習センター 1階ホール
語り部	平澤 つぎ子 （千葉県旭市）
参加者	市危機管理課、市民、防災士・防災団関係機関 100名
開催経緯	日本全国で地震や土砂災害などが多く発生している今、自分の地域は大丈夫と思わず、実際の災害に合う前に防災意識の向上に努めてもらう事を目的に講演会を実施することにした。
内容	<p>(1) 自然災害の特徴</p> <p>自然災害は「大雨・台風」「雪害」「火山噴火」「地震」「氾濫・洪水」「高潮・津波」「土砂災害」に分かれる。中でも予報が出るものは対策ができるが、特に予報のできない「地震」はどうしたら良いのか。時、場所、人を選ばず命にかかわる恐怖がある。</p> <p>(2) 東日本大震災発生時の旭市の状況</p> <p>東日本大震災発生の影響で、旭市にも甚大な被害があった。2回の地震発生により、民家の裏山が約100mにわたり崖崩れが起り、道路は液状化現象で波打った。市では地震発生後10ヶ所ある避難所への避難を指示した。1回目の地震発生約30分後に2回目の地震が発生し、その約30分後に第一波の津波が襲ってきた。2回目の地震から約1時間後に2～3mの第二波の津波が襲い、その後約7mに及ぶ津波で多くの人々が流されてしまった。</p> <p>(3) 避難所の状況について</p> <p>自分のいた避難所には約3,000人が避難してきた。津波で濡れたままの衣服、泥だらけの履物で避難所ではトラブルも多く発生した。避難所は1人分のスペースが狭く、いつでも誰もが出入り自由で、プライバシーの保持や精神的な休息が困難だった。寝食は同一場所なので周囲が汚れがちになり、断水や大量のごみによる悪臭、異臭、害虫が発生した。食料や水、寝具などの救援物資が十分でなく、入浴や清拭、更衣などの不自由さ清潔保持の困難があった。トイレの設備上の不自由さや使用困難など、特に女性や高齢者は、着替える場所、子供の泣き声や他人のいびき、老若男女が混在し、経済的なことや家族の話もできない。精神疾患、持病、結核、その他感染症の人が隣にくることもあるなど避難所生活で抱く不安や悩みが多くでた。</p> <p>地震発生時の3月12日～5月21日の間、食事関係（おやつ、昼食の配膳、夕食の下準備）、保健衛生面（掃除、窓の開閉、ごみの始末、体調の観察）、心のケアとして傾聴、話し相手、相談なども行っていた。その他にホットタオルの</p>

配布、生け花、依頼されたことなどを臨機応変な活動を行ってきた。色々な活動を行っている中で、避難している高齢の漁師からの差し入れや、中学生からの声掛けや挨拶などで、心の繋がる感じがとても嬉しく感じていた。天皇陛下の訪問で優しい言葉を掛けられ元気が出た避難者も多くいた。

(4) 参加者に伝えたいこと

震災から10年が経過し、振り返ってみると色々なことがあった。国・県・市では3,000本の植樹や防潮堤、避難タワー、復興住宅、防災資料館、緊急機内所の建設整備が行われ、地元住民は復興かわら版、冊子の製作、語り部、復興どんぶり、福幸弁当、防災教育など住民の底力・パワーを出してきた。言葉の力に注目し、防災教室、紙芝居の作成、復興女性三人歌集、各種イベントなど、体験を共有し震災の教訓を後世に残していきたいと考えている。日本ではどこでも地震が起きており、予報・予知は難しく、地震が起きない場所はないと感じている。正常性バイアスという意識を持たず、備蓄品、持ち出し品、家の中部屋の家具の固定など今一度備えを見直して欲しい。阪神・淡路大震災発生では誰に助けられたかという、自力、家族、友人・近隣で95%を占めており、公助ではなかった。自助、緊急時に備えた平時の研修、訓練、情報共有など、地元・町内・向こう3軒両隣で日頃の付き合いをする。身近なことでは、車のガソリンはメーターが半分になったら入れておくことや、備蓄品の確認は1年に1回、月日を決めてチェックする。そして連絡網の確認、スマホの充電をしておくなど日頃からの心がけ、自分たちの地域は自分たちで守る自主防衛組織の必要性が大事である。最後に「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉があるが、今は「天災は忘れないうちにやってくる」「忘れてもやってくる」。ものの準備をしておくことが重要だ。

「備えあれば憂いなし」という当たり前の言葉だが、しみじみと災害にあって感じたので、これから準備される皆様にお伝えをしたい。



開催地より

避難所の活動が非常に大切だという事を感じた。またいつ災害が起きるかどうかわからない今の日本で、災害に備える必要性を身に染みて考えさせられる機会を与えていただいた事に感謝します。とても勉強になりました。



開催地名：東京都昭島市	
開催日時	令和3年12月11日（土） 9:00～11:00
開催場所	昭島市役所1階市民ホール
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	市防災課職員、自主防災組織 約80人
開催経緯	自主防災組織を含めた市民の防災への意識啓発を行い、「自助」「共助」の取組を推進していくこと。 女性視点を取り入れた防災対策。 新型コロナウイルス感染症対策を含めた避難所運営。
内容	<p>(1) 東日本大震災発生の背景</p> <p>私は岩手県の中学校で11年間教師として働き、釜石東中学校で東日本大震災を経験した。岩手県釜石市は県の沿岸南部に位置する町で、世界遺産に登録された日本最古の洋式高炉がある。また、2019年に開催されたラグビーワールドカップの開催地は釜石東中学校の跡地である。当時、釜石東中学校は270名の生徒が在籍していた。</p> <p>釜石市では明治・昭和にあった地震津波で大きな被害を受けたため、震災よりも前から防災に取り組んでおり、学校でもさまざまな防災学習を行っていた。生きている間に必ず大きな地震が来るとも言われていたので、一人ひとりの危機意識は高かった。</p> <p>(2) 震災時の被害状況</p> <p>3月11日2時46分、中学校で帰りの会を終えた頃に大きな地震が発生した。地面は波打つように揺れ、校舎にいた生徒・先生は外に避難をした。2、3分の長い揺れが落ち着き、サッカー部員は避難所に向かって走り出した。それを見た他の生徒・先生もバラバラと走った。第1避難所に集まったものの、海拔は学校と変わらないため、そこから400mほど上がった第2避難所へ向かった。最終目的地に着いたのは地震発生から30分後。ここは最終目的地であるため大丈夫だろうと思った瞬間、海の方角からドーンと大きな音が聞こえてきた。呆然と立ち尽くしていたら、近くにいた先生が「逃げろ！死ぬぞ」と叫び、みんなハッとして一斉に走り出した。国道を突っ切り、山を登った。雪が降り、ずっと山の中で過ごすことはできなかったため、先日開通した有料道路を通過して釜石市役所まで移動することにした。最終的にはその隣にある廃校になった中学校の体育館で一晩過ごすことに</p>

	<p>なり、地域住民 2000 名以上が身を寄せた。</p> <p>この震災で釜石市は 10 メートルを超える津波が到達。888 名が亡くなり、154 名行方不明となった。幸いにも中学校・小学校で被災した子ども達は全員無事に避難できたため、後に「釜石の奇跡」と報道されることになった。</p> <p>(3) 被災して感じたこと</p> <p>「津波てんでんこ」は、てんでばらばらに逃げなさいという釜石の言い伝えである。子どもは親のところに戻らず、親は子が帰るのを待つのではなく、その場から安全な場所に避難しなさいという内容。お互いを信頼してまずは逃げて、自分の命を自分で守れば他人の命を守ることにつながる。だから、私たちは奇跡を起こしたのではなく、当たり前行動をただけである。</p> <p>本当は、事前に取り組んでいた防災学習を学校だけではなく地域全体にもっと共有すべきだったのではないか。そうすれば被害を抑えられたのではないかと感じる。</p> <p>今後は、「自分の命は自分で守る。助けられる人から助ける人へ。学んだことを地域に伝える。」この 3つを合言葉にして、多くの人に学びや経験を共有していきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>昭島市では後悔しない未来をつくるために、地域住民一人ひとりの防災意識を高めていきたい。</p>

開催地名：群馬県みどり市	
開催日時	令和3年12月12日（日） 10:00～11:30
開催場所	みどり市大間々町第12区公民館
語り部	菅野澄枝（宮城県仙台市）
参加者	地域住民 約50名
開催経緯	大間々町第12区自主防災会は、平成31年4月1日に発足のため、今後、訓練の実施、人材の養成、防災機材の整備等々、活動を積み重ねる中で、組織力を高めていくこと。
内容	<p>(1) 東日本大震災の被害状況</p> <p>東日本大震災のときに宮城県仙台市では大きな被害があり、沿岸部のほうはほとんど回折状態だった。今も行方不明の方が2万人近くいる。本震よりも余震の揺れのほうが強く、栗原町では震度6強を記録し、一晩中ずっと揺れ続き、地震酔いする方も出現したことなどもあり、被災者の不安が長く続いた。長時間の地震でお店も閉店状態で、夜間になると不安も増す。またマンションの高層では停電でエレベーターも停止されているため、住んでいる方の避難が殺到した。大川小学校で教員10名をはじめ、生徒など山に逃げた方以外にはたくさんの方が亡くなった。群馬県みどり市の震災に関する心配では、山が近いことから水害時の土砂災害が心配される。東日本大震災時の岩切地区は、屋根、瓦が全部バラバラ落ちていた。</p> <p>(2) 命を守るための行動</p> <p>発生時間が14時46分だったため、子どもたちが学校を帰宅する時間であった。信号機も止まった状態の中で、車を運転している方々も自宅に早く帰宅したいため急いでいる中、横断歩道で停止してくれない状況になった。そんな中、地域の方々が車止めをしてくれたため、子どもたちも元々信号があった横断歩道を渡ることができた。</p> <p>このことから、日頃からの地域の方たちの交流も大切で、平時から地域の中で協力しあうことが大事とわかった。その他、石積みのブロック塀も震災で壊れてしまうので、ブロック塀も危険になる。このため近づかないことが大切だ。また震災の時は川や海の水害もあるため、普段からの管理も重要である。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p>

	<p>震災後すぐに片付けをしても再度大きな地震がくることもあるので、片付けをすることよりも、その状況を受け止めてしばらくそのまま生活をした方が良い。配給も限りがあるため、数が足りなくなりもめたりすることもあった。普段から防災に対する知識を勉強しておくこと、震災経験を活かした防災マニュアル作成し普及することも重要となることがわかった。</p> <p>帰宅困難者は、自身の地域ではない避難所で様々な年齢・被害状態の方が入り混じって身を寄せ合っていた。特に若い女性が困っていたが、これをサポートすることも十分にできていなかった。震災のときにいろいろな判断をするためにも、女性の知恵でサポートをしていくことも大切であった。活動助成金で補助されている SBL という団体が全国で 700 名ほどいるが、その方たちのサポートも重要になる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>地域の住民同士のつながりが重要であること、また女性に対するサポートが必要なことを強く実感した。また全国に加盟者がいる SBL についても、今後活用を考えていきたいと思う。</p>



開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和3年12月12日（日） 10:30～12:00
開催場所	能美市防災センター
語り部	大内幸子 （宮城県仙台市）
参加者	50人
開催経緯	<p>あらゆる生活シーンに防災があるという考えで、世代、ジャンル幅広く様々な分野の切り口から各種防災啓発を試みているところですが、過去、災害発生する頻度が少ない又は県民性からの起因か、行政に安全を委ねることによる安心感の確保により、「正常化偏見」といった心理的バイアスが生じてしまい、防災意識の醸成に繋がっていない場面が見受けられる状況となっています。災害伝承をいただくことにより、災害時のリアリティな想像を巡らし、現在の地域の姿(リスク)や生活行動と比較しながら、地域や家庭での防災のあり方を考える好機となり、災害を自分事としてとらえ、自他への知恵袋として発展していき、大きな効果が期待できるものと考えます。</p>
内容	<p>(1) 福住町の紹介</p> <p>福住町は1,500人前後の新興住宅地で、過去の被災をきっかけに、独自の防災方式を生み出してきた。出来るだけ行政に頼らない地域力、町内あげての災害対策を行っている。まずは要支援者の名簿作成、住民全員の名簿作成（1年更新）、仙台市内外の町内会・市民グループとの災害時相互協力協定の締結、お互いにできる範囲内での支援と交流（14団体）がある。</p> <p>(2) 3.11（東日本大震災発生）の1日の動きと、避難所の状況</p> <p>東日本大震災の時も、炊き出しなどの訓練を行っていたので普段通りの活動ができた。安否確認を行い、公園にトイレと災害時瓦礫置き場を設置、小学校集会所でアルファ米のおにぎりづくりを行った。高砂小学校が避難所となり、500人収容の避難所に2,000人の避難者が集まった。仮設トイレは外にあって和式だったので足の不自由な高齢者には大変だった。洋式に変えてもらう要望もあげてきた。当時の避難所運営の防災マニュアルは男性主体で、女性参画が無かったが自主的に動いた。</p> <p>(3) 災害で思ったこと</p> <p>災害規模が大きいほど、公助には限界がある。自助・共助の取り組みが重要と感じ、併せて災害時には女性の視点に立った防災・減災が必要と思った。仙台市地域防災リーダーの認定、女性のための防災リーダー養成講座</p>

	<p>を受講し、せんだい女性防災リーダーネットワークを立ち上げ、東日本大震災の教訓と人の命の大切さなどを発信し、人材育成活動をしている。</p> <p>(4) 各種活動について</p> <p>せんだい女性防災リーダーネットワークの活動は、女性のための防災リーダー終了後に修了生が立ち上げ、5区で活動を行っている。メンバーは町内会役員、学校支援関係者、民生委員、防災士、市職員、SBLのメンバーから成り立っており、イベントや研修会など色々な切り口から楽しくなる防災を学ぶワークショップなどを開催している。女性ならではの視点とリーダーシップを活かした地域防災力を高める活動を意識している。福住町の防火・防災訓練では、災害時の対応、減災を「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに毎年訓練している。15年前から消防署の指導ではなく、福住町独自の企画と運営で、「全員参加型」を目指す防災訓練である。震災後、避難所運例マニュアルにも変化し、避難所は体育館から校舎の2~4階に避難する、避難所運営委員企画員として女性の参画、簡易トイレは7:3で洋式が増えたなど、女性の参画の大切さを示すこともできてきた。</p> <p>(5) 参加者に伝えたいこと</p> <p>出来るだけ行政に頼らない地域力を持つこと、地域の災害の歴史を次世代に根気よく伝承していくこと、備えや準備・取り組みをしている事は災害時のリスク削減に繋がること、お祭りやイベントを通じ、顔の見える関係が減災に繋がること、学校の防災教育と地域防災のタイアップが、地域の発展と防災力向上に繋がっていくことを伝えたい。防災・減災を進めていくには工夫と努力と知恵が必要だ。自分の命を守るため、大切な家族を守るため継続していれば、災害が起きた時には必ず役に立つと思っている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>災害にあった地域の沢山の事例や活動内容が分かりやすく解説していただいた。非常に苦勞しながら今でも試行錯誤している状況が伝わってきて、能美市の地域住民も防災体制の必要性を改めて気づかされた。</p>

開催地名：倉敷市立西中学校	
開催日時	令和3年12月22日（金） 9：00 ～ 10：00
開催場所	倉敷市立西中学校体育館
語り部	鈴木 秀光 （宮城県気仙沼市）
参加者	倉敷市立西中学校 第2学年生徒・教職員（約320名）
開催経緯	<p>今年度に入り、当市において同日に震度3の地震が2度発生しており、災害に対する備えは常に必要であるが、コロナ禍で訓練も実施できていない状況である。</p> <p>また、自主防災組織は、地域の安全を守るために基礎となる組織であり、防災の観点のみならず地域づくりの一環でもあり、組織の育成を促進しなければならない。当市は、少子高齢化により、一人暮らしの高齢者の増加、子供の減少は、地域の絆の弱体化に繋がっており、自主防災組織の要となる「防災リーダー」の養成が課題となっている。</p> <p>加えて、市職員においては、災害時には市内各地域において先に立つことを求められ、防災に関する知識を習得し、市職員一人ひとりが日頃から自主的な防災意識を持つことが必要であると考えている。</p>
内容	<p>(1) 気仙沼市における東日本大震災の記憶</p> <p>東日本大震災当時、気仙沼市は複合災害に悩まされた。地震、津波による被害はもとより、海面に浮かぶオイルタンクの損傷、油の漏出による火災被害が特に大きかった。瓦礫が油を吸い、瓦礫に燃え移った火が海上を漂いながら、町へと広がっていった。</p> <p>津波の力によって、550トンある船が町へ流されてきたり、瓦礫が道路を埋め尽くしたりと、いち早い救助の妨げとなる状況が起こった。まずは道路を広げるところから始まった。しかし、人がいるかもしれないので、手作業でどけるしかない。これらの悪条件が重なって、約1,300名ほどの人命が失われた。家屋についても、気仙沼市全体の約4割に被害があった。経済面でも、水産加工や魚市場など、海の近くの産業が多かったため、8割の会社に被害があった。市全体の人口が当時7万4,000人いたのだが、そのうちの約2万人が避難者となった。</p> <p>(2) 大災害時に命を守るには</p> <p>まず、避難指示におけるレベル5「緊急安全確保」の段階は、すでに川が決壊していたり、洪水が発生していて、避難すること自体がもう危険な段階だということを憶えておいてほしい。こうなると、とにかく屋上に上が</p>

	<p>るなど、命を守る行動をする段階である。</p> <p>避難とは、字のごとく、「難を避ける」ことであり、危険なところから危険でないところに行くことである。よって、学校や公民館に逃げるのはもちろん、安全な場所の親戚や知り合いの家に行くことも避難になる。</p> <p>大災害時には地面の液状化も起こるので、どういった場所が危険か、どこが安全かを平時からハザードマップで確認しておきたい。</p> <p>洪水や津波は、到達までに猶予がある。しかし、地震だけは突然襲ってくる。一発目の地震からまず身を守るために、身体を隠すことが重要だ。</p> <p>(3) 災害対策はフェーズゼロで</p> <p>眠っている間は気をつけることができない。夜中に地震が起きたとして、上から物が落ちてこないかを考える必要がある。また、落ち着いて逃げられるように、平時から部屋を整理整頓しておくことが重要だ。</p> <p>災害が起きてからどうする、ではなくて、災害が起きる前、平和な今日が災害のフェーズゼロと考えて、今なら何ができるかを考える。災害は止められないが、減災活動に取り組むことで被害を減らすことができる。</p> <p>「明日災害が来る」、今日がその前日だと思って、具体的な減災イメージを持つことが大切である。</p> <div data-bbox="512 1173 892 1458" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="919 1173 1378 1458" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>災害はいつ起こってもおかしくない。また起きてしまったらもう人間の力ではどうしようもないことがたくさんあることを改めて実感した。災害発生前に、避難経路を決めたり、家具を固定するなど、出来る限りの減災を実施したいと感じた。</p>

開催地名：愛媛県伊予市	
開催日時	令和3年12月23日（木） 10:00～11:30
開催場所	伊予市役所4階大会議室
語り部	澤島博（千葉県四街道市）
参加者	市職員 20～30名程度
開催経緯	実際の現場に立つ職員が災害対策本部の立場の経験を持つ講師の考え方を等を知ることが、行政職員等にとって知識の蓄積および意識の向上、今後の災害時における本部と現場の意識統一が見込めるとともに避難所開設運営をするうえで減災対策を講じることができる。
内容	<p>(1) 東日本大震災発生前の浦安市について</p> <p>私は東日本大震災が発生した平成23年3月、浦安市長の要請で浦安市の危機管理委員に赴任していた。浦安市は昭和40年以降に東京湾の海面一角を人工的に埋め立てられて造られた地域である。人口は当時約16万5000人で、その多くは東京都への通勤者である。東京湾を望む景観や綺麗な街並みなど、市民は豊かさ・便利さに目をとられ、地盤の脆弱性からは目を背けていた。現実には軟弱かつ地下水位の高い地盤であることから、特に長周期地震で液状化被害が発生しやすい状態であった。また、東京湾に飛び出た地域であったため、首都直下地震などの大震災では地勢的に孤立しやすい特性もあった。当時、職員も市民も液状化についての意識は低かったと認識している。</p> <p>(2) 東日本大震災による被害状況と取り組みについて</p> <p>東日本大震災による浦安市の液状化被害は日本最大規模であり、市域の86%で液状化現象が発生した。地盤沈下量は30cmから90cm、家屋は一部損壊以上が約9千戸、集積した噴出土砂の量は総集積量約7万5000m³であった。震災発生時から約1ヶ月間で33ヶ所の避難所を開設して、避難者約1万1400人を収容した。しかし、避難者と避難所職員間でトラブルが多発した。その原因は運営体制の未整備、学校などとの連携不十分、自治会からの協力体制が得られないことなどがあげられる。受付窓口では毎日電話が鳴りやまず、市役所対応への不満が殺到した。その不満や苛立ちは若い職員に集中し、長時間の拘束も重なって職員の精神的疲弊が大きくなっていった。災害2日目からは応急復旧をスタートして、自衛隊・県の協力のもと給水所を4月6日までに小学校16ヶ所で設置した。迅速な対応が市民の安心感につながった。しかし、下水道使用制限は排水全てに影響し、特に</p>

	<p>市街地においてトイレ問題は深刻となった。避難所公園に仮設トイレを男女別約 900 基設置したが、囲いシートの夜間シルエット化や夜間用ランタンの盗難など新たな課題も出てきた。このことから平時から避難所運営体制の確立や事前の検討が必要であったと感じた。</p> <p>(3) 教訓とまとめ</p> <p>地震はいつ起きても不思議ではないということを、まず市役所全員が覚悟する必要がある。平常時から市民・自治会などと共に悔いの残らない備えをしていただきたい。備えるだけで救える命がある。災害時は全職員がひとつになって、初動体制を迅速に確立し、被災者の目線で災害に立ち向かうことが大切である。その後の復旧・復興のためにも、国や県の支援を引き出し、他自治体職員の派遣などを要請し、さらには市民・自治会・産官学などの協力を得て、総合力を高めて対処することが重要である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>南海トラフ巨大地震が切迫する状況にあり、愛媛県伊予市では最大震度 7、最大津波高 2.5m を予測、風水害など複合災害になることも懸念されている。そんな中、今回の講演を通して災害対策における行政職員の心構えの大切さを改めて感じた。職員ができることは限られており、市民や他の自治体、県や国と協力して防災に取り組んでいきたい。</p>

開催地名：奈良県桜井市	
開催日時	令和3年12月23日（木） 13:30～15:00
開催場所	昭島市役所1階市民ホール
語り部	鈴木秀光（宮城県気仙沼市）
参加者	市防災課職員、自主防災組織 約80人
開催経緯	地震、台風、記録的豪雨など様々な自然災害が日本全国で多発している。特に桜井市内には奈良盆地東縁断層帯が走り、最大震度7の地震が想定されているが、これまで大きな災害を経験したことがなく、災害時にどのような状況に陥るのか、どのような対応が求められるかなど、職員の災害に対する認識、意識が高いとは言えない状況である。
内容	<p>(1) 震災が起こる前の気仙沼市</p> <p>私は東日本大震災当時、宮城県気仙沼市役所に勤務していた。気仙沼市は宮城県の北に位置し、住宅・工場・魚市場が一緒に並んだ水産業と観光中心の街である。</p> <p>慶長の天津波、明治三陸津波、昭和三陸津波など昔から津波による被害に遭っており、学校でも日頃から防災教育に力を入れていた。宮城県沖地震は30年以内に99%発生すると言われ、県の発表による浸水想定区域を標したハザードマップを各戸に配布した。しかし、5000年に1度の想定外地震が発生。ハザードマップを安全マップとして誤解し、「着色されていないエリアだから私の家は大丈夫」と思って避難しなかった方は被災してしまったのではないかと危惧している。市役所は浸水区域から外れていたものの、すぐ目の前の道路を津波が襲い、がれきは散乱。城が水攻めされたような状態となり、籠城するしかなくなった。最悪を想定しきれていなかった甘さが招いた結果である。</p> <p>(2) 東日本大震災時の凄惨な状況</p> <p>地震発生当時、気仙沼市の沿岸部では最初引き潮だったが、やがて押し波となって街に迫ってきた。想定以上の津波により、漁船用のオイルタンクは流されてしまった。あふれ出た重油はがれきに浸み込み燃えだすと、海を漂って街に火災が広がった。市役所に逃げ込んでくる人も大勢いた。市内全域は停電となり、皆暗闇の中で過ごした。翌日、がれきに埋め尽くされ救助に向かうのは困難な状況。自衛隊や警察、消防の方々は、がれきを素手で一つひとつ外に出していったが、人命やご遺体を守るという観点からすぐに取り掛かれなかった。市全体は地盤沈下により70cmほど沈み込ん</p>

	<p>だため、津波の水が抜けていかず、高潮でなくとも道路に海水が入ってくる状態だった。約 1300 人もの方がお亡くなりになった。被災家屋・被災世帯数は 1 万 5815 棟、これは全体の 40.9%にあたる。</p> <p>気仙沼市の場合、リアス式地形ということもあり平らな場所は少なく、ライフラインを設置できるような条件が少なかった。そのため、野球場や公園、小中学校の校庭などに仮設住宅を設置。生徒は校庭を使わず、部活動ができないまま卒業していったケースも多い。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た大切な考え</p> <p>震災直後、全国の一部の方々が市役所まで来て物資を届けてくれた。徐々に置ききれない量になり、使わなくなった青果市場に置くようになっていった。次第に体育館や美術館なども大量の物資でいっぱいになる状態であった。途方もない量が届くため、仕分けや保管、配送の整理を行う体制が必要であることも覚えておいていただきたい。この教訓を踏まえて、当市では 2021 年 7 月に物資集積配送基地を建設。受入・搬出方向を分けて、渋滞防止ができるような施設をつくった。</p> <p>大事なのは、フェーズ 0 で何をするかだ。平成 23 年 3 月 10 日、あなたは何をするだろうか。今日は歴史的な大災害の前日かもしれない。自分を、家族を、大切な人を守るために、あなたなら何ができるだろうか。それは防災において非常に重要な考えである。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>奈良盆地東縁断層帯は活断層の災害として非常に発生確率の高い状態となっている。扇状地につくられている街であるため、地震があれば揺れやすくなり、液状化しやすいことも想定している。</p> <p>今回の講演を通して、災害は止められなくても被害を最小限に食い止めて被災しないようにすることはできると感じた。準備しても準備し足りないことはないと考え、日々防災に取り組んでいきたい。</p>


開催地名：京都府京丹後市	
開催日時	令和3年12月24日（金） 10:00～11:30
開催場所	いの町役場本庁舎1階 「いのホール」
語り部	仲條富夫 （千葉県旭市）
参加者	いの町職員 約30名
開催経緯	<p>現在、町では若手職員を中心とした防災意識の向上に取り組んでいるが、多くの職員が大規模災害を経験したことがないため、予想を超えた混乱が発生し、動揺する中、様々な対応が求められることが想定されます。そのため、過去の災害体験や教訓を受け継ぐことで、大規模災害の際にいかにして復興を遂げていくのかという意識を持つことが町職員育成の課題です。</p>
内容	<p>(1) 東日本大震災発生時の状況</p> <p>私は千葉県旭市で被災した。東日本大震災の発生時、飯岡小学校付近で津波の被害に遭ったが九死に一生を得た。飯岡小学校は一時避難所となり、子どもからお年寄りまで400人くらいが身を寄せた。</p> <p>(2) 震災直後の問題点について</p> <p>震災から2、3日は災害を乗り越えようという気持ちがひとつになり、一丸となっていた。しかし、気持ちの落ち着いてきたところに、避難所をあたかも我が物顔で私物化する者が出てきたのである。校長室や職員室に入り込み、横柄な態度で占領していた。原因は市職員の手が回らず、指揮できなかったからだと考えられる。別の市からお手伝いとして職員がやってきたものの、よそ者として扱われ口出しすることはできない状態であった。</p> <p>震災2日目には1300人近くのボランティアが受付に殺到。一番多い日には1800人にも達した。しかし、指揮できる役所の人間がおらず、ボランティアを勝手に動かすことはできない。対応しきれなかったボランティアには「次お願いします」とお断りするしかなかった。</p> <p>世界共通で災害発生後に買いだめをする人が現れる。旭市では車を何台も所有している世帯が多かった。普段は燃料半分で生活していけるにも関わらず、ガソリンスタンドに駆け込み皆10リットル入れていく。買い占めなくても大丈夫と伝えても必ずパニックに陥る人がいる。避難所でも最初はペットボトルを家族の人数分配布していたが、お茶に替わり、ジュースに替わっていくにつれ、市民は不安な気持ちを覚えていった。「もうお水ないって」と子どもに話しているシングルマザーがいた。平常時であれば、飲み物を分けてくれる人はたくさんいるのに、皆自分のことで必死になり、</p>

	<p>優しい言葉をかけられなくなっていた。</p> <p>(3) 震災を通して得た教訓</p> <p>どの地域・集落にも町内会や消防団、社会福祉協議会などがある。そういった人たちが先頭に立つことで話をまとめることはできると考えられる。被災すれば職員や役所の人間が必ずしも動けるとは限らない。だからこそ、町のことを良く知る人間が指揮を執ることで災害時も統制できるのではないかと感じた。いざという時のために機能する仕組みをつくっておくべきである。</p> <p>市民に覚えておいてもらいたいことは、助けは必ず来るということ。もちろん、まずは自分を助けること（自助）が第一。そのあと近くを助けて（近助）、共に助かり（共助）、1週間後に公助は遅れてくるものだと知っておいてほしい。それが理解できれば、物を奪い合うということもないだろうし、人にも優しくなれるはずである。デマに振り回されるということもなくなる。国からの支援金・義援金も出るから、慌てる必要はないと強く唱えたい。</p> <p>「私のところは大丈夫」そう思って被害に遭う人はとても多い。災害はいつ来てもおかしくない状態だと思って、逃げる場所の確保など事前の備えは必ずしておくべきである。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>防災マニュアルを備えていたとしても、いざ災害時に対応できる市職員がいない・足りないということは起こりうる問題である。全てを自分達だけで行おうとするのではなく、「もしもの災害」を乗り越えるために、事前に市や町の住民とコミュニケーションを取って仕組みをつくることが大切であると感じた。</p>

開催地名：兵庫県明石市	
開催日時	令和4年1月14日（金） 14:00～15:30
開催場所	明石市役所本庁舎
語り部	鈴木秀光 （宮城県気仙沼市）
参加者	市職員（係長級）80人～100人程度
開催経緯	<p>本市では、阪神・淡路大震災以降、大規模な地震が発生しておらず、震災を経験している職員が減少しており、さらに避難所を開設するような風水害もほとんど発生していないため、災害対応業務の伝承が課題となっている。特に、災害対応は平常時とは異なり、管理職以外でも意思決定を行う場面が増えるが、本市では幹部職員からの指示がないと行動できない職員も存在するため、災害時に指示待ちの職員があふれ、災害対応業務が回らなくなることを危惧している。</p> <p>そこで、災害時に自分で意思決定できるよう、平時から幹部職員の指示を待つのではなく、自分の頭で考えて行動することが重要であることを伝えてほしい。</p>
内容	<p>(1) 気仙沼市における東日本大震災の被害</p> <p>気仙沼市は、震災前は人口74,000人を有する市であり、水産業と観光を中心に栄えていた。リアス式海岸といった地形上の特徴から、東日本大震災以前も三陸沖の津波を幾たびも経験してきた。</p> <p>東日本大震災当時は、最大震度6弱を記録。地震そのものによる建物の崩壊はあまりなかったものの、その後の津波によって多くの家が被害を被った。</p> <p>また、津波による直接の被害はもとより、沿岸に設置されたオイルタンクが破損することによる火災も相次いだ。オイルタンクから漏れた油が津波によってできた瓦礫に染み込み、可燃性物質となって町に漂着。それらが火種となった。</p> <p>東日本大震災は海溝型地震だったため、プレートの動きが大きく、気仙沼市も市全体が70センチほど沈み込んだ。そのため、通常の満潮であっても道路からの浸水や、水が抜けないといった状況が続いた。地盤沈下によって町が動いたため、GPSがうまく作動しないといった弊害も起こる。死者数は1,000名以上。市民の約50人に1人が犠牲となった。</p> <p>(2) 震災後の復興</p> <p>まず、仮設住宅は93箇所に点在して建てられた。リアス式地形のため、</p>

	<p>山が多く、平地が少ない状況だったために、こうして点在するかたちを取らざるを得なかった。</p> <p>津波による水害の影響は復興作業にも大きく影響した。市役所が浸水したため、書類やCD、パソコン等の行政に必要なデータが汚損したからだ。当時はクラウドシステムの利用を考えていなかった。</p> <p>また、当時は緊急用の発電システムが存在せず、発電機はあったものの、しばらく使用していなかったために使い物にならなかった。支援物資の集積、管理も慣れない市職員には大変な作業だった。気仙沼市の場合は、近隣に廃業した青果市場があったので、そちらを使うことで難を逃れたかたちである。だが、実際は支援物資の受け入れ対応もマニュアルを決めておくことが重要と考える。</p> <p>(3) 震災前に考えておくべきこと</p> <p>地震が起きたら、まず何をするのか。それを考えておかねばならない。本部はどこに立ち上げるのか。庁舎が被災したらどこに行くか。データを持っていく準備はしてあるか。道路が途絶した場合は移動をどうするか。支払業務や死亡届等、災害時でもやらねばならない業務は多数ある。</p> <p>ご遺体の安置場所も決めておく必要がある。行方不明者のご家族を探すのにも、市職員の力がいる。</p> <p>震災対応がある程度落ち着いた後には、生活再建支援金など、支援制度への対応が始まる。あらかじめ各制度を理解しておかないとスムーズに対応はできない。</p> <p>「フェーズゼロ」、つまり、今日は災害の前日であるという意識を念頭に置いて、具体的な災害対策を考えていくことが重要である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>市の防災計画を見直し、自分の担当業務について改めて確認をする必要があると感じた。災害が発生した際に十分な行動ができるように備えたい。</p>



開催地名：兵庫県加古川市	
開催日時	令和4年1月17日（月） 14:00～15:30
開催場所	加古川市青少年女性センター4階 大会議室
語り部	甚野敬司 （宮城県大和町）
参加者	加古川市役所職員 約100人
開催経緯	防災・災害対応は防災対策関係部署のみが行うものといった他人事意識から、職員として災害に最前線で対応に当たらなければならないという意識が低く、平常時からの災害に対する心構えができていないことが課題である。
内容	<p>(1) 派遣された自衛官から見た東日本大震災の状況</p> <p>自衛隊は災害時、それぞれの担当地域を防衛警備する任を負っている。発災直後、原子炉建屋の水素爆発等、情報が錯綜する中で人命救助と行方不明者捜索を行った。5月移行は除染作業へと従事した。</p> <p>大震災の場合、強い余震が幾度も起こるといった特徴がある。繰り返し地震が来るようなものなので、一度目の地震からの避難中に被害に遭うケースも多い。</p> <p>また、あまりニュースにはならないが、「大震災が起こると治安が非常に悪くなる」という影響もある。窃盗が多発したり、路上で飲酒したりする方も出てくる。管理職の方々は、ぜひ「治安の悪化」を念頭に入れておいてほしい。</p> <p>被災者への癒やしという意味では、入浴は大変人気があった。地元の温泉の湯を運んできて沸かし直した温泉は、被災者の心を大いに癒やした。</p> <p>(2) 原発対応の記憶</p> <p>原発事故の影響があった地域でも被災者の捜索は行われる。タイレックスやウェダーといった防護服を着込んでの対応は、初夏を迎えると気候的にもずいぶん辛いものがあった。具体的な作業としては、被災地の遺留品等を住民の方々にお返しするために二本松市に集積したり、道路を修復したり、環境整備を行った。</p> <p>他には、空間線量を減らすための除染作業も行った。まず、枯葉等を地面から除き、次に、側溝等に落ちたものも丁寧に取り去る。福島県では個人の住宅でも、こういった作業を行っている。敷地内の表土を剥いで、砂利やマットを上を敷く。</p> <p>役場の除染作業も含め、若い隊員たちによる献身的かつ誠実な対応が多</p>

	<p>く見られたことを、今でも誇りに思っている。</p> <p>(3) 最悪の事態に備える、ということ</p> <p>大災害においては、「うちだけは起こらない」という意識を捨てるのが最も重要である。思考停止をやめ、普段から何を備えておくべきかを考える。</p> <p>職場での顔、住民としての顔、親としての顔、友としての顔。人間は状況によっていくつもの顔を使い分けている。その時の自分の立場を理解して、災害時には正しい行動を取ってほしい。阪神淡路大震災の際、私の同期は行方不明の家族を置いて、自衛官としての任務を果たしに来た。しかし、上司は「まずは自分の身内の所在を確認してこい」と送り返したという。それも管理職の一つの判断だと思う。</p> <p>最後に、震災時に大事と感じたことを述べる。まず、停電のときに最も必要なのは灯り。停電したとしても冷凍食品は庫内で1日程度は持つので、備蓄食料として活用すると良い。また、カセットコンロは非常に頼りになる。</p> <p>さらに、自動車の給油はこまめに行うこと。発災してしまうと給油はままならない。休日の前や土日など、ことあるごとに満タンにしておくと思う。</p> <p>大災害時には、家族や身近な者を守れないと市民の負託にも応えられないということを意識して、災害対策に取り組んでほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>身近な人の命を守ることが1番（家族の安全を一番に考える）であることが強く記憶に残った。災害の恐ろしさを改めて実感したため、阪神淡路大震災の被災者として、自分も伝承者として伝えていきたい。</p> <p>備えることの重要性をあらためて認識できた。</p>
開催地名：京都府京田辺市	

開催日時	令和4年1月18日(火) 13:30~15:00
開催場所	京田辺市中央公民館大ホール
語り部	宮本英一 (千葉県旭市)
参加者	自主防災組織、区・自治会の長もしくは防災担当者、災害ボランティア登録者、京田辺市議会議員、防災士、市職員 約100名
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・自主防災組織の活動について、組織はしているものの、事実上活動があまりできていないところが多い。 ・指定避難所までの距離が遠い地区があり、避難所の確保が課題 ・大きな災害を経験していないため、危機意識が低下していると感じる ・公助への期待が過大である ・女性視点の防災について、対応が不十分
内容	<p>(1) 旭市における東日本大震災の記憶</p> <p>千葉県旭市は、九十九里浜の東端にある市である。千葉県の北東に位置し、漁業が盛んな町として有名。旭市は、東日本大震災によって14名が亡くなった。津波は計3回訪れ、堤防を越えた津波で流されたケースが多い。津波の到達距離は200から300mであり、旭市全体が襲われたわけではない。震源地の東北地方で起きた津波とは比べられない規模だが、震源地から遠い千葉でも津波による大きな被害があったことは知ってほしい。</p> <p>九十九里浜は東北地方のリアス式海岸と違い、広い海岸である。そのため大きな津波は来ないと思い込んでいた。小学校の授業でも「大きな津波はリアス式海岸で起こるもの」と聞いた記憶がある。1回目の津波は堤防を越えなかったものの、2回、3回と続いた津波は堤防を越えた。堤防付近で清掃活動をしていた私と妻は、津波にのみ込まれた。私たちはとっさに家の脇に隠れたものの、反対側の道路へと押し出された。</p> <p>その後、運良く漂着物にしがみつくなどして難を逃れることができたが、濡れた寒さで震えが止まらなかったことを憶えている。なお、発災直後からその後の復旧までは、防水タイプの携帯電話が非常に役立った。</p> <p>(2) 区長として復旧作業に従事</p> <p>旭市は、平成17年に1市3町で合併してできた市である。私が住んでいる旧飯岡町は、海岸近くに人口が集中していたため、被害が一番多かった。しかし、津波の到達距離の関係で、町内のたった90軒程度の中でも、被災した人と被災しなかった人に分かれた。そのため、家から泥を掻き出す作業をする人もいれば、ゴミを出す日の確認といった日常寄りの声も私のも</p>

	<p>とには寄せられた。</p> <p>主に寄せられた声としては、「被災した家を壊すのに補助金が出るのかどうか」、「解体業者の当てはないか」、「家の前の道路の瓦礫をどかしてほしい」等々。相談がある都度、市への連絡や、現場確認を行った。</p> <p>県外からのボランティアも多く集まってくれていたが、ボランティアの安全確認のために活動時間に制約があったり、受付処理が煩雑だったり、当初はまとまった活動がしづらい状況にあった。これらの問題については、被災状況を視察に来た市長や担当課長に直接お願いをして、解決をはかった。</p> <p>(3) 避難所の状況</p> <p>避難所で最も困っていたのは、トイレ関係。断水で水が流せなくなった。簡易トイレも併用したが、高齢者や障害者には使いづらいものだった。また、当時は避難所の運営がおぼつかなく、誰が現場指揮を執るのか曖昧だった。今は運営マニュアルを用意している。</p> <p>災害時には、市民も、職員も等しく被害を受ける。発災時に自分の家族を守りながら、どう地域のために行動をとるか。日ごろからよく考えておくべきだと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>区として防災グッズを購入しているが、冬に必要なものは不足していると感じている。来年度は、灯油ストーブ等の検討と暖かい食等を考えていきたいと思う。</p> <p>また海に面していないため津波の被害の心配はないが、木津川が氾濫した場合の対応をどうするかと考える場合の参考になった。</p>

開催地名：東京都中野区	
開催日時	令和4年1月22日（土） 10:30～12:00
開催場所	中野区役所 7階会議室第8・9・10会議室
語り部	菅野澄枝 （宮城県仙台市）
参加者	中野区民 100名程度
開催経緯	<p>区での課題は、避難所の運営についてである。</p> <p>当区では年に1度程度、各避難所で避難所運営会議という形で、地域の避難所の運営本部の方と避難所運営についての協議を行っている。</p> <p>しかし、実際に大災害の経験がないため、中々実感が湧いてこないことや予想を超えた混乱が発生することも懸念される。</p> <p>そこで、実際に被災地に派遣された方のリアルな話を聞くことで、今後の避難所運営のあり方について参考にして頂きたい。</p> <p>また、避難所生活（運営）における立場の弱い方（女性・子ども・性的マイノリティー・高齢者・障害者等）についてどう考えていけばいいかお話しして頂きたいです。</p>
内容	<p>(1) 仙台市における東日本大震災当時の記憶</p> <p>私が住んでいる仙台市宮城野区は、沿岸部から内陸に向けて10キロほど入った地点なので、直接の津波被害はなかった。しかし、近隣にある奈良北川からの逆流、および、沿岸部の皆さんの避難といった影響は大きかった。</p> <p>また、地盤の関係で仙台市内でも宮城野区は最大震度を記録。全壊、半壊の世帯も多く出た。</p> <p>宮城野区では、当時の女性区長の発案により、総合防災訓練の際に女性による防災宣言を作ったり、防災組織について改めて考える活動が始まっていた。奇しくも震災が起こる9ヶ月前のことである。「女性であっても、子どもであっても、高齢者であっても、自分の大切な人を守るのは同じこと。全てを男の人の仕事にするのではない」という、当事者意識を重視したメッセージを中心に活動を広げていった。防災宣言を作り、国連の世界会議で発表させていただいたりといった諸々の活動が、現在のSBL、仙台市地域防災リーダーのひな形となっていった。</p> <p>(2) SBLについて</p> <p>防災は、自分一人で行うものではない。みんなが自分の問題と思い、力を合わせて取り組むことで大きな力となる。</p> <p>SBLは仙台市特有の地域防災の動きである。SBLの養成は仙台市が行っ</p>

	<p>ているが、実際の活動は町内会が主体であり、町内会を支援する組織である。現在は 694 人の SBL がおり、そのうち、177 人が女性だ。</p> <p>自主防災組織と協力し、その構成メンバーとして災害対策本部を運営したり、計画策定をしたり、平常時からの顔が見える関係作りも重要な業務といえる。やはり、災害時に初めて見た顔が指示をするよりも、気心の通じた人間が声がけをするほうが、何事もスムーズに行くと思う。SBL は実働部隊という側面はもとより、地域住民に防災活動を啓蒙していくことも重要な任務である。</p> <p>(3) お互いを思い合えるからこそ、自助の力が湧く</p> <p>災害時には、自助、公助、共助という考え方が一般的だが、自助というのは、「自分の力だけで自立してください」というのとは違うと思う。私たちは「地縁力」と呼んでいるが、地域の中で心を通わせて、何事に対しても他人事はない、という意識でもって助け合っていくことが肝要と思う。お互いのことを思い合える状況があつてこそ、自分で頑張る力が出てくる。地域というのは、そういった縁の積み重ねではないかと考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>地域の中での声がけの大事さを痛感した。かたよった訓練ではなく、若い人、高齢者それぞれの協力の仕方、理解度などを考える必要があると感じた。</p>



開催地名：滋賀県大津市	
開催日時	令和4年1月25日（日） 14:10～15:10
開催場所	大津市市民文化会館
語り部	太田 千尋 （宮城県仙台市）
参加者	学区自主防災会長 36名
開催経緯	<p>当市では、琵琶湖西岸断層帯や東南海・南海地震による強い揺れは広範囲に及ぶとされ、琵琶湖西岸断層帯による地震の予測震度は最大で震度7、建物の全壊は38,504棟、死者数は2,182人に及ぶなど、甚大な被害が想定されている。</p> <p>長期間にわたって大規模地震による被害が発生していないことから、地域によって防災意識の差があり、また、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点、女性の視点から見た避難所運営においても自主防災組織等の住民の防災意識には地域差があるのが現状である。</p>
内容	<p>(1) 震災時の自主防災組織の活動</p> <p>自主防災組織の活性化、および組織作りに従事してきた経験から言うと、自主防災組織は法律に決められているわけではないので、まず、住民の理解を得るのが非常に難しく思う。しかし、自主防災組織の活動がしっかりできているところと、できていないところとでは、災害時に大きな違いが生じてしまう。</p> <p>仙台市では、やはり津波の被害が大きかった。津波は地震から約1時間ほどで到達。波の高さは地域によって大きく異なり、必ずしも同様に襲ってくるものではない。住宅が基礎しか残らないほど流された場所や、汚水処理場では50センチの厚さのコンクリート壁が歪んだケースもあった。私どもの防災組織は、こういった津波被害を受けた地域、その瓦礫の中から人命捜索を行った。水が引いたところは比較的楽だったが、まだ海水に浸っているところなどは、3月初旬の仙台では氷点下が当たり前なので、とても厳しい状況だった。</p> <p>また、4月に入って暖かくなってくると、今度は水が細菌汚染されて、皮膚が濡れただけで発疹ができることもあった。</p> <p>(2) 水被害の場合の対処法</p> <p>まず、洪水や津波による避難勧告は、根拠なく言っていることではないので、そういったものがあれば、とにかくしっかり安全な場所に逃げてほしい。逃げる場所は避難所ばかりではなくて、親戚の家などでも構わない。</p>

	<p>とにかく「危険なところから離脱する」ことが重要。危険なエリアから逃げさえすれば、命は助かる。</p> <p>水というと優しいイメージがあるが、実際の水被害は瓦礫や物が水に含まれているので、それら混じりの洗濯機の中に人間がそのまま放り込まれるのに近い。よって、最初のうちは五体満足で発見できたご遺体も、日が進むにつれて各部分だけになるなど、厳しいことになっていく。</p> <p>(3) 自主防災組織の効能</p> <p>自主防災組織は地域に根ざした活動なので、避難情報を救難者に提供できることが大きい。「あそこの集落にはお年寄りが残っている」など、具体的な情報があれば、救難活動がスムーズに進む。地域のことを知っている人が救出活動の取りまとめをすることで、女性や身体の弱い方やお子さんを優先したり、できるだけ家族単位で助けるようにしたりと、細やかな配慮も可能となる。</p> <p>地域の方々を守ることができるのは、やはり自主防災組織であると思う。とにかく率先して住民の方々を助けられるような、そんな自主防災組織であってほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>自主防災の必要性、及び普段からの活動の重要性を再確認することができた。今後の防災に生かしていきたい。</p>

開催地名：香川県小豆島町	
開催日時	令和4年1月27日（木） 14:00～15:30
開催場所	小豆島町役場本館3階大会議室
語り部	澤島 博 （千葉県四街道市）
参加者	町職員（議員） 50人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・過去2度（昭和49年・51年）の大災害を経験しているものの、現在、勤務する全職員がその経験がないことから、いざという時への対応が懸念される。 ・本町は離島という地理的条件にあり、物資輸送については航路に依存することとなるが、大規模災害時に岸壁等の損傷があれば、数日間は自力での復旧が必要となる。
内容	<p>(1) 千葉県浦安市の震災被害</p> <p>千葉県浦安市は、昭和40年以降に東京湾を人工的に埋め立てて作られた町である。従って、東京都に隣接した平坦できれいな町並みや、東京湾を臨む景観など、豊かで元気な町の一つだ。</p> <p>しかし、現実には地盤が軟弱で地下水位が高いため、地震の揺れで液状化被害が発生しやすい。また、東京湾に飛び出た町なので、災害時には孤立しやすいといった弱点もある。</p> <p>東日本大震災時には、日本最大規模の液状化被害が発生した。被害は地域の約86%に相当。土砂の噴き出しによる地盤沈下、建物の傾斜、地下構造物の浮き上がり、地下空洞化など、その影響は多岐に渡る。浦安市の中央部を流れる川の護岸もうねり、大きく損傷を受けた。上下水道、ガス、電気、生活道路等の生活インフラはひどく傷つけられ、復旧作業が難航した。</p> <p>(2) 震災対応と教訓</p> <p>まず、避難所は当日の15時15分に開設され、4月15日までの約1ヶ月間に33箇所で開催された。のべ避難者数は11,400人。運営体制が未整備だったことにより、当初は避難者と避難所職員との間でトラブルが多発した。学校や自治会との協力連携を含め、平時から避難所の運営体制を確立しておくことが必要と思われる。マニュアルの作成と訓練、および住民の啓発と協力は重要。</p> <p>続いて、災害対策本部も当日16時には第1回目の本部会議を行った。各部署は市長を中心にまとまっていたが、活動内容への理解が不十分であった</p>

	<p>り、指示待ち職員が多く、初動が遅れたのは問題だった。初動体制の確立は特に重要であるので、迷ったら災害対策本部を設置できるスピード感が求められる。</p> <p>また、震災直後から市民からの問い合わせが殺到して、職員の疲弊が激しかった。対応窓口をきちんと設置すること、上司からの援護体制を整えること、早め早めの情報発信が重要と思われる。特に、ケーブルテレビ等を利用した、災害対策本部からの定期的な情報発信、市長からの直接メッセージは行政への安心感を生んだ。</p> <p>(3) 復興に掛かった年月</p> <p>「絆、明日へ向かって」を復興の合言葉とし、浦安市は復興へ取り組んでいった。もちろん、ただ従前の生活を取り戻すだけでなく、震災で浮き彫りとなった液状化問題を解決するために、「液状化対策なくして復興なし」の観点で活動が進められた。</p> <p>調査委員会を設置して、液状化メカニズムを解明するとともに、やがて来る首都直下地震での再液状化を避けるために、施設ごとの液状化対策などを講じることを目指した。その後、平成 28 年 7 月、震災から 5 年 4 ヶ月後に復旧復興はおおむね完了した。</p> <p>いずれくる複合災害に立ち向かうためには、平常時から住民や自治会等と連携して、悔いの残らない備えをするべきと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>震災当日の避難所の開設・災害対策本部の活動・市民の問合せ等の対応について同じ様な事が予想されるので教訓・対策等が参考になった。又離島なので自衛隊・緊援隊等の応援要請をしてもすぐには来れない場合があるため、地元の消防・団での救助活動等になると思う。</p>

開催地名：岐阜県川辺町	
開催日時	令和4年1月26日（水） 15:05～15:55
開催場所	川辺中学校
語り部	神谷未生 （岩手県大槌町）
参加者	川辺中学校生徒 265名程度
開催経緯	大規模災害を経験していない志太支部管内消防団においては、必ず来るとの教えのもと、事前の準備はしているものの意識・技術を含め、更なる情報源が必要と考えています。
内容	<p>(1) 岩手県の被災当時の状況</p> <p>岩手県は本州の中で面積が一番大きい県である。岩手一つで四国がまるまる入るほどの大きさがある。よって、同じ岩手と言っても、エリアごとに地形条件は大きく違う。東日本大震災当時は、この違いが強みにも弱みにもなった。海沿いのエリアは軒並み被災。しかし、海に面していない市町村は比較的被害が少なかったため、震災後支援はそちらが中心となって行われた。</p> <p>大槌町は海から3キロも離れた地域だったので、住民に津波が来るという意識は薄かった。しかし、リアス式海岸の特性が災いして、山のほうであっても津波被害で亡くなる方がたくさんいた。海は近くなくても、川から逆流してくる水もある。川の近くに住んでいる場合は、災害時にどう逃げるかの意識作りが大切である。</p> <p>大槌町では、たまたま点検のために来ていた「はまゆり」という観光船が民宿の上にどっかり打ち上げられて、それが被災の象徴的なシンボルとなった。それぐらい、大きな津波が押し寄せた。また、大槌町では、地震と津波と火災の三つが複合して起きてしまったことも、被害が大きくなった理由である。人口の約10%が一瞬で命を失った。</p> <p>(2) 地震による地元経済への影響</p> <p>大槌町では、商業地浸水率が98%を記録した。これは、会社や商売をしている、大槌町で経済活動をしている土地のほぼ全てが被害を受けたという意味である。こうなると、災害からの復興はより遅れることとなる。また、町役場の被害も大きかった。旧町役場で災害対策本部を立ち上げたことによって、15mの津波を受けて、139名いた役場職員のうち、3分の1にあたる39名が一瞬で命を失ってしまった。さらには、集会を開いていたために、幹部レベルの職員も多く命を落とした。そのため、復興を取り仕切</p>

	<p>る人がほとんど残らなかった。</p> <p>(3)「逃げる」ことのシミュレーション</p> <p>ひとくちに「災害から逃げる」といっても、実際はとても難しいことである。逃げるためには、どこに避難するのかを知らなければならない。避難所を知っていても、徒歩か、車か、どういった手段でそこまで行くのか。さらには、家族が家に取り残されているとしたら、どうするか。</p> <p>災害時には、99%の命が避難所にたどり着く前に亡くなっている。しかし、逆に言えば、避難所にたどり着きさえすれば、何とかなると言える。逃げなければならない場面で、しっかり逃げる。それが自分を、ひいては他人を助けることにもなる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>避難場所を知っているだけでは、実際に災害が起きたときに逃げるのが難しいと感じた。どうやって逃げるかということを含めて学ぶことで、今まで以上に災害の対策を行っていききたいと思う。</p>

開催地名：愛知県知多市	
開催日時	令和4年2月6日（日） 10:00～11:30
開催場所	知多市健康推進課（知多市保健センター）
語り部	茨島隆 （青森県八戸市）
参加者	知多市災害時健康活動サポーター 30人程度
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・南海トラフ発生の危険が指摘されてはいるが、ソフト面、ハード面共に準備不十分。（マニュアル、避難所・救護所での医療体制について） ・専門職の集団ではあるが、災害時、特に直後の動きについて、具体的にイメージがついていない。 ・研修の機会はあるが、災害時の全体のイメージや、何を優先させて動くべきなのかなど、実践的な内容にまで落とし込めていない。
内容	<p>(1) 東日本大震災時の記憶</p> <p>東日本大震災時の八戸市の被害として、地震より津波の被害が多かった。津波は6.2mや10mなど、地形等により高さは異なるが、沿岸部を中心に多くの建物で被害を受け、八戸漁港の物流拠点機能が麻痺するなど、沿岸部近海地域の企業群等の生産活動は停止したことも分かっている。市内では死者1名、行方不明者1名、岩手県内で死亡した八戸市民4名、行方不明者1名、計7名が犠牲となっている。被害総額は1,213億円。住家の全壊は254名、住宅が半壊以上となった世帯は280世帯と発表されている。災害ゴミは約22万トンにも及んだ。</p> <p>発災時、ライフラインについては秋田・青森の4市10町2村を担当している21万3,000戸のうち20万7,800戸で停電した。復旧は43時間後の3月13日午前10時にされたが、一部の9,000戸は停電した状況であった。26日後にようやくすべて復旧され、ガソリンスタンドは3月末に営業を再開。しかし470世帯が3月15日まで断水していた。</p> <p>医療活動は、閉鎖しないで稼働できた。避難所の医療や健康管理活動は応援やボランティアの方の手助けがあったので、1万5,733人の避難者に健康状態の確認等の対応が実施された。市民病院は自家発電で電力を7～8割をまかなえるようになっているので、電気が使用できた。</p> <p>自治体の職員や庁舎が被災し機能を失うことがあるが、岩手県では町長が死亡し、職員136名中32が死亡または行方不明となり行政機能がまひしたという事例もあった。</p>

	<p>(2) その後の地域防災活動</p> <p>三陸地方の言い伝えとして、地震や津波の際は家族のことさえ気にせず「てんでんばらばらに自分の命を守るために1人ですぐ避難し、1家全滅共倒れを防ぐ」という、過去に何度も津波災害を受けてきた地域の古くからの教訓がある。そのような指導のもと防災訓練をしていた小中学生約600名の内、親が引き取った1名をのぞき全員助かったことは、このような教えの効果もあったと感じている。子どもに教えたこととして、「君が率先して逃げたら、家族も助けられる」ということがあった。災害の怖さを伝えることは大事だが、過去の教えが子供たちを救ったように、どのように行動すべきかを伝えていくべきだと考えている。</p> <p>災害時には平常時で考えたマニュアルがうまく機能するとは限らない。現場で現実的にマニュアルによる対応をしようとしても、マニュアル通りに対応できることの方が少ないと感じた。防災に関する人材育成が必要である。少なくとも、最低限自分で必要なものを持ち出せるように備えてほしい。また、平常時から避難所、避難経路の確認をすること、どのルートが安全か、危険なブロック塀がルートにはないか、そういった視点で歩いて確認することも重要である。被災時の安否確認は171で確認でき、毎月15日など体験ができるので、家族で使い方を体験しておくこと重要だ。更に、警戒レベルに応じた避難の在り方が異なっているため、状況に応じた避難を行う備えをしておく尚良い。このような細かな備えが、災害時に自らの命を救う一助となる。</p> <p>想定外とは、想定を怠ったものの言い訳である。誰かがやるだろうは誰もやらない。すべての防災は事前対策にある。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>災害が発生した時は落ち着いて行動し、自分の命は自分で守るよう努力しないといけないと思った。防災・非難に関するマニュアルが欲しいと思う。</p>



開催地名：埼玉県深谷市	
開催日時	令和4年2月16日（水） 17:30～19:00
開催場所	リモート開催
語り部	上野未生 （岩手県大槌町）
参加者	市職員 200人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員の災害に対する危機意識を啓発する機会が少ない ・ 避難所運営等の災害対応を経験している職員が少ない
内容	<p>(1) 東日本大震災時の記憶</p> <p>東日本大震災の被災直後、盛岡や花巻市など岩手県の中心都市である内陸部と、沿岸部の被害が深刻である地域との距離が大きく開いていたことで、都市間での連絡がつかなくなってしまった。盛岡にある県庁以外にも振興局として横並びに県の機関が3つあるが、被災で県内の連携が取れなくなったことにより、岩手県では初動が大きく遅れることとなった。</p> <p>大槌町は役場にいれば地震でも安全であるという認識があった。しかしながら今回の災害は予想を遥かに超えた被害を出し、結果的に役場も壊滅的な状態となった。役場が機能不全に陥ったことにより、市民らは自分たちでの安全の確保が必要となっていた。このことが大槌町近辺での被害が大きくなった被害の一因であると思われる。</p> <p>(2) 災害時のマニュアル</p> <p>災害時の対応マニュアルで、高台で災害対策本部をたてることが記載されていた。しかし基準があいまいだったため、現場での判断が難しい状況にあった。上からの指示を待っていたが、指示はなく、何が正しい情報かも判断できなかった。津波が来ると思っているのに自身の避難を考える方も3割程度しかおらず、幹部に確認をしても職員避難の指示が出なかった。この経験からいつまで待機をするか、また待機をしても指示がない場合はどうするかの一歩踏み込んだ記述が必要だと強く感じている。</p> <p>(3) 避難における男女差</p> <p>地震が起きたときに男女別の行動の差異を調べると、女性の方が避難の準備をし、家族や知人の安全を確認し避難している傾向がある。女性は家族や近所の人から情報を収集し、男性は消防の車や人から公的な機関から情報を取るという差異もあった。避難のきっかけ自体も、家族または近所の人から「避難しよう」と言ったから、もしくは「避難していたから」という</p>

	<p>言葉が女性は圧倒的に多い。対して男性は1人で避難した方が3割、女性は一緒に声掛けをして逃げたので集団で助かっているか被災しているケースが多かった。</p> <p>(4) その後の地域防災活動</p> <p>町民の方の命も自分の命も守るのが公務員の方の仕事だと、公務員の方々には考えて欲しい。自分たちの安全も確保するためにはというのも逆算して、そのために市民にどのタイミングで、どういう行動を促さなきゃいけないのかを考えていただきたい。生き延びる最善の方法を取ることを役目として、町民の命も自身の命を守るというマニュアルを作成することが必要である。</p> <p>警報が出たときに逃げるということを心がける、逃げるという知識から行動に移すためには覚悟が必要である。平時よりも冷静ではなくなるので、事前に大切な人とのコミュニケーションを取っておき、避難のための確認をしておくことが必要である。</p> <p>また避難のときは一番自転車がとても有効であった。自転車の配分するのにも若手の役場職員が決断できず、配布がすぐできなかった。トップダウンの体制にもメリットはあるが、発災時には自らの考えで決断できるように育成することも、必要なことであることを覚えていてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>貴重なお話をお伺いすることができ、これからの業務に活用していきたいと思った。災害時において行政、民間企業・団体、市民など、それぞれは何を行うべきか、何を行わないべきかを、過去の災害経験をもとに講演していただきたい。</p>

開催地名：富山県高岡市	
開催日時	令和4年2月20日（日） 13:30～15:30
開催場所	ふくおか総合文化センター（Uホール）
語り部	齊藤賢治（岩手県大船渡市）
参加者	（市）防災担当職員、（地域）自主防災組織、防災士 約100人
開催経緯	<p>本市では、総合防災訓練やまちづくり出前講座を通じて、災害に対する知識の普及・啓発をはじめ、災害に備えた災害図上訓練、避難所運営訓練等を実施し、地域防災力の底上げを行っている。</p> <p>しかしながら、富山県は、近年大きな地震や津波の被害を受けたことが無く、また、台風による大雨・洪水災害に被災した経験が無いことから、行政・防災組織・住民ともに災害に対して現実味や危機感が乏しいといった課題がある。</p>
内容	<p>（1）三陸地方の教え</p> <p>岩手県大船渡市の東日本の太平洋に面する記憶では、昔から津波の被害が発生している。平成23年3月11日の東日本大震災時の大津波は、最大20メートル強あり、大船渡市では10～20mまで達した場所もあった。しかし、三陸地方に伝わる「津波てんでんこ」という教えにより助かった方が大勢いる。「取るものもとらず、肉親にも構わず、てんでんばらばらに1人で高台へ逃げろ、自分の命は自分で守れ」というものだが、このような考え方が、実際の災害時には重要になる。</p> <p>また普段から防災の知識を学んでいない人は、発災時にパニック状況に陥り判断もできづらくなる。避難場所までどのように移動するとどのくらいの時間がかかることも普段から把握し、訓練を実証することや高台に避難することを話し合っておくこともとても重要であった。</p> <p>（2）避難状況の実態</p> <p>震災時の沿岸では大津波警報が発令され、「高台に避難」という放送が流れた。津波は一瞬で湾口防波堤（昭和35年チリ地震津波の波の高さを基準となって作られたもの）をはるかに越えるほどだった。家や車なども流され、家の中にいれば助からないような状況がわかった。</p> <p>このような被害をもたらした震災で困ったこととして、電気、ガソリン、水が不足したことだった。普段からの備えや災害のときに役立つために水をためる容器なども用意されていると便利であると感じた。</p> <p>災害後2～3カ月は互いを知らない人々が、同じ空間で避難のために生活</p>

	<p>をした。その際にはトイレも十分に使用できず、各人のスペースをしっかりと確保されない、とてもつらい日々を送った。その後仮設住宅に入れたが、5帖2間でとても狭く、不便な生活が続くこととなった。</p> <p>避難マニュアルは行政で用意されていたとしても、マニュアルどころではなく、当事者が災害時に逃げるときに、防災グッズを持って逃げた方もいなかった。しかしこれは昭和35年度のチリ地震津波の際の結果として、すぐに逃げるということも認識されていたため、今回も物を持たずに、すぐに高台に逃げることを第一に考えた結果であった。</p> <p>(3) その後の地域防災活動</p> <p>震災後、100年先の人々にすべてを伝承することはできないが、「地震が起きたら津波が来る、すぐ高台へ避難、けして戻るな」と1人でも多くの方々に防災対策を伝えるため伝承し、お子さんや周囲の人々を通じて後世まで伝えて欲しいと考えている。</p> <p>震災時の巻き込まれた状況として、「逃げなかった」40%、「避難の途中」19.5%、「自宅などに戻った」5.9%、「帰宅途中」3.9%などという調査結果もある。これら70%強の方はしっかり逃げていれば助かった命だったのではないか。そのような状況を防ぐ「まさか」「ここまでは津波が来ないという思い込み」が危険なので、「必ず逃げる」ことが重要ということを知ってほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>新型コロナウイルスの感染拡大以降、地域の避難訓練も思うように実施できない状況が続いている。防災士として何かできないかと考えている。コロナの感染拡大が落ち着き次第、防災訓練の実施や、災害を記録した施設への訪問などを行っていきたい。</p>

開催地名：秋田県男鹿市	
開催日時	令和4年2月20日（日） 13:00～14:40
開催場所	若美コミュニティセンター
語り部	山田修生 （宮城県仙台市）
参加者	男鹿市民 100名程度
開催経緯	<p>今年度に入り、当市において同日に震度3の地震が2度発生しており、災害に対する備えは常に必要であるが、コロナ禍で訓練も実施できていない状況である。</p> <p>また、自主防災組織は、地域の安全を守るために基礎となる組織であり、防災の観点のみならず地域づくりの一環でもあり、組織の育成を促進しなければならない。当市は、少子高齢化により、一人暮らしの高齢者の増加、子供の減少は、地域の絆の弱体化に繋がっており、自主防災組織の要となる「防災リーダー」の養成が課題となっている。</p> <p>加えて、市職員においては、災害時には市内各地域において先に立つことを求められ、防災に関する知識を習得し、市職員一人ひとりが日頃から自主的な防災意識を持つことが必要であると考えている。</p>
内容	<p>(1)東日本大震災の概要</p> <p>東日本大震災は、2011年3月11日14時26分に、水深6,500メートルにある縦500キロ、横200キロの広さの海底プレートの跳ね上がりによって発生した。マグニチュード9に達し、1000年に1度の災害と言われている。1000年前に発生した大規模災害は、西暦830年に発生した天長大地震とされており、マグニチュード6を記録したと言われている。1997年に「当時の天長地震の被害を予測する研究」が行われ、全壊した戸数が約13,500棟、死者が約1,200という結果となった。東日本大震災は全壊した戸数が約13万棟、死者数が約18,000人である。</p> <p>(2)東日本大震災での体験</p> <p>地震発生時は、全く身動きがとれず、両手両足で何かにつかまっていなと立ってられない程であった。各地で地震に関する講演や研修を行ってきた身であるが、頭が真っ白になり、どのように対処すればよいか全く分からなかった。地下の排水管からは水が噴出し、電信柱などは倒壊して火花を散らしていた。町内会や自主防災組織などの団体で避難訓練を行ってきたが、家族・近隣住民など小単位で避難せざるを得なかった。津波が来ることを想定し、とにかく海岸からできる限り離れるように避難した。地</p>

	<p>震が収まった後、指定避難場所へ移動したが、津波が届く恐れがあったため、自衛隊のヘリコプターで別の指定避難所まで一人一人運んでもらった。周りの人は泣き叫んでいる人が多かったため、拡声器を持って避難民を鼓舞し、懐中電灯と携帯電話またはラジオを持って行動するよう指示した。</p> <p>(3)東日本大震災から学んだこと・取り組んでほしいこと</p> <p>東日本大震災は、災害対策を決して怠っていたわけではないが、これまでの取り組みが無効だと感じてしまう程の規模であった。同規模の地震・津波発生時は、「より遠く、より速く、より高く」を意識して、まずは自分の命を守ることを第一に考えて行動してほしい。避難時には、声が大きく統率力のとれる人が先頭に立つのが良い。気が動転している人が沢山いるため、混乱している人々を鼓舞することが大切である。</p> <p>今後、実施してほしい取り組みは、家族間で(可能であれば)1部屋を「自宅避難場所」として設定し、災害時に家族が集合する部屋を設ける事である。また、避難訓練においては、男性は働いている割合が多く、災害時には帰宅困難者になる可能性が高いことが考えられるため、女性中心の訓練を日中に実施する。それに伴い、防災メンバーや自主防災会会長などに女性を登用することも必要であると感じた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>有事の際、自宅内でも避難場所を考慮すべきであることは、見落としがちであると思った。また当管内の防災組織でも、女性リーダーの育成を進めていきたいと考えた。</p>



開催地名：神奈川県逗子市	
開催日時	令和4年2月23日（水） 10:00～11:30
開催場所	逗子市役所5階第5会議室
語り部	菊池健一（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織及び自治会町内会等の市民 50名
開催経緯	<p>東日本大震災発生直後は、災害対策への高い関心を見せていた市民であるが、災害発生の経年と共に市民全体の意識の低下は否めない状況である。また、本市の高齢化率は著しく、市民に最も近い共助組織である自主防災組織の存続も危ぶまれており、行政として推進している自助・共助への影響も深く、若手防災リーダーの育成が急務となっている。</p> <p>このことについて、例年開催している総合防災訓練等において、様々な取り組みを実施し、若年層の取り組みを図っているところであるが、実感が乏しいところであることから、過去、本災害伝承プロジェクトに当選し講演を開催させて頂く機会をいただき、開催告知直後から問合せがあるなどの近年にない高い関心を得られた本事業の実施を要望するところである。</p>
内容	<p>(1) 災害時の対応</p> <p>災害時の避難所では複数の町内会の方や近くにいた方が集まってくる。このため効果的に運営を行うには現場で迅速な判断と的確な指示をする必要がある。東日本大震災の経験から、避難所運営においては時間の余裕もなく、日頃からの訓練や地域コミュニティがいかに大事だとわかった。</p> <p>実際に災害になったときに公的機関は頼りにならず、大規模になればなるほど機能不全に陥ることが予想される。このため自助・共助が重要になる。</p> <p>(2) 東日本大震災から学んだこと</p> <p>チリ地震の時は何も知らないうちに地震が来て142名の方が犠牲になった。その後もさまざまな地震が続き2003年宮城県沖地震があり、死者28名が出た。その内18名が子どもで、ブロック塀の倒壊からの被害となった。建築基準法が分かり、ブロック塀に芯を差し込むことが決まるなど、震災を経験するたびに何らかの変化が生まれている。しかし、災害は常に我々の想像を超えてくることを考えなければならない。</p> <p>実際に東日本大震災で津波の被害に遭った中には、沿岸部のみではなく3km内陸の場所もあった。自衛隊は政府に映像を送り、政府のほうで対策</p>

	<p>を行っている。仙台の津波の高さは11mで、海の水が一つの壁になった。建築物を破壊するほどの威力を持った波が、890～900kmの速さで進んでいた。</p> <p>犠牲者数は仙台で918名、災害関連死245名だった。災害関連死とは、震災で助かったが、高齢者の方が寒さや肺炎などで亡くなっている。荒浜地域では190名が亡くなられた。荒浜地域では平地のためご遺体が発見されやすかった。建物の大規模半壊2万6,500軒。ライフラインはほぼ1カ月かかり、電気は11日、携帯は10日で復旧した。</p> <p>避難所に避難したのは高齢者や女性が多かったので移動にも時間がかかった。17時の時点で1,200名、翌日の朝には1,500名にもふくれあがっていた。体育館の中に指揮者もおらず混乱していた。</p> <p>仙台市では1週間道路も剪断されているため、自衛官や支援が来るのにも時間がかかり、避難した人だけで避難所を運営していかなければいけなかった。炊き出しを地元の民生委員や婦人部の方が、雪や雨が降る寒い中、朝4時から外で朝食をつくっていった。自宅避難の人まで集まってきて、避難所廻りをしていた方もいた。一番大変だったのが女性の下着や生理用品の準備がなかったことだ。今後も災害が発生することは間違いないことから、是非このような物についても準備をしてほしい。</p> <p>(3) 命を守るためにすべきこと</p> <p>被害を最小限に食い止めるため、日頃からの訓練と普段からの地域のコミュニティ、町内会活動に参加するなどのことを大事にしてほしい。防災訓練の多くは避難することに焦点を絞っている。しかし避難をした後の訓練も必要であることを覚えていてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>避難訓練については多くの年代の人々にとって馴染み深いものだと思うが、実際の災害時には避難をした先での対応も重要になることを実感した。</p>

開催地名：東京都稲城市	
開催日時	令和3年2月26日（土） 10:00～11:30
開催場所	町田市役所 3階 会議室
語り部	大内幸子 （宮城県仙台市）
参加者	稲城市消防本部防災課、稲城市自主防災組織（49組織） 約60名
開催経緯	<p>本市は、自主防災組織が49組織結成されており、避難所の設営運営に関する訓練については定期的実施しているところですが、しかし、1～2年で役員交代となる組織が大半であることから、継続して避難所設営運営訓練を実施し、地域の市民や自主防災組織等が、自らの地域の避難所を設営運営するという意識の向上に取り組むことが必要です。</p> <p>また、昨年より新型コロナウイルス感染症が流行し、市防災訓練において自主防災組織が避難所における感染対策を講じた訓練を実施しました。</p> <p>今後、感染対策を踏まえた避難所設営運営において更なる意識の向上を図る必要があります。</p>
内容	<p>(1) 福住町における自主防災組織発足の経緯</p> <p>「自分たちの町は自分たちで守る」を合言葉に日本一災害に強い町内会を目指すことになり、できるだけ行政に頼らない地域力、町内をあげての災害対策として始めている。</p> <p>災害のときに名簿がないと誰が被災しているかもわからないので、最初に要支援者の名簿作成や住民全員の名簿作成に取り組んだ。災害時相互共有協定を締結し、お互いできる範囲内での支援と交流、防災訓練に行ったり来たり施策をしたり、顔の見える関係をつくっていた。</p> <p>公助にも限界があり、公助も一緒に被災してしまうので、公助が来る間にどうするか、お互いに助け合う自助共助の取り組みが重要であることを教訓とし、男性主体の避難所運営よりも女性のリーダーがいればもっとスムーズに避難所運営ができたのではと思い活動を発足した。</p> <p>(2) 東日本大震災時の記憶</p> <p>3月11日被災時に訓練どおりに要支援者の安否確認を30分で終わることができた。普段から4～5人ぐらい要支援者の見守りをしていたので、名簿がなくてもすぐに駆けつけることもできた。</p> <p>避難所の開設を始め、小学校の避難所は2,000人近く避難者が殺到したため、立ち後れたが、町内では暗くなる前に炊き出しの準備をし、公園に手作りのトイレや災害時がれき置き場の設置を訓練どおりにすぐに始められた。</p>

	<p>(3) その後の地域防災活動</p> <p>久住町で 2003 年に自主防災組織ができ、次の年に新潟中越地震がおきた。自分たちでできることがないか回覧で支援金や支援物質を集め、夜中の 12 時に出発した。車やトラックに支援物質やいろいろなものを積んで新潟県小千谷市池原地区へ支援をするために向かい支援させていただいた。東日本大震災時は池原地区からの支援をいただいた。小千谷市の方たちが「7 年前のご恩を忘れません」と駆けつけてくださり、支援物資をいただけることになった。</p> <p>また防災訓練を 1 年に 1 回行い、その 2 カ月前に班長が班の確認と更新を行うことになっている。地域の名簿を充実し、地域の中での見回りの体制が生まれている。地域住民が自分ごととして、防災・減災を考えられるようにして、ボランティア活動や夏祭りやイベントで住民のコミュニケーションの構築を共に図っている。</p> <p>仙台市地域防災リーダー (SBL) という組織があり、この組織設立の効果は、自主防災組織の必要性和重要性が震災によって明らかになった。災害の規模が大きいと行政も大きな影響を受ける。そのような場合には自分たちの町は自分たちで守り、自分の命は自分で守る意識が重要だ。地域防災、自主防災のサポートとして、SBL の要請が始まり、地域防災力の強化につながった。</p> <p>また防災減災活動の報告をするために仙台防災 SBL ラジオを立ち上げ、各地域、各地区の SBL たちがどんな活動をしているか、仙台市民の皆さんにこの防災減災の大切さを広げるためにいまだに行っている。災害があったときは白い旗をたて安全をお知らせすることも行っており、このような地道な活動が災害時に大きな効果を発揮することをお伝えしたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>講演を通じて防災は常に危機意識を持つことが重要であると感じた。災害時の安否確認の方法について考えたい。</p>



開催地名：東京都八王子市	
開催日時	令和4年2月26日（土） 10:00～12:00
開催場所	八王子消防署
語り部	草貴子 （宮城県仙台市）
参加者	市内自主防災組織 100名
開催経緯	<p>現在市内の町会・自治会・管理組合の8割以上で自主防災組織が結成されているが、結成後の組織運営や継続的な活動に課題がある。</p> <p>各自主防災組織で実施する防災訓練の参加率の低下、参加者の固定化が進んでいる。</p>
内容	<p>(1) 福住町における自主防災組織発足の経緯</p> <p>東日本大震災時だけではなく、あらゆる災害をもたらす悲しみや苦しみやつらさを、今ここで住んでいて、そんな災害はないと思っていても、いつどこで被災するか分からない。被災時に自分が得た知識や知恵を冷静に発揮していただくことができれば、国や町が広める、防災、減災への一助になると考えている。様々な目線からの防災減災について考えるきっかけをつくることができればと思い自主防災組織を発足した。自主防災組織組合をつくり、避難所にいる間の問題や生活の悩みについて、女性コーディネーター6名が対応していく活動を始めた。</p> <p>(2) 東日本大震災時の記憶</p> <p>仙台市泉区は人口21万5,000人の仙台の副都心、ベットタウンである。仙台は5つの区に分かれ、泉区は内陸部であるために、東日本大震災において津波の被害はなかった。</p> <p>発災後、すぐに避難をした。避難先では避難者の中からリーダーとサブリーダーを決め、町内会はサポートするかたちで運営に入った。リーダーとサブリーダーの指示に従うようにお話をし、「指示に従わない人は出ていって構いません」とお話ししたところ、出て行った夫婦もいた。</p> <p>電気は2～3日、水道は3～4日、ガスは1カ月で復旧された。各自で持ち寄った材料で卓上コンロを使って子どもたちが料理をつくるなど、ほのぼのとした時間も取れた。支援物資の引き取りで支援を受けたのは12日13日の2日間だけで、その後は各家庭で対応していただいた。</p> <p>非常事態で避難所の中で、思いがけない言葉をかけてくれる方や自分の権利主張だけの人、外国人の方の食べ物問題や宗教問題など、集団生活で人間のいろいろな一面が見えた。</p>

	<p>(3) その後の地域防災活動</p> <p>市ヶ坂東町内会は仙台市泉区東部に平成 20 年に設立した加入数 186 世帯の町内会である。働き盛りの 40 代 50 代の方、または単身赴任の家庭が多い中で、必然的に私たち女性が立ち上がり、「防災・子育て支援・ふるさとづくり」を掲げてオリジナリティのある町内会をつくりあげた。</p> <p>役員 9 名全員が女性で、設立 2 年目に建設した集会所のために銀行ローンも組んで集会所建設にこだわり、女性向けの過ごしやすい空間を主婦がつくっている。総会を毎年 2 月の始めに開催し、行事はなるべく卒業式、入学式、転勤、引っ越し、受験のときにはせず、町内会、役員会は月 1 度行っているが、あくまでもボランティアでできることを無理なく行うとして活動をしている。防災、減災についてのクイズなどや、大声を出すような訓練、防災マップの作成、自身でできることのお知らせ、防災時に楽しめるカルタ作成などを行っている。</p> <p>現在仙台市では 700 名を超えるメンバーで、自分たちの地域は役所ではなく、自分たちで守るために地域防災リーダーの養成を行っており、地域の防災時に備え、避難所の規格・運営で地域を引っ張っていく訓練活動を始めている。</p> <p>自分たちの特性を考えて、身の丈にあったことを実践していくことの大切さ、防災、減災を考えて行くと健康な体がなくてはならないということで、足腰が丈夫じゃないと避難もできないので、日頃からの運動や「津波でんこ」も大切であるということ伝えていた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>有事の際、自宅内でも避難場所を考慮すべきであることは、見落としがちであると思った。また当管内の防災組織でも、女性リーダーの育成を進めていきたいと考えた。</p>

開催地名：長崎県小値賀町	
開催日時	令和4年2月26日（土） 10:00～11:30
開催場所	小値賀町離島開発総合センター
語り部	上野未生 （岩手県大槌町）
参加者	約50名
開催経緯	災害に対し住民の自助、共助の意識があまり高くないこと。
内容	<p>(1) 震災当時の記憶</p> <p>海外で医療系の仕事をしており、震災時に国際 NGO 経由で派遣された先が大槌町であった。被災時はベトナムにおり、被災直後に大槌町に派遣され、ボランティアセンターの立ち上げや避難所の非物資の再配分というプロジェクトを立ち上げ、NGO で運営していた。一時大槌町を離れたが、現在の団体にコンサルのような形で入り、その後団体の代表理事をしている。</p> <p>被災当時の大槌町は8月の選挙後まで正式な町長が不在であったため、仮の町長主導によって業務上の指揮はとれたが、復興に向けての指揮まではとれず、行政主導による復興の計画は10月まで、行えなかった。</p> <p>(2) 大槌町が直面した困難</p> <p>岩手県は北海道の次に大きい県で、四国と同じぐらいの大きさの県である。そのためガバメントも大きく、情報発信も厳しくなった。そのような中、リアス海岸に面している地域が被災による大きな被害を受けた。大槌町が初めてニュースで放送されたときには「大槌全滅しました」と流れた。大槌町からの外部発信が一切できなかったので、県や町が全滅していると捉えられたのだ。情報がない場所は出したくても出せない状況であるということは、是非覚えていていただきたい。</p> <p>大槌町では震災から40分後に津波が発生し、この影響により中心市街地が大火災となってしまった。津波でプロパンガスが流れ浮いている状態であったため、ボンという音とともに爆発し、大火災が発生した。高台に避難している方は、津波の心配はなかったのだが、火災の火が高台へ上がってきたので、どこに逃げていいかわからない状況となった。消防も入れなかったことから自然鎮火まで待つしかなかった。</p> <p>火事にならなかった地区は火を暖気のために起こしつつ、街の人から見える場所で火をたいて避難所がある目印としてお知らせした。大槌町で亡くなったのは1286名で、人口の10%弱が震災で亡くなった。11年経過し</p>

	<p>でもいまだに行方不明者が30%以上となっている。しかしながら、学校では先生たちは津波の知識を持っていたため、震災発生時に学校にいた学校管理下の子どもたちの死亡はゼロであった。</p> <p>大槌町役場でも防災意識や知識があったが、すぐに高台に行くことができずにいた。地震情報で第一報では予想津波の高さ3~5mであり、防潮堤は6.4mの高さで守られていると思っていたので安心してしまったのだ。役場前で災害対策本部を作成したため、そこに津波が直撃したことで、当時在籍していた職員の3分の1が亡くなり、町長や幹部レベルでも7割が亡くなってしまうことになった。避難所は役場職員だけでは運営できず、様々な混乱を生む結果となってしまった。</p> <p>(3) 今後起こり得る災害に向けて</p> <p>地震や災害の影響で火事も起こってしまうということも念頭におき、災害対策を行うことが重要である。また日常の延長線上に非日常があるため、日常の過ごし方をはじめとした、普段の生活が防災においては重要である。</p> <p>現在、被災前、被災時、被災後で何がどうできるのかをまとめたマニュアルを発信している。「逃げる、諦めない、生き延びる」。これ以外に被災時にできることは何もないが、自身で生き延びないと何もできないということ、家族間でも「自分で逃げる」ということを被災前に必ず話し合うことなど、SNSなどで発信している。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>災害発生前の備えについて、町民へ随時広報していき防災意識の向上を図ること。また、役場職員においては被災時には自ら判断し決断しなければならない状況も考えられるため、通常業務から自ら考え、自ら判断できる人材の育成の強化も必要と考えている。</p>

開催地名：埼玉県さいたま市	
開催日時	令和4年3月14日（月） 14:45～15:35
開催場所	さいたま市産業文化センター
語り部	仲條富夫 （千葉県旭市）
参加者	自主防災組織、施設管理者、避難所担当職員 100～150人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・当区では近年地震による大きな被害が発生していないため経験が浅い。 ・行政職員・自主防災組織ともに震災に備える機運を高めることが必要。
内容	<p>(1) 現在の活動について</p> <p>震災時の困難や苦勞の記憶を次につなげること、また発信することを目的として、震災後の翌年8月5日に「希望の鐘」として活動することになった。災害時は心のケアも大事なので、いろいろな言葉をかけ合って協力するということが大切である。相談できる人や、大丈夫と声掛けできる人の存在が大切となることも分かった。</p> <p>(2) 避難後の対応</p> <p>震災後は避難先にキッチンがあり、町内の方と集まり、炊き出しや炊飯をすることができた。寒さのために体も冷えていたので、毛布も水も必要となったが、避難物資を受け取るには避難所に行くことが必要になっていた。</p> <p>被災後は震災の情報が入らないと不安になるので、情報入手手段も必要となっており、内容がしっかりしていることも不安を取り除くためには重要であった。発災から48時間後に、ボランティアの方がサポートに来て下さった。水分の配給については、ペットボトルの配給が当初は1家族に1本あったが、4日後は2本になり、その後、お茶やジュースが配給されるようになっていった。避難をしている最中には、避難している方々の人数の把握や避難時の混乱、また発災直後に車を使用することの危険性を覚えておいていただきたい。</p> <p>避難所に避難している方々は、小学校2校が集まる地区だったため1,800人という非常に沢山の人が集まった。災害時でも残念なことに、いろいろなことを勘違いする方も中にはいた。自身の地区では自分の家のように振る舞って、わがままを言う方も見られた。ボランティアの方が来て配給や支援などが行われていたが、食事の配給の内容を選んでしまう方も出現し、お弁当に人気殺到したり、おにぎりだと不要という人もいるなど、いろいろなトラブルや問題も起こっていた。また、仮設住宅の場所について文</p>

	<p>句を言う方も出ていた。当然のことではあるが、災害が発生している際には誰もが極限状態であることを、是非理解して行動していただきたい。</p> <p>(3) その後の地域防災活動</p> <p>何も訓練をしていない場合、災害が起こって避難の準備をしようと考えると、最短で準備をしても10分はかかってしまう。このため避難訓練などを行う際には、避難までの行動をスムーズにするための練習なども実施している。</p> <p>まずは「自分が助かる、近所の人助かる」ということを第一に考えていただきたい。大規模な災害が発生した場合、公助がくるまでには1週間程度かかってしまう。そのような点も理解した上で、周囲の方々と助け合うことの重要性を覚えて居ていただきたい。</p> <p>実際に、避難所ではさまざまな年齢の方が一緒に過ごすため、避難が長期にわたる場合はいろいろな対策が必要となる。また普段の暮らしという観点では、防災マップについて確認することも有効だ。いざというときに危険に対してどのように対応していくか。例えば地震後、津波の可能性がある場合に川を渡って避難する危険性なども、しっかりと理解しておく必要がある。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>避難所での非難が長期になった場合の防災会での役割対応に対し、伺った実例をもとにどのように対応するかを検討したい。またボランティアの方々への対応が難しいことを感じた。</p>